

プロローグ

「それでカイ。魔法院の人とはもう会つたの？」

シエルが尋ねると、カイが答えた。

「いやまだだ。近日中に着任されると聞いている
ここは神聖職訓練校。ホーリーエキスパート放課後。

下校中の生徒たちが自然に彼女を目で追う。長く、美しい銀色の髪を耳の上にかきあげた彼女は、神聖アストレア王国・第四王女——シエルファー・クランリアステリオである。

彼女はふうんとうなずくと、カイを見上げた。

「魔法院の人に迷惑をかけるのもほどほどにね？」力

「……なぜ俺が迷惑をかけることが前提なのだ？」

シエルはふふっと笑うと、鞄かばんを揺らす。

「あら？ だつて、カイはいつも騒ぎを起こすじゃないの」

「そうだつたか？」

そんな二人を見て横合いから声を掛けたのは、金色の髪に青い瞳ひとみの女子生徒。神聖御三家筆頭ソレル家長女、ミリア・ソレルである。

「シエル、もつとはつきり言わないとダメよ。——カイ、

また面倒ごと起こさないでよ？」

「面倒ごとを起こしているつもりはないんだがな……」
つぶやくように言るのは、カイ・ブラツディア。
最強の騎士、王宮聖騎士になるべく修練を続ける、王
国最高レベルの暗黒騎士である。

そんなカイを見て、二人は顔を見合わせた。シエルが
微笑みながら口を開く。

「そうね……最近はおとなしくしてると思うけれど」

ミリアが続けた。

「まあ、あれだけの騒ぎを起こしたんだから当然よね
え」

もうとうなるカイを、二人は目を細め、眩しそうに見
まぶ

上げる。

先日の演習地での事件は、国内的には「なかつたこと」にされており、目撃した生徒もいたものの、カイが腐屍竜ドラゴンゾンビを倒したことは意外なほど噂うわさにならなかつた。そんなことを言つても誰も信じなかつたし、本人の記憶もあやふやだつたからである。

王立魔法院は、カイが腐屍竜ドラゴンゾンビ戦で見せた力に興味を抱いており、彼を調査する手はずになつてゐるが、まだ魔法院からの調査員は姿を見せていなかつた。

事件以来、三人は大通りで待つてゐる王家の馬車のところまで一緒に下校するようになつていた。もちろん、シエル王女を守るためにある。

カイもミリアも、いざという時に備え、ターニャ学長から帯刀許可をもらつていていた。

二人は会話を続けながらも、常に周囲に目を配る。この二人の護衛を突破し、シエル王女を襲撃できる者はそうはないだろう。

校門を出て右に折れ、通りに向かつて歩き出したそのとき――

「む！」

迫つてくる風切り音に、最初に気づいたのはカイだつた。背中に背負つた両手剣を抜きざま――「ふっ！」――飛んできた棒状のものを叩き斬る。

地面上に落ちたものを見て、カイは息を飲んだ。それは

数本の矢^やだつた。

カイはすかさず、ミリアに叫ぶ。

「敵襲だ！ ミリア、シェルを頼む！」

「任せて！ 一シェル、こっちへ！」

シェル王女をミリアに任せ、周囲に目を走らせた。学園前の道は並木通りになつており、その向こうは低めの灌木^{かんぼく}が生い茂^{おしげ}つている。

「下校中のみなさん、退避してください！ 襲撃を受けています！」

ミリアの叫びに、生徒たちがざわめく。

「え！」「襲撃^{しゆげき}!?」「まさか……王女が!?」「私、先生呼んでもくる！」「王女を守れ！」

ホーリーキスパート

しかしここは神聖職訓練校。

生徒たちは毎日、実戦さ

ながらの授業を受けているのだ。慌あわてふためく生徒はお

らず、それぞれ自分ができる最善の行動を取つていた。

カイはミリアたちにうなづくと、周りをにらみながら

猛烈な速度で考える。

木々の向こうから矢を放つたのか……こんな学園の近くで？

追撃もない……不自然な襲撃だ。陽動か……？

カイは陽動の可能性も考え、深追いせずにその場で油断なく構えた。

「シエル！ ミリアと一緒に下がってくれ！」

「カイ……あれ……は？」

振り返ると、青ざめた顔のシエルが、街路樹の側を指差していた。カイは目を細める。

そこには何もない。誰もいない。だが一すぐに気がついた。

あれは……

ぶわあつとカイの髪の毛が逆立つ。

木の根の周囲の下草したくさが一足の形に潰れていて、ミリアが叫んだ。

「まさか……透明化!?」

「うそつ!」「完璧な透明化じゃん!」「そんなのあり!?」

「どの系列の魔法なの!?」

口々に叫ぶ生徒たち。

そう、見えない敵がーそこにある！

瞬間ー

「そこかあああ！」

疑う。

予備動作なしに高速移動する暗黒騎士スキル—
シャドウラッシュ
〈影走〉である。

カイは一步踏み込むと、下段から斬り上げ、すかさず斬り下ろした。見ていたミリアが目を剥く。その剣さばきの凄まじさに気づいたのは、ほんの数人だつた。通常、二拍にはくで出す剣撃を、カイは一拍いっぽくで放つたのだ。その恐るべき剣速と練度。

カイは、先日の腐屍竜との死闘をくぐり抜け、さうに強くなつていた。

しかしー

手応えがない！ ならば！

カイは辺りを薙ぎ払うように、豪快に剣を振るう。チツと何かがかすつた音がした。当たつた！ その機を逃すカイではない。耳を澄ませ、気配を探り、見えない敵に対し、最短で、最速の刺突攻撃を！

「ひゅうう！」

一鋭い呼氣とともに繰り出した。

何もない空間に、盛大な火花が散る。手応えあり！

しかしーカイにはわかっていた。これは防がれた感触。

カイは奥歯を噛かみしめた。

いまの一連の剣撃を凌しのぐとは一敵は手練てだれだ！

カイは一瞬、シエルとミリアを振り返ると、ぐつと腰を落とす。

シエル王女がカイの意図に気づき、皆に向けて大声を上げた。

「カイが本気を出します！ みなさん、絶対に近づかな
いで！」

そう。本気でいかなければ——この敵は倒せない！

「アームズアルタ武装鍊成」

両手剣の刀身に指を添わせ、一気に滑すべらせる。

「来い——死デスを招ブリングくもの！」

指を滑らせたところから、皮が剥けるようにして黒い刀身が現れ、カイの得物^{えもの}は見る間に無骨な両手剣に鍊成^{れんせい}されていった。

その剣の名は一死を招^{まね}くもの。カイが鍊成できる最強の両手剣である。

敵がどこにいるかわからぬ。だが、正面のどこかにいるはずだ——だから——

周りを囲めばいい！

カイはふうつと息を大きく吸うと、地面を強烈に蹴り

一行けつ！

一分身^{ぶんしん}した。

〈影走〉の合間に一瞬止まることで作り出す、二ンジ

シャドウラッシュ

（ぶんしん）

ヤのスキルを真似まねた疑似ぎじ分身である。敵がどこにいるかわからなくても、こうして囮おのむことはできる。

敵が身動ごぎする気配——逃のがすか！

相手を翻弄ほんろうするため、さまざまなモーションで一斉いっせいに剣を振るう力イ。じやりつと地面を踏む音が聞こえた瞬間しゅんまん——「見つけたぞ」一分身が消え、一つになる。

「……おい……いい加減に……」

何か声が聞こえたが、力イは躊躇ちゅうちょしなかつた。踏み込む。握り込む。腕の筋肉が盛り上がり、黒い刀身が揺らめくと、かすれ、にじみ、やがて——見えなくなる。

その技——

「くらえええええええつ！」

超高速で、無数の剣撃を放つ暗黒剣技——〈無尽〉。

必殺の刃^{やいば}が、肉を斬り、骨を絶ち、すべてを斬り刻む——はずだったが——

「なに?」

剣を高速で振るいながら目を剥いたのは、カイの方だつた。すべての攻撃が——あらゆる方向からの剣撃が——弾かれる。

カイの豪劍^{ごうけん}を防いだのは、敵の周囲に無数に展開された、青く輝く魔法陣。それは——

「〈対物障壁〉^{アンチ・マテリアル・シール}!」「なんて数だ!」「あの精度で展開できるものなの?」

周りで見ていた生徒たちが、口々に声を上げる。

アンチ・マテリアルシェル
スペルキャスター

あるが、扱いはかなり難しい。大きく展開すれば防御範囲は広がるが、その代わり防御力は低くなるからである。選択肢はおのずと、広く薄く守るか、狭く堅く守るかの二択となる。

しかし、ライの〈無尽〉は、一撃の強さと、攻撃範囲の広さの両方を併せ持っているのだ。

大きく展開すれば防御力が低くなり、威力ある一撃を防げない。

だが、小さく展開しても、広範囲の攻撃に対応できない。

ゆえに敵は、防御力を上げ、かつ広い範囲を守るため

一小さな〈対物障壁〉を、無数に展開することを選んだのである。

その瞬時の判断と、魔法構築の驚くべき精度。カイは剣を振るいながら、奥歯を噛みしめた。

と……届かない！

次第に連撃が鈍り、腕が重くなり、足が震え出す。体中の筋肉から酸素さんそが失われ、動かなくなつていいく。〈無尽〉の高速剣撃は、体内の酸素だけで放つ無酸素運動なのだ。ゆえに長くは保たない。

くつ、ここまでか！

カイは最後の力を振り絞つて背後へと大きく飛び、敵から距離を取つた。大きく呼吸し、失われた酸素を素早

アンチ・マテリアルシェル

く取り入れる。荒い息を吐くと、額ひたいを大粒の汗が流れた。

強い……

高度な透明化魔法、正確な戦術判断、驚くべき魔法構築の技量――

敵は、カイがかつて出会つたことのない、超絶技巧を持つ魔術師^{スペルキャスター}であつた。

――強敵だ！

周りの生徒たちが、次元の違う戦闘を目の当たりにして、静まり返つていた。

シエル王女が心配そうな表情でつぶやく。

「……せめて、相手の正確な位置がわかれれば……」

しばしの静寂。^{せいじやく}そして――「ひゅっ！」――カイは鋭い

呼気とともに、一気に間合いを詰めた。敵は魔術師。攻撃魔法を使われたら近づけなくなる。相手が本格的に魔法を使う前に仕留めなければならぬ。

カイは、敵がいるであろう位置の手前まで来ると、「ふつ！」——剣を地面に立てて土を掘り起こし、盛大に砂を巻き上げた。辺りに薄く砂煙すなけむりが満ちる。

見ていたシエル王女が声を上げた。

「うまい！」砂煙の中で相手が動けば——

ミリアがシエルにうなずき、続ける。

「そうか！ 敵の位置が——わかる！」

カイが砂煙の中に突進する。目の端はしの煙がふわりと動いた。

そこか！

ぎらりとカイの目が輝く。

たとえ、どれほど高い防御力を誇ろうと――

鋭く、踏み込む。

――それを圧倒的に上回る攻撃力を――

ぎりりと奥歯を噛みしめる。

――ぶつければいいだけだ！

カイは発動する。

剣を振りかぶりながら一スキルを発動する。

そのスキル――

己の生命力を使って、一撃の攻撃力を最大限に高める

そのスキルは――

「暗黒騎士スキル！　〈暗黒剣〉！」
　（ブラックディソード）

カイの筋力が上がり、攻撃力が一気に高まつた。
王国最高レベルの暗黒騎士が、己の生命力と引き換え
に手に入れた最大攻撃力。

この一撃にすべてを掛ける！

その攻撃力を、最速で、最短で、一挙に、一直線に

「いっかくかくかくかくかくかくかく！」

一ぶつける。

なんの工夫もない、一直線の水平斬り。しかし、それ
こそが最善の太刀筋。
渾身の一振りである。だが敵は一

こんしん

「ま、まさか！」「嘘でしょ!?」

シエルが、皆が、驚きの声を上げた。

大きな火花が飛び散り、辺りが眩しくなる。

力イの剣筋を阻むよう^{はば}に展開されたのは一五重の
〈対物障壁〉。

敵は術式を重ね掛けし、極小の〈障壁〉を、瞬時に五枚創りだしたのである。

最強の盾^{たて}が一五枚。

そして、力イ渾身の一撃は—

シエル王女が声を上げる。

「ああ……！」

一障壁を一枚破つたところで、阻まれていた。

「なんてこと……障壁を五重にするなんて!」「あれは……抜けない!」

シェルとミリアが悔しそうに口にする。

だが――

カイは――愚直なままでにまつすぐな暗黒騎士、カイ・

ブラツディアは――

彼の口元が不敵^{ふてき}に上がった。

すべてを掛けると言つたら――すべてを掛けるのである。

そう。カイは再び発動する。振り抜きながら発動する。踏み込みながら発動する。

そのスキル――生命力を攻撃力に変換する暗黒騎士ス

キルー

その名はー

「**暗黒剣**」オオツ！」

「なーなにいいいいつ!?」

敵が初めてー驚きの声を上げた。カイの攻撃力が一
気に高まる。強大になる。膨れ上がる。

敵が術式を重ね掛けしたように、カイも決死の覚悟で、
スキルを重ね掛けしたのだ。

大きな火花が飛び散り、障壁と刃がぎりぎりと音を立
てる。

そして、青く輝く最強の盾がー
「く……く……くそおつ！」

三枚目の障壁が砕け——

四枚目が壊れ——

五枚目にカイの刃が喰い込み——ついに——

「うおりやあああああああああつ！」

最後の盾が——砕ける。

硬質な音を立て、障壁がガラスのように割れ、粉々に
なっていく。カイが剣を振り抜いた瞬間——

「ぎやつ！」

敵が吹っ飛び、学園を囲んでいる高い壁が大きな音を
立てて崩れた。

一方、カイも苦しげにふらつき、思わず片膝かたひざをつく。

スキルの使用で生命力をほとんど失ったからだ。青ざめ

た額には大粒の汗が浮かんでいた。

荒い呼吸をなんとか落ち着けると、ふらつきながら立ち上がる。

「カイが警戒しながら敵に近づくと—
「……まつたく、ムチャクチャしゃがつて……これだから物理攻撃職は嫌いなんだよ！」

「⋮⋮⋮な」

瓦礫がれきの辺りが歪ゆがみ、にじみ、次第に焦点が合うようにして、敵の姿が現れた。

透明化を解いて、姿を現したのは—

「⋮⋮⋮な⋮⋮⋮なぜ、下着姿なのだ⋮⋮⋮？」

けほけほと咳せき込み、体を起こしたのは—場違いに

もほどがある小柄な女の子。なぜか服を着ておらず、下着が丸出しになっている。燃えるような赤い髪と、勝ち気そうに吊り上がった大きな目。あらわ顎になつた白い肌を隠す素振りも見せなかつた。

女の子が、ぼそりとつぶやく。

「なぜ……だと……？」

顔を上げると、彼女は歯をむき出しにして、カイをにらみつけた。

「おまえがやつたんだろうが、このアホ暗黒騎士つ！
あの妙な剣技のせいで服が飛び散つたじやないか！　くう……全部止められないとは……くやしいいいつ！」

この子が——暗殺者……？

ぐぬぬと壯絶な顔でにらむ彼女を見て、カイは一改
めて構える。

「しかし……半裸はんらの女子だからとて容赦ようしゃせん！」

事情を
聞かせてもらうぞ！」

「……はあ？　なに言つてんだ？」

矢が放たれたタイミングで透明化して潜んでいたのだ。
この子が怪しいのは間違いなかつた。

「問答無用もんどうむよう！」

カイが女の子を無力化するため、大剣を振り下ろそう
としたところで――

「おやめなさい、カイ・ブラッディア！　その人は暗殺
者ではありません！」

「な！　一学長殿！」

びたりと剣を止めて振り向くと、校門のところにターニヤ学長が立っていた。騒ぎを見た生徒が学長を呼びに行つていたのだ。

「で……では、この子は？」

学長が彼女を見て、うなずく。

「彼女はヴィレッタ・パウリ。王立魔法院から派遣された——調査員です」

「…………え？」

カイは、胸を張つてえりそな表情を見せた女の子に目をやり——

「えええええええつ!?」

大声を上げ、思わず後ずさりした。

「こ、この、半裸の女子が、調査員!？」

「半裸にしたのはー」

たたたたつと走つてくると、彼女は—ヴィレッタ・パ

ウリはー

「おまえだろうがあああつ！」

げほつ！

豪快な飛び蹴（げ）りをカイに食らわせると、見事な宙返りで着地した。

「……し……しかし、矢がー」

なおも口を開こうとするカイを見て、ヴィレッタは

「うるつさい！」

「つ！」

彼女が手を振った途端とたん、声が出せなくなつた。呼吸はできるのに声が出ない。

学長やシエル、遠巻きとまきに見ていた生徒たちも息を飲んだ。それは魔法の無詠唱発動むえいじょうはつどう。相手の声を奪う魔法——サイレンス沈黙あきらを掛けたのである。

しかし、カイは諦めない。なおも矢のことを問い合わせただすと、□をぱくぱくさせ、ジエスチャーで『矢を放つたのは、お前じゃないのか?』と尋ねようとするが——「ええい、うつとおしい！ そこで固まつてろ！」

ヴィレッタが無造作に手を振ると——カイの足元が

凍りついた。カイも、皆も目を見開く。氷属性魔法——
 フリージング
 〈氷結〉である。

すたすたとカイの脇わきを通り、すれ違いざまにげしげしつとカイを蹴ると、ヴィレッタは学長とともに校舎へと入つていつた。

シェルとミリアが、うううう言つているカイに近づき、目を見合わせると一長いため息をつく。

シェルが気の毒そうに声を掛けた。

「あ……ありがとう、カイ。矢のことは……後で聞きましたよ？　その……私を守ろうとしてくれたのは、もちろんありがたいし、嬉うれしかつただけれど……」

言いにくそうなシェルに代わって、ミリアが引き継つぐ。

「半裸の女の子に本気で斬りかかったのは、ちよつと私も
でもー引いたわあ……」

「うごうごお！」

心なしか周りの生徒たちも、冷ややかな目でカイを見
ていた。

半裸の女子にも容赦なく斬りかかる暗黒騎士——カイ・
ブラッディア。

あまりよろしくない噂が学園中に広がるのに、そう時
間はかからなかつた。

一章 ヴィレッタが来た

「これがシエル王女？ ふうん……。で、こつちが、あ
あ、ソレルの」

校門での一悶着ひともんちやくが済んだあと、学長室に集められたシエル王女とミリアは、着替え終わった女の子にじろじろと物色されていた。

「で」

ぎろりと見上げる彼女を、カイも思わずにらみかえす。「こいつが問題のカイ・ブラッディアか。……おい、で

かいんだよ！ もつと縮ちぢこまれ！ オレさまの首が痛く

なるだろ！」

カイは珍めずしく慄然ぶぜんとした表情で、片膝かたひざをついた。

「……これでいいか？」

「よしよし。なかなか素直すなおじやないか」

ペシペシと頭を叩かれ、カイは小さくうなる。シエルとミリアが、はらはらしながら二人を見ていた。

ターニャ学長が困り顔でため息をつくと、見かねて口を開く。

「ヴィレッタ・パウリ……そのくらいで」

「あ？ ああ、わかつた、わかつた」

彼女は離れ際に、カイのほつぺたをぎゅーつとつねる

と、ぎやははつと笑つて学長の机に、飛び乗るよう腰こし掛けた。学長が珍しく額ひたいの汗をぬぐう。

「さて……みなさん改めて紹介しよう。彼女は王立魔法院まほういんから来た調査員、ヴィレッタ・パウリです。透明化していったのは、この学園に目立たず着任するつもりだつたからだそうですがー」

「おまえのせいに台無しだぞ、カイ！　お気に入りの服もぼろぼろにしやがつて……おまえの調査は念入りにするからな！　ひん剥さえぎむいてやるから覚悟かくごしとけ！」

学長の言葉を遮つて、カイを怒鳴どなり散らす彼女こそ、王立魔法院はじまつて以来の魔法の天才——ヴィレッタ・パウリである。魔法を志す者で、彼女の名を知らない者

はない。

ヴィレッタ・パウリ。十七歳。
小柄こがらなこともあり、その年齢にしてはかなり幼く見えた。

シエル王女が思わず声を漏もらす。

「あの魔法の天才が……私たちと同年代だつたなんて
……」

「言つとくけど、オレさまの方が年上だかんな！」

「……さきほどの……矢やの件は……？」

カイがぼそりとつぶやくと、ヴィレッタは机から飛び降りて、盛大に舌打ちした。

「さつきから、矢ー矢ーうるつさいな！　もうわかつた

よ！ 矢だろ？」

ヴィレッタは、学長の机に置いてあつた矢を手に取る。

抜かりなく回収していたのだ。

「矢じりに毒どくはなかつたぞ。材質は一般的で、矢羽やばねだけ
ちよつと特殊だな……しかし力イ、おまえ、どんだけ高
速で斬きつてんだ？ 断面がきれいすぎて笑うわ！」 げら
げら！」

彼女が続ける。

「雑木林の方向から矢が飛んできたのは、オレさまもち
らつと見たから間違いない。追撃もなかつたし、敵の目
的は王女の殺害じゃないな……護衛の実力を確認したか
つたとか、そんなどこだろ」

「……お前が射たのではないのだな？」

カイが尋ねると、ヴィレッタは一おもいきり目を剥いた。

「はあああ!? あたりまえだろつ! どうしてオレさまが、こんな原始的な物理武器を使わなきやならないんだよ!? オレさまならもっと、すんごい魔法でトドメを刺しますー！」

ヴィレッタは、カイに顔を近づけ、歯をむき出しにしてにらむ。

「なんなら今ここで、オレさまの魔法がどれだけすごいか、お前の体で証明してやろうか? んん?」

本人は凄んでいるつもりだが、はた目には、かわいい

女の子が変顔へんがおをしているようになしか見えなかつた。散々、
悪態あくたいをつかれたカイだつたが――

「そ、うか……疑つてすまなかつた。服も吹き飛ばしてしまつて迷惑をかけたな。どうか許してほしい」

――そう言つて、素直すなおに頭をさげる。

「……う」

珍しい反応だつたのか、ヴィレッタは小さくうなつてから、ふんつと荒い鼻息を吐いた。

「まあ……わかれればいいんだよ……オレさまも鬼おにじやないからな！　そうだ、カイを調べるついでに、その矢のことも調べておいてやるよ。オレさまがいる間に、王女になにかあるのも嫌だしな！　――そういうわけだから、

ターニャん！」

勝手なあだ名で呼ばれて、ターニャ学長はかすかに嫌いやそうな顔をしながらうなづく。

「わかりました……。学園内では自由に動いてくださいつて構いません」

カイは改めてヴィレッタに頭を下げた。

「感謝する。ヴィレッタ・パウリ」

「ほんと……ありがとう。ヴィレッタさん」

シェルが言うのに、ミリアも□を開く。

「私にもなにができることがあれば言つてくださいね。

ヴィレッタ」

ヴィレッタはふんつと鼻息を荒くすると、ひょいと学

長の机に飛び乗つた。そして、腰に手をやり、三人を見下ろす。世界のことはすべて知つているとでも言わんばかりの表情をしていた。

「まあ、任せておけ！」それと、オレさまは簡潔さを好み！ これから、オレさまのことばー

にかりと歯を見せる。

「ヴィーと呼ぶがいい！」

* * *

ヴィーが学園に来てから数日後——
「おい、カイ！ あれは何だ！」

簡潔かんけつ

「ああ、あれは実技試験の準備だな。二年の先輩たちだろう」

「……ぐぐ、よく見えん……おい！ オレさまを持ち上げろ！」

廊下の窓際で騒いでいるのは、もちろん、魔法の天才ヴィレッタ・パウリである。カイをお供ともに学園内を見学中のヴィーは、校庭で行われている実技試験を見たいというのだ。

カイは彼女の脇わきに手を入れ、ふつと持ち上げる。その途端とたん――

「ぎやはばははつ！ このアホ！ 脇をくすぐるな！
降ろせ！ きやははは！」

大笑いして身をよじるヴィーを下ろすと、廊下を行き交う女子生徒たちがヴィレッタに手を振つた。

「ヴィレッタちゃん！」「お菓子かしあるよー、食べるー？」

「なんだおまえら、オレさまを気軽に呼ぶな！……で、どんなお菓子？」

あのあと、全校集会で生徒たいどたちに紹介されたヴィレッタは、そのえらそうな態度あいはんと相反する可愛かわいらしさで、たちまち全校生徒の人気ものになつていた。

「んまい！」

ヴィーが焼き菓子を平らげると、すぐに別の女子たちが「ヴィレッタちゃん、はいこれ！」と飲み物を差し出

す。ヴィーはぺろりと□の周りを舐めると、「ん」と言つて、ガラス瓶^{びん}に入つた透明な液体を飲み干した。その途端^な――

「ぐおおおおおつ！ なんだこれ！ しゅわしゅわするうううつ！ 喉^{のど}が！ 喉^{のど}がああつ！」

喉^{のど}をかきむしるようにして大声を上げる。周りの生徒たちが一斉^{いっせい}に声を上げた。

「あははは！」 「もう可愛いすぎつ！」 「なにこの可愛い生き物！」 「ふおおおおお！」 「ヴィレッタ殿、ばんざあ――いつ！」

ヴィーはげほげほど咳^{せき}込み、涙目^ふになりながら、カイの腕に顔を押しつけ、□の周りを拭く。

「うう……なんだ、これは」

「炭酸水たんさんすいだろう。……それより俺の服で□を拭くな」「カイ！ おまえ、わかつてて飲ませただろ！ この、しゅわしゅわするやつ！」

そう言うと、ヴィーはもう一度、恐る恐る飲み物を□に含んだ。そして――

「ぎやああああ！ しゅわしゅわするうううつ！」

あははははーまたも一斉に周りの生徒たちが声を上げる。

ヴィーが□の周りをまたカイの腕で拭きながら、ガラス瓶に目をやつた。

「んーむ。しかしこれは、けつこう癖くせになる味だな……

よし、今度、研究室で作つてみよ。ほんと外にはいろんなものがあるな！」

カイは、ヴィーをしばりく見下ろすと、気になつていたことを尋ねた。

「なあ、ヴィーはいつから魔法院にいるんだ？」

彼女は、空からになつた瓶を女子生徒に放り投げると答えた。

「あ？　生まれたときからずっとだ。オレさま、あそこで育つたからな！　あんまり外にも出たことないし！」

カイは驚いて、ヴィーに目をやる。

「ヴィーの両親は？」

「いないつていうか、知らん！　オレさま、拾われつ子

だから！」

「拾われつ子……そうなのかな……」

おそらく両親に何かあつて、赤ん坊のころに魔法院に預けられたのだろう。ずっと魔法院で育つたとすれば、ヴィーがその年齢にしては幼く、世間知らずなのもうなづけた。

カイが小さくうなると、ヴィーはぎろりとカイを見上げる。

「おまえ……もしかして、オレさまが可哀想かわいそうとか、不憫ふびんとか思つたんじゃないだろうな？」

カイはすぐに首を振る。

「いや。ヴィーのご両親は、天才として育つたヴィーの

ことをきつと誇りに思うだろう。俺が親なら間違いなく
そう思う

ヴィーはしじばらく驚いたような目でカイを見上げると、
ふんつと鼻から息を吐いた。心なし、彼女の表情が緩む。
「なんだそれ？ 変な奴う！」

カイが納得したような表情でうなずいた。

「そうか……ヴィーはずつと魔法院にいたから一常識
にうといんだな」

「はああああ!?」

ヴィーが、思いきり心外そうな顔をして叫ぶ。

「おまえにだけは言われたくないよ！ オレさまのへ障
壁」をスキル重ね掛けで破るようなムチャクチャな奴

が常識とか云うな！　ーおい！　ちよつとじつとして
ろ！」

そしてー

廊下を歩いてきたミリアが立ち止まり、声を掛けた。

「……カイ、あんた何やつてんの……？」

隣にいたシエルが眉まゆをひそめる。

「なぜ、ヴィーと一抱き合っているのかしら……？」

カイが苦々しい表情で答えた。

「……言つておくが、これは抱き合つているわけではない。ーおい、ヴィー、登るな！」

二人に気づいたヴィーが□を開く。

「おう！　シエルとミリアか！　いまこいつって……ん

しょ、んしょ……カイを登つてるところだ！　おいデカ物！　腕を出せよ、登りにくいだろ！」

制服を引っ張り、カイの腕を足場にして、ヴィーはもぞもぞ動いていたが、やがてカイの肩かたのところまで登りきると、頭を挟んで座り込んだ。いわゆる肩車かたぐるまである。

「おお高い！　すつげー！　遠くまで見えるぞ！」

はしゃいで声を上げるヴィーと、珍しく不機嫌ふきげんそうにうなるカイ。周りの生徒たちも、シエルやミリアも、なんとも言えない目でカイを見ていた。

ミリアがため息をつく。

「カイ、あんた、めちゃくちや目立つてるわ……恥はずかしいから離れていい？」

シェル王女が続けた。

「また、よからぬ噂うわさが広まりそうね……」

二人が言うのに、カイはさらにつなる。

「仕方がないだろう。ヴィーの世話をするよう学長に言
われているのだから……いて！　おい、耳を引っ張る
な！」

「操縦そうじゅうだよ、操縦！　カイ、左に進め！　ぎやはばははは
つ！」

ご機嫌でカイを操縦するヴィーに、カイは従いながら
も尋ねた。

「なあヴィー、見学もいいが、俺の調査と、先日の襲撃
の件はどうなつてるんだ？　おまえ、仕事してるのでか？

「いててつ！」

両耳を引っ張られて、カイは声を上げる。

「仕事してるかだつて!? オレさまがただ遊んでるだけだと思つてんの!?」

「……違うのか?」「違うの? ヴィー」「カイで遊んで

ただけじやん……」

三人に言われ、ヴィーはう一つとうなつた。

「んなわけないだろおおつ! オレさま天才なのよ、天才!

——カイの件は、ここ数日で目撃者に改めて事情聞いてまーつす! ——それと! シエルの方は、矢の

素材を調べてんの!

矢軸^{やじく}

けど、矢羽はちょっと特殊だかんな! あれはきっと出

どころがわかると思う！」

すらすらと言つヴィーに、三人は驚きに目を見開く。
さすがは天才。ここ数日、校内を見学しているだけだ
と思っていたが、やるべきことにはすでに着手していた
のだ。

カイはちらりと上を見て、うなずく。

「そうだつたのか……すまん、ヴィー。俺は、おまえが
ただぶらぶらして、遊び呆けているだけだと思つていた
ぞ……」

「舐^なめてんのか、オレさまを！　ぶらぶらしてんのも意
味あるつづーの！」

そう言つと、ヴィーはカイの耳にがぶうつと噛^かみつい

た。

「わかつた！　わかつたから噛みつくな！」

シエルとミリアが目を見合させたあと、王女が口を開く。

「そうだつたのね……私、学園を見学しにきたお上りさんみたいに思つてたわ……」

ミリアがうなずきながら続けた。

「私も。カイをこきつかうのが楽しくなつちやつたのかなあつて……。カイはいじりがいがあるから」

ヴィーが不機嫌そうな顔で口を開く。

「……おまえら、ほんとは、オレさまだが天才だと思つてないだろ……？」　一まいいや！　おーつし、今日は

カインち行くぞ！」

三人が目を見合わせた。カイが上を向いて尋ねる。

「……なんだつて？」

「おまえんちに行くつて言つてんだよ！　おまえのか一
ちゃんにオレさまが行くつて言つとけ！　ごちそう用意
すんだぞ？　——今夜はオレさまの——」

ヴィーが満面まんめんの笑みを浮かべ、カイの背中で両腕を広
げた。

「——歓迎会かんげいかいやるからな！」

三人はしばらく黙りこむと、渋い表情しぶでうーんとうな
る。

皆の思いは同じだった。

歓迎会つて……自分で言い出すもの……？

* * *

「でー

ブラツディア家。カイの自室。

シエルとミリア、ヴィレッタと別れ、自宅に戻った力
イだつたがー

部屋に入るなり、カイはベッドの上に目をやつた。ぼ
りぼりとお菓子を食べ、口の周りを粉こなだらけにしている
のは誰あろうー

「……なぜいる？　あとで来るんじゃなかつたのか」

「あ？ オレさまは好きな時間に来るんだよ！ 自由なの！ なぜなら天才だから！」

「つらさきほど別れたらばかりのヴィレッタである。ヴィーは手で□の周りを拭くと、ベッドに大の字になり、くふふと笑った。

「おい、この家の対人結界強すぎて、ちょっとだけびびつたぞ？ このオレさまが、一重の解錠術式かいじょうじゆしきをぶん回さないと解除できない結界つて……あれ、おまえのかーちゃんの仕業か？ 何者だよ！ オレさまが部屋に入るなり、にこにこしながらお菓子持ってきたぞ？」

「窓から入ってきたのか……？ 普通に玄関げんかんから入れよ」

カイがジヤケットを脱ぎ、椅子^{いす}に掛けながら続ける。

「それで？　歓迎会の主役だから早く来たのか？」

「はあああああああつ!?　んなわけねーだろおおおつ！」

突然、枕^{まくら}をぶん投げて大声を上げるヴィーを見て、カイはもうとうなつた。

「……なぜキレる？」

「オレさまは忙しいんだよ！　一分一秒を争う感じなの！　ああもう！　大声出したらちよつと疲れちゃつた……もう寝よ……明日も早いし。おやすみー、ぐう

⋮⋮

毛布をかぶるヴィーに目をやつたあと、カイが構わずベストを脱ぎ、シャツを着替えようとすると—

「起こせよおおおおおつ！」

がばつと起き上がつたヴィーに驚いたカイは、目を細めて彼女を見る。

「……なぜそんなこしばい小芝居こしばいをする？」

「う……うるさいんだよ！　その……あれだ！　友だちのいない哀れなおまえとちよつと遊んでやろうと思つただけ！　……はあ、もう寝よ……おやすみ……」「

ぐうとまた毛布をかぶつたヴィーを見て、カイはため息をついた。彼女は薄目うすめで、カイの様子をちらちらとうかがつてゐる。カイはベッドに近づくと、毛布越しにヴィーの体を揺すつた。

「お、おい、ヴィー！　寝たらダメだ！　寝たら死ぬ

ぞ！　起きろ、ヴィーー！」

がばつと毛布をはねのけたヴィーは、目を輝かせて、満面の笑みを浮かべていた。

「死ぬわけねーだろっ！　ここは冬山か！

そうなん
遭難中か？

ぎやははははは！

ツドの上で転げ回る。　　げほげほと、笑いすぎて咳き込みながら、ヴィーはベ

「ぎやはは！　いてつ、いてて！　笑いすぎて……お腹なか

いたい……あははは！」

しばらくして落ち着いたヴィーは、「あーわらつた……一年分くらいわらつた……」と涙目で言うと、はあはあ息を荒げたまま、ベッドの端にちよこんと腰掛けた。

はし

こし

きれいな髪の毛がぼさぼさになり、服も乱れ放題になつていてる。

「あ……ヴィー。もしかして、俺の調査に来たのか？」
「なんだ、やつとわかったのか……そうだよ！ 早めに来ておまえの診察しようと思つたの！ おまえも、自分の力のこと知りたいだろ？」

「そうか……小芝居までさせて悪かつたな……」

「小芝居は関係ないんだよ！」

カイはヴィーの前にしゃがみこみ、彼女を見上げる。

「それで、俺はどうすればいい？」

「そだな。とりあえず一服を脱げ！」

そのころ一階では—

「これは、シェルファーー王女！　お初にお目にかかります。カイの母ノーチェです。書状しょじょうでは御礼おんれい申し上げましたが、改めて息子の学園入学へのご助力、ありがとうございました。—それにしてもなんとお綺麗きれいな……お召めし物もとてもよくお似合にあいですわ。さあ、どうぞ中へ」緊張した面持しゆくじよちのシェルは、こほんと咳払いすると、腰を折り、淑女しゆくじよの礼を見せた。

「初めてまして。シェルファーー・クランニアステリオです。今夜はヴィレッタの歓迎会やしきということで、お屋敷やしきにお邪魔じやまさせていただきました」

シェルは上品な白いワンピースを身にまとっていた。

今夜は、家族を交えた気軽な歓迎会であり、あまりに華美なものはかえつて先方に気を使わせることになる——そう考えたシエルは、アクセサリも控えめにし、王族としては質素な、しかし上質な装いを選択したのだ。

あくまでも上品に、それでいて可愛らしく——

銀色の髪は、珍しくアップにして頭の後ろでまとめてシエル渾身のベストチョイスである。

北方でしか取れない逸品中の逸品である。いた。彼女の肌の色によく合う桃色真珠のネックレスは、

カイの母にお褒めの言葉をもらい、彼女は心中でガ

ツツポーズを取つた。

うふふ、勝つたわ！

何に勝つたのかは不明だつたが、彼女は心の中で勝利宣言をしつつ、静かに屋敷に足を踏み入れる――

そして二階では――

カイの傷だらけの体を見て、ヴィーは驚きに声を上げ

た。

「なんだこりや！　これぜんぶ自然治癒ちゆの跡あとか！　すげーな……神聖治癒魔法が効かないってのはほんとだつたのか……。でも神聖魔法は使えるんだろ？」

ヴィーはカイに近づき、面白そうに、ぺたぺたと傷跡を触る。

「ああ。以前は詠唱えいしょうしただけで気絶してたんだが……最

近は前よりは楽に使えるようになってきた」

「へえ……面白いじゃん」

ヴィーはそう言つと、じつとカイの体を見つめた。幼い表情が消え、魔法の研究者としての真剣な顔がのぞく。あまりにじつと見つめてくるヴィーに、カイは体を引きつつ尋ねた。

「なにか見えるのか？」

「あ？　ああ、オレさま——賢者だから」

「……え？」

カイが珍しく大きく目を見開く。

「えええええつー！ 賢者！？」

「セージ 賢者!?」

「セージ 賢者つてあれだろ？　すべての属性の魔法を使えると

いう！」

「ええい動くな！　そーだよ！　オレさま賢者セイジなの！」
賢者セイジを見るの初めてか？　……ま、そりやそうか……世界に数人しかいないスーパー・パーソナリティヨブだしな！」

王立魔法院が誇る魔法の天才、ヴィイレッタ・パウリ。彼女は数世紀に一人しか適性を持つ者がいないという超レアジョブセイジ、「V・9 賢者セイジ」である。

あらゆる属性の魔法を使いこなすほか、対象の性質を見極めることができ受動スキルや、数々の固有スキルを身につけていた。

「□だけじゃなかつたんだな……」

「……おまえ、ほんつとにオレさまのこと舐めてるだ

ろ？」

彼女は一度毒づくと、スキルを使つてカイの体内を探つていいく。

「知つてるとと思うけど、体の中には、魔力循環させ
る魔力経路つてのがあるわけ。例えるなら血液を運ぶ血
管みたいなもんだな。——カイの場合、暗黒力の魔力経
路は自然にできてたんだけど、神聖力の経路が使われて
なくて、閉じたままになつてたんだよ。——その閉じたか
とこに、ギューッて無理やり神聖力を流そうとしたか
ら、痛みとか気絶とかの症状が起こつてたつてわけ。こ
こまでわかつた？」

カイはヴィーの説明にうなづいた。

「なるほど……。じゃあ、俺が最近、神聖魔法をすこしは使えるようになつてきたのは、一度、強引に神聖力を流して、経路を開いたからか……」

「そーゆーこと。——でもだからって、腐屍竜戦ドラゴンジンビで見せたような力が使えるわけがない。だから他に理由があるはずなんだけど——なんか心当たりないのか、カイ?」

カイが思い出したように答える。

「そういえば戦闘の最中に、シエルやみんなから、アブンブン〈吸収〉を使って、生命力をもらひ受けたな……」

ヴィーが、むーっと考える顔になつた。

「にやるほど……。んとな、生命力には、神聖力つてよく混ざるんよ。だから生命力と一緒に、すんごい勢いで

神圣力を吸い込めば、経路はさらにきれいに開くだろうな。……でも、そのことと、カイの力はどう関係するんだ……？ むー……」

彼女はあごに指を当てしばし考える。その表情は真剣そのもので、幼さはまるで感じられなかつた。

「おーっし、鑑定使つてみつか！」

「鑑定？」なんだそれは？」

ヴィーが息を吐きながら、すでに集中するそぶりを見せる。

「人とか物とかの、秘密の性質つてゆーか、正体つづーの？ そういうの見極める、オレさじまの固有スキルよ！」

「……ほんとすごいんだな、ヴィーは……」

「オレさま天才だつて言つたろ！　一おつしや黙れ、

カイ。発動するぞ」

彼女は目を閉じると、詠唱した。

「――我が眼に宿れ真実の光――〈鑑定〉！」

ヴィーがゆつくり目を開くと、その瞳に赤く光る魔法陣が浮かんでいた。真実を見極める探索魔法陣〈真眼〉である。彼女はその眼をもつて、カイの魔力経路を探つていいく。

「うみゅう……やつぱり、神聖力の魔力経路は細つこいわりにはきれいに開いてるな……んで、これを辿ると……ん……暗黒力の魔力経路が見えてきたぞ。その先は――あ……？　えつ！　なんだこりや、交わつてる？

ウソだろ！」

「なんだ？」
珍しいことなのかな？

カイの問いに、ヴィーが大声を上げた。

「こんなんフツーありえんわ！ 神聖力と暗黒力つてい
うのは相反する属性力だろ？ だから、経路が交わるな
んておかしいんだよ！」 うわ、神聖力の細つこい経

路に、暗黒力の太い経路が絡まつてゐるぞ！

……あ……そうか！
こんな特殊な魔力経路してるから、

「カイには神聖魔法がダメージになるんだ！」

カイが驚いて尋ねる。

「なに！」ビックリしたのだ？

ヴィーがすぐに説明した。

「神聖魔法で治療したりするときは、神聖力の経路に魔力を注ぐことになるだろ？　だけど、カイの場合、暗黒力の経路が邪魔して神聖力が逆流しちゃうんだよ。それがダメージを引き起こしてたつてわけ！」

カイが、自身の神聖属性アレルギーの秘密を知り、目を見開く。

「そ……そうだつたのか……さすがは賢者セーヴィジだ！」

ヴィーが興味深い研究対象に興奮しながら、ざらに力の経路を探つた。

「くふふ、面白くなつてきたぜ！　この先、どうなつてんだ？　……うみゅう……二つの経路がらせん状になつて、絡まつて……それから……ん……？　え！　——お

わあああああつ！」

びくんつとヴィーの小さな体が大きく跳ね、彼女は目を見開く。

「ど、どうした!? ヴィー！」

「こ、これやべえ！ 魔法力が……吸われる！」うぐう

う！ ス……スキルを一強制解除おおおつ！」

ばたりと勢いよくヴィーが倒れ、カイはすかさず彼女を支えた。

「ヴィー！」

体を大きく震わせ、苦しそうにうなるヴィー。カイに抱きつくと、苦痛に耐えているのか、力いつぱい背中に爪を立てた。

「いてててててつ！　ヴィー、大丈夫なのか！」
顔を歪ませ、荒い息を吐いていたヴィーは、しばらくしてようやく落ち着き、はあはあ言いながら、カイの胸に体を預ける。

「び……びびつた……経路の先が——すんげ——深い闇みたくなつてて……ジヤッジメント鑑定で同調しそぎた……なんかごつそり魔法力うばわれたぞ……」

カイは、ヴィーの額に浮かんだ汗を拭き、彼女の震える体を支えた。

ヴィーは辛そうな顔をしながらも体を起こし、カイの胸元をにらむ。

「ど、どういうことだ……？　——待てよ……考えにく

いことだけど……おまえの神聖力と暗黒力の経路つて、先の方で一つになつてるんじゃないか？だから、かなりの深さまで神聖力を流すと、暗黒力と一緒にになつて両方が勢いを増し合う、みたいな……？」

……ということは、腐屍竜戦でおまえが見せた力は、おまえ一人で起こしたつて言うより！」

ヴィーがカイを見上げる。

「——おまえに神聖力を与えた奴が——鍵^{かぎ}を握つてゐ

……？

「鍵を……握つて……」

「——なにを握るって？」

突然の声に、カイが窓の方に目を向けると、そこにい

たのはー

「なんだ、ミリアか。お前、また窓から」

窓をがらりと開けて入ってきたのはカイの幼なじみ、
聖騎士パラディンの中の聖騎士パラディンミリア・ソレルである。ベッドの上
には、上半身裸のカイと、はあはあ荒い息で頬を上気さ
せたヴィー。はた目には抱き合っているように見える二
人に目をやり、彼女は一度、あはつと笑うとー
ー腰のレイピアを抜刀した。

「……おい、落ち着け。なぜいきなり抜刀する?」

ミリアは目を丸く見開き、カイにレイピアの纖細な刃せんさい やいばを向ける。

「……カイ……あんた……ヴィーに何したの……?」

「勘違かんいするな！ これは診察だ。なあ、ヴィー？」

ヴィーは急激に魔法力を奪われた影響で、ふらつき、カイの胸にこてんと倒れた。

「うう……吸われすぎた……」

ミリアの髪の毛が一ぶわあつと逆立つ。彼女の猫のような目が、きゅうと吊り上がつた。

「ああそう！ お医者さんごっこつてわけ！」 カイ

⋮⋮あなたはああああつ！」

「おい、ミリア！ 話を聞け！」

彼女はレイピアを垂直に構えると一詠唱する。

「一穢けがれなき我が刃に顯現けんげんするは神なる輝き！」

ミリアのレイピアが、白く輝いた。

「魔法剣——〈光輪^{ハイロウ}〉！」

一方、一階では——

「あの、お母さま。私のことは、どうぞ気軽にシェルと呼んでください。それに——王女としてではなく、カイの級友として接してもらえると、とても嬉しいです」

シェルが言うと、カイの母ノーチェは、んーつと頬に指を当てた。

「そう？ ジやあ、いつそのこと、シェルちゃんーつて呼んでもいいかしら？ 私は準備があるから、その間、カイの部屋で待つてもらえる？ 二階の奥だから」「え！ 力、カイの部屋で!?」

カイの母、ノーチェにそう言われ、しばらく迷つたのち、シエルは—

「わ、わかりました、お母さま！ 行つてまいります！」
一決死の覚悟かくごでうなづく。

ノーチェは王女に微笑ほほえむと、台所だいどころに戻つていつた。リビングに一人残されたシエル王女は、数回深呼吸すると、部屋を出て階段に足を掛ける。

男の人の部屋に入るなんて……初めての経験だわ……どうしよう……でも—

彼女はキッと顔を上げた。
がんばれ、私！

シエルは、さながら迷宮に入る冒険者のように、唇くちびるを

引き締め、体を硬くし、どくどくと脈打つ心臓の鼓動を感じながら、階段を登つていいく

そして二階では――

「おい！ 部屋で魔法剣を使うなど言つただろ！」

魔法剣〈光輪^{ハイロウ}〉――邪悪なる者を退ける強力な神光をまとつた魔法剣である。暗黒属性であるカイには、めつぽう効果があつた。

「カイ！ せめて一撃で終わらせてあげる！」

「殺す気か！」

そのとき――

「うるつさいなあ！ またゲス聖騎士^{パラディン}が来てんでしょう！」

「……って、ええええっ!?」

がちやりと部屋の扉を開けたのは、黒髪ツインテールのカイの妹、天才死靈術師クロエ・ブラッディアである。彼女は扉を開けたまま、口をあんぐり開いて、上半身裸のカイと、なぜか兄と抱き合っている、ぐつたりした女の子に目を向けた。

「誰!? つていうか、お兄、その子と何してんの!?」

ミリアが、クロエに目をやり、悲しそうに首を振る。

「クロエ……残念だけどカイは……その子とお医者さんごっこを――

「お……お医者さんごっこ……うそ……お兄……」

クロエが目を見開き、思わず後ずさりした。

「私たちでカイを止めてあげるしかないわ……。クロエ、
〈低級靈ゴースト〉で足止めして！」

クロエの顔が、悲しみに沈んだあと一転、激怒の表情に変わった。

「お兄の一バカあああああああつ！　来い－
〈溺死靈ドラング〉！」

ぬうと床から現れたのは、びしょ濡れの長い髪を持つ、青白い死靈。

「クロエ！　よりもよつて〈溺死靈ドラング〉を出すな！　掃除が大変なんだぞ！」

涙目でカイをにらんだクロエは、意を決したように兄を指差した。

「〈溺死靈〉——死の抱擁！」

抱きついた者の周囲に水を作り出し溺死させる、
〈溺死靈〉の固有スキルである。

「追い詰めるわよ、クロエ！」「うるさい！ わかつて
る！」

カイがヴィーを抱えて立ちすくむなか、息の合つた
連携バトルに突入する二人——

そのときである。

「カイ、どうしたの!? 開けるわよ！」

扉を開けて入ってきたのは誰あろう——

「あれ? シエルじゃないの!」

「なにその可愛い格好！」

ミリアとクロエが一時手を止め、彼女に目を向ける。

「神聖アステリアア王国第四王女、シェルファー・クランニアスティリオであった。」

「な、なんだ……二人もいたんだ……そう……ま、まあいいわ。それで？　歓迎会なのに何を騒いでーえ？」

シエルは上半身裸のカイを見て、カイに抱きついているヴィーを見て——魔法剣を構え、死靈を召喚した殺^{しようかん}やる気まんまんの二人を見て——

「えつと——えええええつ!?　これ、どういう状況!?

そこで——ふらついたヴィーが倒れこみ、カイのスラックスをつかむと——

するうつ。

ヴィーがそのまま倒れると、カイのスラックスが脱げ
正面からそれを見たシェル王女は一
目を見開き、息をのみ、顔を手で覆おおうと――「き」――
沈黙。そして――

「きやあああああああああああつ！」

盛大な悲鳴を上げた。「あらら……」「お、お兄！」ミ
リアがにやにやし、クロエが指の間からちらちら覗のぞき、
シェル王女が卒倒そつとうする。

カイはすかさずシェルに駆け寄った。

「シ、シェル！ 大丈夫か！」

「#――\$%&*#ツ！」

シェル王女がわけのわからない悲鳴を上げた瞬間——
「なにやつてるので……カイイイイイイイイイツ！」

「……え？」

カイが見上げる先にいたのは誰であろう——カイの母、
ノーチェ・ブラッディアである。

手にお玉を持つた彼女は、悪鬼あつぎのごとき表情でカイを見下ろしていた。まさに、きついしつけをする前の母の顔である。

「女の子にいい！ なんでもの見せてるのおおおお
つ！」

「い、いや！ 母さん！ これは！」

「問答無用！」

ノーチェが、杖^{つえ}がわりにお玉を振り下ろす。瞬間——

「ぐうううううううううつ！」

カイがべちゃりと床に這^はいつくばると、みしみしと床が鳴り、やがて床が抜け、カイは——

「ぎやああああああつ！」

——階のリビングに落ちていった。

これは、上級黒魔道士の持つ広域攻撃魔法——
〈重力崩落〉^{グラビティフォール}である。

この魔法を、このように一点に集中させるのは非常に難しいのだ。

* * *

「カイ。あんたがちやんと言わないから、こういうことになるのよ？」

ミリアが言うのに、クロエもうんうんうなずいた。

「ほんと、ほんと！ ゼンぶお兄が悪いんだから！」

カイは、母の料理をほおばりながら、もうとうなる。

「だから話を聞けと言つただろ……」

いろいろな誤解がとけ、カイの家族や王女も揃そろつたところで、ようやくヴィレッタ・パウリの歓迎会が始まつた。

シエルが、やや気まずそうにしながらも、カイに話しかける。

「カイ、さつき二階から落ちたの……大丈夫だつた？ 怪け我がしてない？」

「ん？ ああ。体のあちこちは痛いが問題ない。それより……悪かつたな……」

「……えつと……それはもう……ね？ カイ」

目を逸そらしたシエルと、なんとも言えない顔のクロエ。ミリアが二人をにやにやしながら見ていた。そこで――

「なんだ？ オレさまがふらついてる間に、なんか面白

いことがあつたのか？ 一おい！ 教えろよ、カイ！」

大声を上げたのは、この歓迎会の主賓しゅひん――傍若無人ぼうじやくぶじんな魔法の天才、ヴィレッタ・パウリである。椅子に立ち上がり、隣のカイを見下ろしている。賢者セージだとわかつて皆

がたいそう驚くので、いい気分になつていた。

「食事中に立ち上がるなよ、ヴィー。あとで教えてやるから」

「あ？ 絶対だぞ！ —それにしても、おまえのかーちゃんの料理、うまいな！」

ヴィーは□の周りをべたべたにしながら、ノーチェの手料理を存分に味わつていた。ノーチェがサラダを取り分けながら、うふふと笑う。

「たくさん食べてね、ヴィーちゃん」

「おうよ！ オレさま、こ一ゆーの初めてだ！」

「こういうのと、こういう料理のことか？」

カイが尋ねると、ヴィーは首を振った。

「料理もそりだけど、オレさま、いつも一人だから！歓迎会っていうのは言葉としては知つてたけど、こういうものだつたんだな」

皆が、ヴィーに目をやる。カイが続けた。

「魔法院に、友だちとか仲間はいないのか？」

「は？ いるわけねーだろ。誰もオレさまについてこれ

ないからな！ 天才はいつも孤独なんだ！」

「そういうもののなのか？」

「そーゆーものなの！ 別に仲間とかいらねーし！」

食卓にしばしの沈黙が流れだが、カイの母が雰囲^{ふんい}気^きを変えるように、気さくに王女に話しかける。

「シェルちゃんは食べてる？ お□に合うかしら？」

シェル王女が、王国では珍しい魚料理に□をつけ、顔をほころばせた。

「ん……おいしい！ 私、こういう料理、初めてです！」

カイの母ノーチェは料理上手じょうずで、王国特産の肉料理から、辺境へんきょうの郷土料理まで、さまざまレパートリーを誇つている。王族がこのような庶民しよみんの料理を□にすることは滅多めったにないのだ。

ミリアがうなずき、□を開く。

「でしょ？ おばさまの料理は最高よ——毒さえ入つてなければね」

カイの父アツシュが目を細め、ヴィレッタを見た。「それにしても、魔法の天才ヴィレッタ・パウリが、こ

れほど若い女の子だつたとは……

「くひひ！ 驚いた？ 一カイのとーちゃんがめちゃ

くちや強いのもわかるよ！」

「ほう……賢者^{セージ}のスキルか」

ヴィーは続いてノーチエを見て、口を開いた。

「カイのかーちゃんもすげーな！ さつきの

〈重力崩落^{グラビティフォール}〉、精度調整してんだろ？

て最後に誤差修正しないと、あの精度にはならぬいもん

な！」

ノーチエが甘みをつけた炭酸水^{タンサンスイ}をヴィーのコップに注ぎ、微笑^{ほほえ}む。

「あら、よくわかつたわねー。ヴィーちゃんすごいわ

ー！

「まあ、オレさま天才だから！……それにひきかえ
カイはー」

ヴィーは隣となりのカイを、哀あわれなものを見るような表情で
見た。

「よわよわだのー、オレさまの〈障壁〉破るだけで
精せい一杯いっべいなんだから……。あー先が思いやられるわー」

「よけいなお世話だ。ーん……クロエ、どうした？
頬にソースをつけて……」

ずっとむつりとしていたクロエが、ヴィーに目めをや
り、ふんつと鼻から息を吐く。いつもなら、子ども扱いあつか
する兄に反発する彼女だが、いまはカイに頬を拭か

せて、勝ち誇ったような表情を浮かべている。

「ヴィーがじとりとクロ工を見て、口を開いた。

「あ？ 誰だおまえ？」

「……え？ あ、ごつめーん。小さすぎて目に入らなか
つたー。ー私はクロエ。お兄の！ 妹！ なんですか
ど？ あー、お兄がいつも私の世話を焼きすぎて困るわー、
ほんと困るわあー」

クロエは、ヴィーにちらりと視線線を送りつつ、兄に頼
む。

「お兄、それ取つて

「目の前にも同じ料理があるだろう？」

「そつちがいいの！」

「わかつた、わかつた」

カイがクロエに料理を取り分けると、ヴィーが珍しく、
むつとした表情になつた。自分でもどうしてそうなつた
のか、わからぬいような顔をしている。

「お、おい、カイ！ オレヤまにもその料理をよこせ！」
ヴィーが料理を指差すと、クロエがひょいとその皿を
持ち上げ、ヴィーに差し出す。

「はいどうぞ。……なまえ、なんだつけ？ ヴィレ……
チビれつた？ ぶつ！」

「ちがーう！ オレさまはカイに頼んでるのーー！」

「食事中に立ち上がるなよ、ヴィー！」

また椅子に立ち上がつたヴィーを、カイが注意すると、

彼女はうう……と歯をむき出しにしてうなり、おもむろにカイの腕に顔を押し当て□の周りを拭いた。

「ちよつと！　お兄になにやつてんの！　このチビれつた！」

クロエが声を上げると、ヴィーは一層むきになつて、顔をこすりつける。

そんな二人を見て、ノーチェが微笑み、ヴィーに話しかけた。

「ヴィーちゃん、そんなにカイのこと気が入つたの？　じやあいつそのこと——うちの子になる？」

「お母さん！」

クロエが母に噛みつくと、ヴィーが顔を上げる。慄然

ぶぜん

とした表情で答えた。

「……そいつと入れ替わりなら、なつてやつてもいい」

「私を里子に出すつもり!?」

「私を里子に出すつもり!?」
鋭く言い放つクロエに、シエル王女がぷつと吹き出し、
やがて――

あはははは――

釣られるようにして皆が笑いあつた。

夕食後、皆はリビングに場所を移し、食後のデザート
を楽しみながらくつろいだ。

カイが天井を見上げ、感心したようになる。

「それにしても、よく直せたな。ヴィー！」

さきほど抜けた天井は、何^ごともなかつたように見事に修復されていた。

「まあな。オレさま、あんまり〈復元^{レストア}〉うまくないけど」

賢者^{セイジ}の持つ〈復元^{レストア}〉は、局所的に因果^{いんが}を逆転させ、物体の修復などを行う時間干渉系魔法である。ヴィーは簡単に言つたが、それがどれほど高度な魔法なのかは、ライの母ノーチエが珍しく驚きの表情を見せたことでもわかつた。

ヴィーの口数が徐々に少なくなる。お腹もいつぱいになつて、眠くなってきたのだろう。

「……ねむい……もう、だめだ……」

こでんとカイの膝に倒れると、ヴィーはすぐに寝息を立て始めた。クロエが嫌な顔をしてヴィーを覗き込んだが、一あまりに無防備な寝顔を見て、ため息をつくと、彼女に毛布を掛けてあげた。クロエの方がよほどお姉さんである。

一息ついた皆はさもざまな話題に興じ、楽しい時間は瞬く間に過ぎていった。そして夜も更けてきたころ、歓迎会はお開きとなつた。

「カイ、ここまでで平気よ。ありがとう。今日は楽しかつたわ」

シェル王女を馬車まで送り届けたカイは、周囲を見回して□を開く。

「屋敷まで送らなくて本当に大丈夫か？ もちろん護衛の方々がいるのはわかっているが……」

彼女は微笑みながら首を振つた。

「大丈夫よ。カイは心配性ね。……でも、いつも心配してくれてありがとう」

心地良い夜風が吹き、シエル王女は髪の毛を押さえる。淡い月明かりが彼女を照らし、銀色の髪が美しく輝いた。カイは珍しく、じつと彼女を見つめる。

「……なに？」

「いや。制服じゃないシエルは新鮮^{しんせん}だと思つてな。その髪型も、実によく似合つている」

シエルの表情がふわあつと緩み^{ゆる}、こぼれるような笑顔

になつた。それはまるで花がほころぶようである。

「あら、珍しい。カイが服や髪を褒めるなんて……気づかないんじやないかと思つてたわ」

「気がつかないわけがないだろう？」俺はいつもーシ

エルを見ているのだから」

彼女がふと息を飲んだ。守るべき対象として目を配つ
ているのだとしても――

「……もう……そういうところが……ずるいのよ……」

二人の距離が自然に縮まる。シエルが、恥はずかしそう
にカイを見上げた。そして――

「……あのね……カイ……」

「なんだ？」

シェル王女は一じとりとカイの背中に目をやる。

「……どうしてヴィーを背負っているのかしら？」

カイがもうとうなつた。カイの背中には、眠りこけたまま、ひしつとしがみついているヴィーの姿があつた。カイは長いため息をつく。

「仕方がないだろう……しがみついて離れないのだがら」

「もう、雰囲気が台無しだわ……まあいいですけど！」

シェルは怒った振りをしてみせると、ふふっと微笑み、馬車に乗り込んだ。

「じゃあおやすみなさい、カイ。ヴィーを落とさないようにな」

「わかつた。シエルも気をつけてな」
馬車の窓を開け、手を振るシエル王女。
こうして主賓のヴィーが眠りこけたまま、歓迎会は幕
を閉じたのだつた。

一章 それぞれの挑戦

カイが自室で目を覚ますと、ベッドには妹のクロエと
ヴィレッタが寝ていた。

「……そういえばヴィーはうちに泊まつたのだつたな
……」

あれからヴィーはどうやつても目を覚まさず、カイは
仕方なく一緒に寝ることにしたのだ。クロエがいつベッ
ドに入ってきたかはわからなかつた。

カイは、腕に抱きつくように寢ているクロエとヴィレ

ツタから慎重に腕を引き抜くと、二人に毛布を掛け、起き上がる。今日は休日なので、一人を起こす必要はなかつた。

稽古場けいこばへと向かつた。日課いこばの走り込みを終えると、カイは屋敷やしきの裏手にある稽古用やしきようの木刀ぼくとうを手に取る。

稽古場の中央で、木刀を正眼せいがんに構えたカイは、ふうと息を吐いた。

集中、そして一鋭い袈裟斬けさぎり。すかさず踏み込んで逆に斬り上げ、次に大きく横に薙なぎ払う。体をふつと引くと、今度は目の覚めるような突きを連続で繰り出した。

滑らかな技の連携と、空間を斬り裂かんばかりの剣撃。
 優雅な剣舞ではない。一振り一振りがすべて必殺の一撃である。

気が済むまで一通りの型をやり終えると、カイは木刀を置き、今度は魔法の練習パラディンに取り掛かつた。神聖魔法——それが聖騎士パラディンへの道に立ちふさがる大きな壁である。

目を閉じ、集中する。息を整え、体内に神聖力を循環させていいく。

「く……ぐぐ……くくく……」

額ひたいに汗が浮かび、苦痛に顔がゆがんだ。極度の暗黒体质であるカイにとつて、神聖力はまさに異物そのもの、

体は強烈な拒否反応を示すのである。

カイは一度歯を食いしばると意を決して一詠唱えいしょうした。

「光……うつ……慈愛じあい……ともがら……ぐぐ……御心

……守護……くくー」

震えながら言い終えると、両腕をかかげる。そして

「神聖魔法——ブレス祝福ブレス——！」

宣言すると、その体勢のまま、カイはしばらく待つた。じりじりと時間がすぎていく。五秒、十秒。カイが目を閉じ、唇くちびるを噛かみ締めたころ——

ふわっとカイの体が緑色の光に包まれた。その瞬間

「ぐく！」

カイは苦痛に思わず声を上げる。

これは、防御力を数ポイント上げるだけの超基本的な
神聖魔法——^{ブレス}〈祝福〉。

カイの詠唱の遅さは、術式発動までの遅れとして現れていた。そしてなにより、この神聖魔法でカイの防御力は上がらない。神聖治癒魔法ほどではないにせよ、単にダメージを負うだけであつた。

神聖魔法はそれほどに、カイと相性が悪いのである。額の汗をぬぐつたカイは、荒い息を整えた。

「……よし……あと九十九回……」

休日の修練として、カイは己に百回の〈祝福〉を課し

ていた。次の詠唱に入ろうと顔を上げると――

「おい……朝っぱらから無様な魔法を見せんなんよ!」

カイの目の前に立っていたのは、魔法の天才ヴィレッタ・パウリであつた。

「起きたのか、ヴィー。――無様なのはわかつているが

……練習する以外ないだろう?」

ヴィーはカイに目をやると、呆^{あき}れたような顔を見せる。

「おまえなあ……そんなことあと九十九回もやるつもりか? まつたくの無駄だぞ!」

大声を上げるヴィーを見て、カイは小さくうなつた。

「そ……なの? しかし、それならどうすればいい?

パラディン聖騎士になるには神聖魔法が必要だろう?」

それを聞いて、今度はヴィーがうなる。

「うみゅう……ターネヤんから聞いたけど、おまえ、
王宮聖騎士ロイヤルパラディンになりたいんだつて？　あのなあ……さすが
のオレさまでも引くわ……むぼーすぎるだろ。この前も
言つたけど、おまえの魔力経路つて特殊なんよ。神聖魔
法を覚えるのはムリだと思^うぞ？」早めに諦めれば？」

すぐにカイは首を振つた。

「いや、それはできない」

ヴィーはなぜかムキになつて声を上げる。

「なんでだよ！　カイは暗黒騎士あんこくきしとしちゃほぼ王國最高
峰だろ？　それでいいじゃんか！　オレヤの〈障壁〉
破れる奴なんて、そうはいないんだぞ！」

カイはまた首を振った。

「いや……まだだ。まだ足りない。俺はシエルを守る一振りの剣となるため、もつと強くなる必要がある。それに」

カイはヴィーを静かに見つめる。

「俺は知りたいんだ。——最強とは何かを知りたい」

ヴィーが息をのみ、その目が見開かれていつた。
なぜなら、彼女も同じだからである。

ヴィーも知りたいのだ。知りたいだけなのだ。

彼女は、魔法の真髓しんすいを——この世界の真実を——知りたい。

ヴィーは、静かに見つめてくるカイを見上げ、珍しく

ため息をついた。

彼女にはわかつていた。あの固く閉じていたはずの神聖魔力経路を開くのに、カイがどれほどどの苦痛を味わつたのかを。骨と肉の間に熱した鉄串てつくしを通されたような、想像を絶する痛みだつたはずなのだ。それなのに——
ヴィーは、カイを見上げる。

——カイはその先に、さらに進もうとしている。
ヴィレッタはもう一度ため息をつくと、珍しく——ほんとうに珍しく——考えた。自分のことではなく、他人のことを考えた。

魔法院でずっと一人だつたヴィーは、他人のことを考えるのが苦手なのである。

それでも一ヴィーは単なる研究対象だつた、この無謀な暗黒騎士のことを考えた。カイがどうすれば王宮聖騎士になれるのか、どうすればもつと強くなれるかを――

そして――うみゅうとうなると口を開く。

「あのな、カイ。もう一度言うぞ？ 神聖魔法はやめと

け。お前には一ムリだ」

「それでは王宮聖騎士になれないだろう！ 俺は――！」

ヴィーは、大声を上げるカイの足を蹴つた。

「黙つて聞け！ このデカ物！ いいか？ 聖騎士と――

番相性がいいのはもちろん神聖魔法だ。でもな一別系列の魔法でも代用できるんだよ！」

カイが驚きの表情で尋ねる。

「なに？ 別系列？ そんな魔法があるのか……？」

「ああ。聖騎士パラディンを目指すような奴らは、そもそも神聖魔力経路が開いてるから、神聖魔法以外を選ばないだけなんだ！」

「その魔法とは……？」

「それは——」

カイが聞くと、ヴィーは不敵ふてきに口元を上げた。

「光属性魔法だ！ 光属性には治癒魔法がないし、支援

系も少ないけど、神聖魔法を覚えるよりはずつと可能性があるぞ？ ——いいか、カイ。聖騎士パラディンになりたいなら、

もつと強くなりたいなら、おまえが覚えるべき魔法系列

はー光属性。そして、身につけるべきスキルはー

ヴィレッタが大きな声を上げた。

「光！ 属性！ 魔法剣まほうけんだ！」

「ひ、光属性……魔法剣……」

カイが目を見開き、息をのむ。王宮聖騎士ロイヤルパラディンへの狭き道に、別の可能性が開けたのだ。

カイは、ヴィレッタ・パウリに、目の前にいる魔法の天才に、まっすぐに向き合い、そして一深々と頭を下げた。

「ヴィレッタ。頼む。俺にー魔法を教えてくれ

ヴィーの□元が、自然にゆるむ。

カイは取引を持ちかけない。条件を出さない。ただ

素直すなおに頼んだ。

今まで何人もが破格はかくの条件を出し、ヴィーの弟子にして欲しいと頼んできた。王族や貴族からの頼みもあつたが、ヴィーはいつも断つてきた。

ヴィーが欲しいのは、富や地位や名誉などではもちろんない。

彼女はただ、面白いことが好きなのだ。面白い奴が好きなんだけなのだ。

王宮聖騎士ロイヤルパラディンになりたい変てこな暗黒騎士——カイ・ブラッディア。

カイは、ヴィーの眼鏡めがねにかなう——超絶、変な奴なのである。

彼女は腰に手をあて、仁王立ちになつた。

「おーっし、わかつた！」

カイが顔を上げた。

ばし見つめあう。

ヴィレッタ・パウリが口を開いた。

「いいだろう。オレさまを師匠セイジと呼ぶなら――」
賢者セイジがにかりと笑う。

「おまえに――魔法を教えてやる！」

* * *

翌朝。屋敷裏手の稽古場ー

「ぐううううううううつ！」

カイは地面に這いつくばり、歯を食いしばつていた。
震える体を起こしながら、荒い息を吐く。裸の上半身
は汗にまみれ、強烈な熱を帯びていた。体の内側から、
ぎりぎりと肉をこじ開けられるような痛みに、カイは顔
を歪める。

ヴィイーによる魔法特訓のはじまりである。

彼女の特訓は、その可愛らしい容姿からは想像できな
いくらい厳しいものだつた。

「おい、起きろ！ 魔力経路を開かない限り、魔法は教
えられないんだよ！」

「……くく……わかって……いる！ やつてくれ、ヴィー！」

ヴィーがカイの背中に手を当て、ぐつと押し込む。彼女の手のひらが輝いた。

「〈受難〉！」

その途端とたん――

「ぎやああああああああつ！」

カイが苦悶くもんの声を上げた。

〈受難〉は、白魔法系列の魔力供給魔法である。通常

は、仲間に魔法力を分け与えるために使うものだが、ヴィーは、カイに光属性の魔法力を注ぎ込むことで、短期間で魔力経路を開こうとしているのだ。手つ取り早いが、

経路を強引に開くことになるため、激痛を伴う方法である。

ヴィーは鼻からふんっと息を吐くと、カイを見下ろした。

「あ？ オレさまのことは、師匠と呼ぶように言つたはずだぞ！」

「そ……そうだった……師匠！」

「おーっし。じゃあ、もう一回！」

「ぐわああああああああつ！」

再び、ヴィーが魔力を注入すると、カイはたまらず膝^{ひざ}をつき、地面に倒れた。全身を震わせ、土に爪を立てる。喉^{のど}の奥から絞り出すようなうなり声を上げた。

ヴィーが、カイの体をぺたぺたと触り、ため息をつく。

「……あのなあ、カイ。おまえは、体も心もぎゅーっと固くしそぎなんだよ。魔力に抵抗すればするほど痛くなるの！ そんな単純なこと、なんでわかんないかなあ……」

カイは荒い息を吐きながら、顔を起こした。ヴィーが続ける。

「おまえはあれだろ？ 今までずっと剣の修行して、修練積んで、自分を追い込んで、がんばつて、がんばつて、がんばつてきたんだろ？」

「……そうだ……俺は剣にすべてを掛けて生きてきた

」

「だ・か・ら、ダメなんだよ！」

カイは思わず眉根まゆねを寄せた。

「どういう意味だ？」

「どーゆーつて、そのままの意味だよ！　おまえはがんばることが多いことだと思つてんだらうけどーがんばつちゃダメなの！」　おまえは息を吸うとき、がんばつてるか？　がんばつてねーんだよ！　がんばつて吸おうとすればするほど息は入つてこないの！　わかる？」

がんばらない……がんばつてはいけない……？

ますますわからなくなつて、カイは首をひねる。

ヴィーは、不甲斐ふかいない弟子を見下ろして、うみゅうとうなつた。

「いいか？ オレさまが見たとこ、おまえは魔法について三つのカンチガイをしてる！」

三本の指をうまく出せずに、ぷるぷる指を震わせながら、ヴィーは続ける。

「一つ！ がんばりやい！と思つてる！ 一がんばつ
ちやダメなの！ 革かわの水袋をぎゅーっと力いつぱい押さ
えてたら水が入るわけないだろ？ 布巾ふきんを固く絞つたら
水を吸い込むわけないだろ？ ゆるつとしなきや入らな
いんだよ！」

カイは水袋や布巾を想像して、その意味がようやくわかつてきた。

「そ……そうか……俺は体や心を固くして一逆に、魔

力を押し出そうとしていた……

「そーゆーこと！ 次、二つめ！」

ヴィーが続いて、声を上げる。

「おまえは——魔法を否定してやる！」

カイがいぶかしげな表情で、師匠を見上げた。

「いや……それはないと思うが——」

「あ・り・ま・す！ ありまくりですううう！ おまえ

は心のどこかで、魔法で戦うことを“ずるい”と思つてやる！

剣だけで、自分の力だけで戦うことが正しいと思つてるの！

「……そんなことは……ない……はず——」

ヴィーが歯をむき出しにして、カイに顔を寄せた。可

愛らしい変顔である。

「ありますからあああ！　おまえは自分ひとりで戦うことがすばらしーって思つてるんだよ！　自分以外の力を信用してない！　だから精靈の力も、心のどこかで拒否してんの！　くれるつて言つてんのに無視してんだよ！それで魔法が使えるわけないじやん！」

カイは思わず目を見開いた。ヴィーの指摘が、**ズボシ**星だつたからである。

そ……そ……

俺はまだ、一人で戦おうとしている……己の剣のみで戦うことが、至上のものだと考えているんだ……一人では絶対に——腐屍竜ドラゴンゾンビには勝てなかつたというのに——

カイは悔しさに、唇を噛み締めた。

「俺は……なんて未熟なんだ……

「……ヴィー、いや、師匠の言うとおりだ……俺は一人で戦うことには、剣のみで戦うことには、まだこだわつている……」

彼女はふんつと鼻から息を吐く。

「よーやくわかつたか。それじゃ精霊の力は受け取れなんんだよ！ 次、三つめ！」

カイがうなずき、ヴィーの次の言葉を待つた。

「おまえは一魔力を少ないものだと思つてゐ！」

カイがまばたきし、首をひねる。

「……確かに、俺の魔力は少ないが……」

「ちがーう！　おまえはそもそも、魔力を希少なものだと考へてるんだよ！　自分にもないし、この世界にもそれほどないつて思つてる。違うか？」

カイがうむとうなずいた。

「そのとおりじゃないか。魔力は希少なものだろう？」「それがまちがいなんですうううう！」

変顔をして迫るヴィーを、カイは眉根を寄せて見上げる。ヴィーが得意顔で続けた。

「よく聞けよ、カイ。魔力はー無限にある！」
「む、無限に……？」

「そうだ！　空気は無限にあるだろ？　光も無限にあるだろ？　それと同じようになー」

ヴィーは目を閉じて、両腕を広げる。彼女の体がぼんやりと輝いた。

「魔力も——無限にある！」

カイが目を見開く。ヴィーの周囲に、とてつもない力が漂っているのを感じたからだ。

それはヴィーが集めたものというより、すでに、最初からそこにはあつたように思えた。

「カイ。おまえは魔法を使うとき、必死こいて魔力を集めてるだろ？」

「ああ、そうだ……」

ヴィーは、目を閉じたまま続ける。

「その考えはぜんぶ捨てろ。まつたく逆だぞ！ いくら

でもあるものを、がんばつて集めようとするな！ 湯水
のようになじやぶじやぶ使っていーんだよ！ そーゆー意
識にならないとー魔法は使えない！」

カイは思わず息をのみ、若き賢者セージを見上げた。

「覚えておけ。オレさまの中に、カイの中に、魔力があ
るんじゃない！」

ヴィーが目を開ける。

「無限の魔力の中にーオレさまたちがいるんだ。世界は、
そうなつてる！」

「な……」

魔力の中に俺たちがいる……！
世界がひつくり返る感覚に、カイは目まいを覚えた。

湯水
ゆみず

魔法に関すること、魔力のこと——今までの常識が、すべて間違つていたことに気づかされたのである。

これがヴィレッタ・パウリー魔法の真実を知る者——天才の名は、伊達だてではないのだ。

しばらくして、カイは大きく息をつき、再びヴィリーに尋ねた。

「しかし——では結局、俺はどうすればいい？　がんばらないというのは、俺にとつて、かなり難しいぞ……」ヴィリーは、にかりと笑つて答えた。

「笑え！」

「……笑え……？」

「そーだ！　笑え！　

笑え！　笑え！　

笑えば力も抜ける！　笑いながら

笑えば力も抜ける！　笑いながら

がんばれないだろ？　しかめつ面つらして一人でがんばつてんじゃねーよ！　一おら！　カイ、寝つ転がつて笑え！」

カイは言われるまま一ふう……一詰めていた息を吐き、大の字になつて地面に転がつた。空は高く、心地のいい風が吹き、草の青い匂においが鼻をかすめる。鳥の鳴き声がしていることに、カイは、そのとき初めて気がついた。

ヴィーも、どさりとカイの横に寝転がる。

「どうだ、カイ。世界はけつこー、いいところだろ？　とつとと笑え！　あははははは！」

カイは、大笑いするヴィーの横顔を、ちらりと見た。

そういえばヴィーは、なにかにつけて笑つていただなか

…
…

長く息を吐き、カイは思つ。

これがヴィーの見ている世界……魔力に満ちあふれた豊かな世界……がんばつて一人でどうにかするのではなく、誰かに、そして巨大な何かに、すべてを委ねる世界

|

カイはふと笑つた。

そうか……この意識が、魔法のコツ……

「ふ……ふふふ……ははは……ははははは」

「お？ よーやく笑つたな、カイ！ くくつ！ くははは！」

あははははははははははー
二人は稽古場で大の字になつて笑いあう。これが魔法の特訓だと誰も思わないだろう。ひとしきり笑いあつたあとー

「ーと油断させて、いきなり〈受難^{マーダ}〉！」

「ぎやあああああああつ！」

ヴィーが魔力を注入すると、カイは痛みに背中をのけぞらせ、大声を上げた。体をぶるぶる震わせて、顔を歪める。

そんなカイを見て、ヴィーはため息をつき、實に残念そうな顔をした。

「……おまえ、オレさまの言つたこと、ぜんぜんわかつ

てないだろ……？」

カイが振り返り、咳き込みながら口を開いた。

「……いきなりすげるんだよ……」「

* * *

「一ついわけで、オレさま、カイの師匠になつたから！
あー、弟子のできが悪くて困るわー、ほんと辛いわ

」

「ヴィー、椅子の上に立つなーいてっ！」

カイの頭を叩くと、ヴィーは目をむいた。

「オレさまのことば、師匠と呼べと言つたろ？ ああ

ん？

「わかつた、わかつた……椅子から降りろ、師匠」

「ん、よからー。降りるぞ」

ここは神聖職訓練校ホーリーエキスパート。北校舎の学生食堂。

カイたちは、揃そろつて昼食をとつていた。

シエル王女に加え、ソレル家のミリア、魔法院のヴィ
レッタまでいるため、カイたちはすさまじく目立つてい
た。周りの生徒たちが遠巻きにカイたちを見ている。ヴィ
リーが椅子に立ち上がりつて大声を上げたため、さらに注
目を浴びてしまつていた。

そしてもう一人——

「……で？　おまえはなんでここにいるんだ？」

ヴィーが尋ねると、この学食でただ一人の黒い制服の少女が、じろりとヴィーをにらむ。

ツインテールの黒髪を肩の後ろに回すと、彼女が口を開いた。

「学食は、どちらの学校の生徒が来てもいいのよ？ 知らなかつたの？ チビれつた」

「ふうん……ところでおまえ、名前なんだつけ？」

「リ？」

「クロエよ！ わざとらしいわね！」

暗黒職専門校ダーツエクストラの特待生、クロエ・ブラツディアである。彼女は天才死靈術師ネクロマンサーとして名前が知れ渡つており、その愛くるしい容姿でファンも多かつた。

ミリアが、カイとヴィーの二人を見て、口を開く。

「クロエに聞いたけど、朝から稽古場で大笑いしてるんだって？ どんな訓練なのよ……ねえ、シエル」

ミリアが呆れ顔で言うと、シエルは――

「ふーん……そ、うなんだ……へー」

明らかに不機嫌ふきげんそうに口にした。彼女には珍しいことである。

ミリアが、カイに目で「なんとかしなさいよ」と合図を送った。カイは咳払いをするとき、シエルに恐る恐る話しかける。

「あー、シエル。また俺が何かしてしまつただろうか？」
「別にい

「もしかして……ヴィーがうちに泊まつていることを怒つているのか？」

「違いまーす。怒つてませーん」

カイはミリア、クロエと目を合わせ、途方にくれた。
なんで不機嫌になつてているのか、わからない。

そうこうしているうちに、シエルは手早く食事を済ませると、立ち上がった。

「ごめんなさい。学長に呼ばれているものだから、お先に失礼するわ。ごゆつくり」

「よし。俺もついていこう」

カイが立ち上がりかけると、シエルはやんわりと手で制した。

「大丈夫だから。カイたちはゆつくり食べていって。じゃあ午後の授業で」

シエル王女はふとヴィーに目をやり、複雑そうな表情を浮かべると、学食を出て行く。その後姿を見て、カイはもうとうなり、尋ねた。

「……どういうことだ？」

ミリアとクロエが目を見合わせ、ため息をつく。
「わかんないの、カイ？　ほんと鈍いわね……」

「あのねえ、お兄。チビれつたのせいに決まってるでしょ？」

カイが首をひねった。
「ヴィーのせい？　どういう意味だ？」

「あ？ オレさまがどうしたつて？」

ミリアがもう一度ため息をつく。

「元々、カイに魔法を教えていたのはシエルでしょう？
それを相談もなく、ヴィーに乗り換えられたら不機嫌
になつて当然じやない。私だつたら斬り刻んでるわ。
一もちろんシエルは、魔法を教えるならヴィーの方がい
いつてわかつてるだろうけど……そう割り切れるものじ
やないでしよう。そういうこと考えてあげた？」

カイはハツと気づいたように目を見開き、しぶらくし
て深く息を吐いた。

「そうか……俺はまた、自分が強くなることだけを考え
て……」

「あ？　どーゆーこと？」

ヴィーの問いに、ミリアが諭すように言う。

「そうね……たとえば、カイが急に『やつぱりコロリに魔法を教えてもらう！』って言い出したら、ヴィーはどう思う？」

「コロリって誰よ！」

クロエのツツコミを完全に無視して、ヴィーはうみゆうとなつた。

「むー。なんだそりやーって思うな！　ムカつく！」

「コロリじゃないから！」

「コロリじゃないから！」

カイは二人のにらみ合いを眺めながら、深いため息を

なが

つぐ。ミリアが見かねて声を掛けた。

「別にシエルだつて、本氣で怒つてるわけじやないわ。
あとでちゃんと謝つておくことね」

カイは、ミリアにうなづく。

「そうだな……わかつた」

一方、シエル王女は――

彼女にしては珍しく、小さいため息をつきながら、廊下を歩いていた。

ひつきりなしに挨拶あいさつしてくる生徒たちに、薄く笑みを

浮かべ、返礼する。まるで初めてこの学園に来たときの
ような義務的な対応だった。

ああ……嫌な性格してるな……私つて……
彼女は、学食での自分を思い出し、眉根を寄せて顔を
伏せる。

ヴィーは魔法の天才だもの。カイが強くなるためには、
ヴィーに教わつた方がいい……そんなことわかつては
ずなのに……

彼女はまたため息をついた。

私つてけつこう……独占欲が強いのかな……やだな

……

私……どうしたいんだろう……？

廊下を歩きながら、シエルは考える。

ミリアはカイの幼なじみで、鉄壁の防御スキルを持つ

聖騎士……。二人はお互のことによく知ってる。戦場で、カイが一番頼りにするのはミリアだわ。

クロエは天才死靈術師……カイに匹敵するほどの攻撃力を持つ攻撃役の要。

ヴィーは賢者……魔法の天才。魔法に関して、彼女の右に出る者はいない……

じやあ――

シエルは立ち止まり、窓の外に目をやつた。

――私は？

私には、なにができるの……？ カイにとつて、私つてなに？

彼女はぼんやりと校庭を見る。

私は、カイやみんなに守つてもううだけの存在なの
……？

このまま、暗殺者の影に怯えて暮らしていくの……？
そんなのは——

唇を噛んだ。

——いやだ。

そのとき——

「シエル王女……いえ、シエルさん？」

ハツとして彼女が振り返ると、目の前に、笑みを浮かべた男子生徒が立っていた。襟章から見て三年の先輩せんぱいである。彼の後ろには、二人の生徒の姿が見えた。シエルはまばたきして、三人に目をやる。

「ごめんなさい、ぼんやりしていて……。なにかご用ですか？」

三人が顔を見合わせ、くすりと笑つた。シェルは首をかしげる。

「なにか……？」

男子生徒が首を振つた。

「いや、申し訳ない。王女でもぼんやりされることがあるのかと思つたものですから……申し遅れました、僕は三年のキース・クルーゼ。この学校の生徒会長を務めています」

シェルは、入学式のときに学長から彼を紹介されたことを思い出し、うなづく。

「ああ、クルーゼ家の。一度お会いしましたね。『ごぶさたしていきます』

思い出してくれたことが嬉^{うれ}しかつたのか、彼は満面^{まんめん}の笑みを浮かべた。

クルーゼは神聖系^{パラディン}でもかなり上位の家名である。著名な聖騎士^{はいしゆつ}を何人も排出^{はいしゆつ}していた。この学校の生徒会長になれるということは、家柄^{いえがら}はもちろん、成績も優秀で、実技も相当の腕前だと知れた。

「それで……私にご用でしようか？」

シエルが問うと、キースはうやうやしく手を差し出す。
「ええ、シエルさん。不羈^{ぶしつけ}は承知していますが、よろしければ！」

彼が微笑んだ。

「生徒会に入りませんか？」

* * *

翌日の放課後。ブラツディア家ー歓迎会以来、ヴィーはブラツディア家に寝泊まりしており、皆は放課になると、なんとなくカイの家に集まるようになつていた。

みんなが集まつた機会に、シエルから話があるという。その話というのはー

「生徒会に入りたい？……シエル、理由を聞いてもい

いか？」

カイが尋ねると、彼女は一つ息を吐き、静かに□を開いた。

「誰かが私の命を狙つてているというのに、わがままを言つてごめんなさい……。みんながいてくれて本当に心強いし、心から感謝していますー」

シエルが顔を上げ、皆を見回す。

「でも、だからといって、怯えて暮らすのは違うと思うの。……いいえ、私が、そう生きたくない。こんなときだからこそ、私は、前に進みたいと思つてる」

彼女の真剣なまなざしに、皆は静かに続きを待つた。

「キース会長に生徒会に誘われたとき、最初は私も断ろ

うと思つたわ。そんなことをしていいる場合じゃないと思つたし、周りの人にもまた迷惑を掛けてしまうかも知れないから……でも——思い直したのよ。だつて、これじや、暗殺者の影に怯えて生きているだけだから。最初から、私、負けてるつて思つたの」

ミリアがうなずくと、シエルは小さく笑んで続ける。「私は暗殺者なんかに負けたくない。小さな一步かもしけないけれど、新しいことに挑戦してみたいの」

彼女は皆を見回し、うかがうように尋ねた。

「ダメ……かな……？」

ミリアがすぐに賛同し、シエルの手に、自分の手を重ねた。

「ううん、私はいいと思う。シエルはちゃんと学生した方がいいわ」

シエルは、泣きそうな笑みを見せた。

「ありがとう、ミリア」

そこへヴィーが割つて入つた。

「あ？ セーと会つてなんだ？」

ヴィーが問うと、隣で、ヴィーが騒がないよう見張つていたクロエが答える。

「学生の面倒を見る集まりみたいなものよ。わかつた？ チビれつた」

「じゃあ、コロリは入れないな！ おまえは面倒掛ける方だし、ぎやははつ！」

「しつこい！　一あ、生徒会に入るのは、私も賛成。

屋敷と学校の往復だけじゃ、息も詰まるしね」

クロエが、ヴィーの口をふさぎながら答えた。そして

「カイは……どう思う？」

シエルが聞くのに、カイは一度大きく息を吸うと、長く吐いた。

「俺は……シエルがそんな風に考えているとは知らなかつた……。シエルを守ることや強くなることに頭がいつぱいで、もしかして俺は、シエルの自由を奪つていたのかもしれないなーわかつてあげられなくてすまなかつた……」

頭を下げるカイに、シェルは慌てて手を振る。

「そんなことない！ カイは私のことを最優先で考えて
くれているわ。いつもありがとうございます、カイ」

カイはシェルにうなずくと、ミリアやクロエに目をや
つた。

「うむ……学園の方がむしろ守りやすいかもしないな
……。俺は放課後、ヴィリーと校庭で修行することにする。
ミリアはどうする？」

「私は、そうね……学園の中でシェルを待つことにする
わ」

カイがうなずき、クロエに目をやる。

「そうか、頼む。——クロエは、シェルを死靈で守つて

やつてくれ

「りよーかい」

てきぱきと、自分を守る算段をつけていく皆を見て、
シエルは胸元を押さえる。

みんなには隠しごとをしたくない。ちゃんと打ち明けておこう……

彼女は、深く息を吸い込むと――

「あのね……もう一つ、みんなに聞いて欲しいことがあるのだけれど――

――自分の出生の秘密を話すこととした。

自分が婚外子こんがいしであること。母親が誰かわからぬこと。
それなのに継承権けいしゆうけんを持つていること。王宮で陰口いんぐをささ

やかれていたこと一

話し終えると、ミリアが、静かにシエルの肩を抱いた。

「そうだつたんだ……辛^{つら}かつたね、シエル」

シエル王女が静かに答える。

「……今まで黙つていて、ごめんなさい……」

ミリアが首を振り、二人は肩を寄せあつた。

クロエがふんふん怒りながら、声を上げる。

「ということは、シエルを襲つているのは王族関係者かもしぬれないってこと!? ひつどい！ 信じらんない！」

シエル王女が、クロエにうなづくと、また皆を見回した。

「この際だから、みんなに言つておくわ。もし、私が王

位継承権を持つてゐるためには狙われてゐるのだとしたら
」

静かな、しかし決意を秘めた声でシエルは言う。

「——私は、継承権利を放棄^{ほうき}することも考^{こう}えてる」

皆が思わず息をのんだ。シエルは大胆^{だいたん}にも、そこまで
考えていたのだ。

「もちろん、それが可能かどうかはわからない。それに
仮に継承権がなくとも、私は王族には違いないから王家
から離れることはできないわ——でも、もし継承権を放
棄できれば、王家と少しば距離を置いて生きていく
かもしれない……」

シエルは顔を上げた。

「だから、私はすこしでも学んでおきたいの。王家から離れたとしても、一人で生きていくだけの力が欲しい……私は——強くなりたい」

皆が静かになる。彼女の決意に、その勇氣に、圧倒されたからである。

しばらくして、ミリアが□を開いた。

「そこまで考えていたのね。シエルは……うん……ほんとすごいな」

カイも一つ息を吐き、深くうなづく。

「ミリアの言うとおりだ。見事な覚悟だとと思う。俺も見習わねばな……」

皆は目を見合わせると、うなづきあう。カイが□を開

いた。

「生徒会で、新しいことを学べるといいな」

カイが言うと、ミリアも――

「ほんと！ 応援してる」

そしてクロエが――

「なにかあつたら手伝うから！」

最後にヴィーが――

「……んが？ おわった？ シエルの話、むずかしーん
だよ……」

よだれを拭きながら目を覚ましたヴィーを見て、シエルがむーっとうなつたあと――我慢できずにふつと吹き出した。その拍子に――

あははははははー

一皆も釣られて笑う。ひとしきり笑つたあと、シエル王女はみんなにうなずいた。

「みんな、ありがとう。私、挑戦してみるね！」

* * *

一週間ほど経つた放課後。校庭ー

「ぐぐ……くくくー」

歯を食いしばり、体を震わせ、体内の魔法力を循環させようと必死になつているカイをー

「あほおおおおおつ！」

「ぐはつ！」

ヴィーは豪快^{ごうかい}に飛び蹴りして、中断させた。校庭に這

いつくばるカイを見下ろし、ふんっと鼻から息を吐く。

「またか、カイ！　がんばるなって言つてるだろ！　力を抜け！」

カイは額の汗をぬぐい、体を起こす。荒い息を吐きながら答えた。

「……コツが……撃^{つか}めない……」

ヴィーは不出来な弟子を見て、ため息をつく。

「うみゅう……よーやく細つこい魔力経路が開いたつていうのに、これじやーなあ……」

カイは、新しいことに挑戦するというシエルに刺激さ

れ、毎朝の魔力注入訓練を増やし、ついに光属性の魔力経路を開くことに成功した。

それはまだか細い経路ではあつたが、ひとまず魔法を習得できる段階に至つたということである。しかし――

「むー……これ以上、簡単な光魔法はないんだぞ？」

もつとも初步的な魔法すら、カイには使えなかつた。ヴィーは、校庭に出してきた椅子にどすんと腰掛け、ふんぞり返る。

「おまえに教えるのは、魔力をほとんど使わない超基本的な光魔法だ。おまえの魔力経路は開いたばかりだから、放出系の魔法はまだムリなんだよ。と一ぜん攻撃魔法はぜんぶムリ。ここまでわかってるな？」

カイは額の汗をぬぐいながら、ああ、とうなずいた。

「だ・か・ら、オレさまが教える魔法はただ一つ！ そ
の魔法は？ セーの！」

「へ偏光^{プリズム}」

カイの返答に、今度はヴィーがうなずいた。
「そう！ へ偏光^{プリズム}」は光を曲げる魔法だ。つてゆーか、
光を曲げることしかできん！」

カイが続ける。

「神聖魔法で言うところのへ祝福^{ブレス}」と同じ基本魔法だな

」

「わかつたような□を聞くなああああつ！」

突然大声を上げ、立ち上がったヴィーを、カイは驚き

の表情で見上げた。

「……なぜキレたんだ？」

ヴィーは鼻から息をふんつと吐き、ポンコツな弟子を見下ろす。

「同じ基本魔法でも〈祝福〉^{ブレス}と〈偏光〉^{プリズム}は全然ちがうの！ いいか、カイ。〈偏光〉^{プリズム}を完全に自分のものにしてみろ。それだけでおまえは一途^{とこう}方もなく強くなれる！」

「そう……なのかな……？」

ヴィーの言葉に首をひねりながらも、カイはまた、集中し、魔法力を循環させはじめる。しばらくして、ヴィーが尋ねた。

「……なあ、カイ。ちよつと聞きたいんだけど……」

「なんだ？　俺はいま忙しいんだが」

ヴィーは珍しく、言いにくそうに続ける。

「あー……オレさま、もしかして……シエルに悪いこと
した……？」

カイは驚いて顔を上げた。こんなしおらしいヴィーは
初めてである。

「どうしたんだヴィー。変なものでも食べたのか？」

「食べてねーよ！」——で……どーなんだ？」

カイが一つ息をついて答えた。

「……この魔法練習のことだろう？　それは、俺がシエル
にひと言いわなかつたのが悪かつたんだ。ヴィーは悪

くない。だから、心配するな」

ヴィーが困つたような複雑な表情で、大きな声を上げた。

「し、心配なんかしてないんだよ！ 天才は心配しないの！ 一ただ……ミリアが言つてたみたいに、その……気にいつてる奴を誰かに横取りされたら、やつぱ嫌かなつて……」

カイはしばらくヴィーを見つめる。そして――
「大丈夫。ヴィーはいい奴だ。シエルもそれをわかつて
る。だから大丈夫だ」

ヴィーがあんぐり□を開けたあと、大声を上げた。
「はあああああつ!? なんだそれ！ なにが大丈夫だ！

おまえの大丈夫はまつたく信用できん！　一ま、いや……おい！　さぼつてないで練習を続けろ！　このポンコツ！」

ヴィーが□元をもぞもぞさせながらも、むーつと仮頂面を作る。

「わかつた、わかつた……」

「……まつたく……なにが大丈夫だ……」

まだぶつぶつ言っているヴィーに目をやつたあと、ライは目を閉じ——練習を再開した。

ふふ……やつてるやつてる……

シェル王女は、校庭にカイとヴィーの姿を見つけ、目

を細める。二人が魔法の練習をしているところを見ると、まだ少しだけ心がちくりとしたが一新しいことをはじめた今、彼女には、二人のことを見守る余裕ができていた。

「どうされました？」王女……じゃない、シエルさん」「いいえ。さあ、資料を運んでしまいましょう」

シエルは生徒会の女生徒とともに、部活動の予算資料を運んでいた。ひとまず彼女は庶務しよむとして生徒会に仮入会することになり、同じ庶務の生徒と一緒に仕事をしているのである。

生徒会に入つて早一週間。

校庭や訓練場の使用許可、部活棟の管理など、生徒会

の仕事はさまだつたが、どれも彼女にとつては新鮮だつた。生徒会が、学園と生徒をつなぐ大きな役割を担つていることがわかり、シエルは驚きとともに、生徒会の仕事にやりがいを感じ始めてもいた。

規模は違うけれど、きっと王国も、こんな風にさまでまな組織が連携しあつて、成り立つてゐるんだわ……」「それにしても、シエルさんがこんなに仕事ができるなんて……あ、ごめんなさい！ そういう意味じやなくて！」

「うふふ……いいんですよ。もつと世間知らずだと思つたのでしよう？」

シエルがふわりと微笑むと、庶務の生徒がほおとため

息をつく。

同じ生徒といつても、シエルはやはり王女であり、憧^{あこが}れの美姫なのだ。

そんな王女と間近に接することができ、生徒会に参加している生徒たちの間ではシエルの人気は高まる一方である。

廊下を進み、一階から続く渡り廊下を歩くと、小さな別棟が見えてきた。

生徒会が業務を行う生徒会館である。

「予算の資料、運んできました」

シエルが会館に入ると、書きかけの書面から女子生徒が顔を上げた。

「ご苦労さま。ごめんなさい、重かつたでしょ？」

彼女は書記のモニカ・アベル。まつすぐな長い髪を持つ、おつとりとした生徒だ。そこに割り込んできたのは

「なんだよ、シエルちゃん。言つてくれれば俺が運んだ
のに」

王女をちやん付けする優男やさおとこは、副会長のリツツ・ロー
エン。軽薄けいはくに見えるが、実力は折り紙つきで女子からの
人気も高い。そして――

「こら、リツツ。王女をちやん付けするんじゃない。
――でも彼女を特別扱いしなくていい。それをお望みです
よね、シエルさん」

正面に座り、優しい笑みを浮かべるのは、会長のキース・クルーゼである。

「ええ。ただの庶務として、存分にこき使つてくださいね」

シエル王女が答えると、皆が軽く笑つた。
生徒会には、役員ではない一般生徒も数多く参加している。生徒会の活動に参加することは、この学園ではかなりの栄誉なのだ。

「さて……今日は頭の痛い問題を片付けておこう。お待ちかねの予算配分だよ」

キース会長が言うと、リツツ副会長が一
「げー……また夜までかかるな、こりや」

書記のモニカが口を開く。

「シェルさんにも手伝つてもううえるとおりがたいんだけ
ど……遅くなつたらやつぱりまずい？」

シェルは少し考えたあと首を振つた。

「いいえ、大丈夫です。お手伝いさせてください」
「さつすがシェルちゃん！」

キース会長がじろりとリツツにらんだあと、ふうつ
と息をつく。

「助かるよ。それじゃ始めよう。一まずは資料を整理
しようか」

「わかりました、会長」

シェルは箱から資料を取り出すと、さっそく仕事に取

り掛かつた——

そのころ、カイとヴィーは——

「なんなんだヴィー？　今日の練習は終わりか？」

「ああ。ちょっとやることがあるから、ついてこい」

切りの良いところで魔法練習を終えた二人は、校舎内をうろついていた。ヴィーはところどころで立ち止まつては、外に目をやり、「ここじゃないな……」とつぶやく。ヴィーはどうやら校門の方を見ているようだ。

「なんだ？　なにか探しているのか？」

「これ、覚えてるだろ」

ヴィーが棒状のものをカイに放り投げる。受け取る

と、先日の襲撃に使われた矢だつた。カイが斬つたので、
矢羽の方だけになつていてる。

「調べがついたのか!？」

カイの問いに、ヴィーが歩きながら答えた。

「ああ。やつぱりちょっと変わつた矢だつたよ。一矢
羽をしばらく握つてみな」

いぶかしげな表情のカイが、矢羽を握り込むと—
「む……曲がつたままになる……これは……?」

ヴィーがうなずく。

「この矢羽は、南方産の珍しい鳥の羽でできることが
わかつたんだけど……曲げて、しばらく熱を加えると
そのままの形になるんだ。自由に形を変えられるつて

わけ

カイは手元の矢に目を落とし、口を開いた。

「つまり……？」

ヴィーが続ける。

「つまりだ……矢羽の形を変えることで一矢が飛ぶ軌道を変えられるってことだよ」

カイが驚きに声を上げた。

「なに？ そんなことができるのか？」

ヴィーが感心したようにならう。

「すげースキルだよ。矢の軌道を自由自在に曲げられるなんてな。シエルを襲つた敵は、間違いなく高レベルの射手だ。わかるか？ とゆーことは——」

カイが気づき、愕然とした。

「も……もしかして先日の襲撃は——雑木林の方向からではない……？」

ヴィーがうなずき、答えた。

「そういうこと。矢羽の形から逆算するのに手こずつたけど、敵は——」

彼女が振り向き、目を細める。

「——学園の校舎方向から射てる」

カイが目を見開き、眉根を寄せた。

「なに!? ということは、まさか敵は——また教師か!?

ヴィーが声を上げる。

「落ち着け! 学園に出入りする者は多い。先生や生徒、

外部の講師や業者もいる。「弓^{ゆみ}は折りたたんで小さくできるから、誰でも持ち込む。特定するのは難しい……だから」

ヴィーがポケットから取り出した校舎の平面図を広げる。そこには細かく数式が書かれ、幾通りもの軌道が描き込まれていた。

「場所を割り出すしかない。先日の襲撃の時間——つまり今ごろの時間に、そこについても不自然じゃないやつ——そいつが敵だ！」

カイが息をのむ。

「じゃあ、ヴィーが校内をぶらぶらしていたのは……」「おうよ。校舎側から射られた可能性を検討してたん

だ

「ほんとに天才だつたんだな……ヴィー」

ヴィーがちつと舌打ちした。

「まだうたがつてたのか、おまえは……まあ手こずつたのは確かだけどな。——よし、残りの候補はあと五箇所だ。
行くぞ！」

「わかつた！」

二人は射出地点を探し、廊下を急ぐ——

生徒会館では——

「ちよつと一休みしようか……モニカ、お茶を淹れてく
れないか？」

「いいわね……ちょっと待つてて」

一区切りついたところでキース会長が声を掛けると、書記のモニカが立ち上がった。

「あ、モニカ先輩。私も手伝います」

シエル王女が立ち上がろうとする、副会長のリツツが声を掛ける。

「いーから、いーから。シエルちゃんは座つてて。モニカの淹れるお茶はおいしいから期待していいよ。な、モニカ」

モニカが手を上げて部屋を出ていった。一階の奥に給仕室があるのだ。

キース会長が書類をまとめながら、口を開く。

「それにしても、シエルさんが計算も得意だとは知らなかつたよ。計算尺しゃく^{しゃく}の使い方は王宮で？」

「ええ。王族は初等学校へは入りませんから、家庭教師がつくんです。朝から晩まで行儀作法から一般教養、ざまざまな教科まで、みつちり教わりました」

リツツが口を挟んだ。

「げー、王族もたいへんだねー。遊ぶ暇ひまないじやん」

「ふふ……私も昔はたいへんだと思つていましたけど……いまはいろいろ習つておいてよかつたと思つているんです。こうして、すこしはみなさんの役に立てますから」

キース会長とリツツが目を見合わせる。会長が口を開

いた。

「すこしどころではなく、大いに役に立つてしますよ、
シエルさん」

「ほんと、シエルちゃんはいー子やなあ……」

皆が笑いあつていると、扉^{ぼん}が開き、モニカがティーカップをお盆^{ぼん}に載せて入ってきた。いい香りが部屋いつぱいに満ちる。モニカは皆の前にソーサーとカップを置くと、自分も腰を下ろした。

「さあどうぞ。今日は東方産^{とうほう}のお茶を淹れてみたの。珍しいでしょ？」

「ほう、いい香りだ」

キース会長がカップに□をつけ、リツツが優雅^{ゆうが}に匂い

を嗅^かいだ。

シェル王女は、カップを手にする前に立ち上がる。

「あ、そうだ。私、今日、お菓子を持ってきたんです。
ちょっと取ってきますね」

「お菓子？　いーねー」

リツツが声を上げると、モニカが微笑んだ。

「じゃあ私たちは先に頂いているから」

「ええ、すぐ戻ります」

この作業部屋は狭いので、荷物は隣の物置部屋に置いてあるのである。

シェルは物置部屋に入ると、鞄^{かばん}に入ってきた焼き菓子を取り出す。屋敷付きの料理人が作ってくれた菓子だつ

た。

ふふ……みなさん喜んでくれるといいけれど……
棚に鞄を戻したとき、シエルはふと、棚から落ちてい
る黒い筒状の袋に気がついた。

あら……誰のかしら？

シエルが袋を棚に戻そうと手に取つたとき一ゆるく
なつていた□から中の物が覗いた。

それを見て「……え？」王女の心臓がどくんと跳ねる。
袋から覗いたもの、それは——

銀色に光る、折りたたみ式の一弓。

ま……まさか……！

先日の襲撃は矢によるもの。敵が射手アーチャーであることはわ

かつていた。

シェルは息をのんで、手元の弓を見つめる。

確か、モニカ先輩は治療師……クルーゼ家のキース会長はおそらく聖騎士……

それじゃこれは——リツツ副会長の!?

彼女は思わず唾^{つば}を飲み込んだ。心臓がどくどくと早鐘^{はやがね}のようにな打つ。

お、落ち着くのよ、シェル。弓を持つているからといつて、先日の襲撃者とは限らない……。

しかし——

同じく袋に入っていた矢の羽の部分を握り——お願い

……手を離したとき——

……ああ！

疑念は確信に変わった。矢羽が一握った形に変形している。

これは、ヴィーから聞いていた特殊な矢羽！
な……なんてこと……
シエル王女の目が、大きく見開かれていく。彼女はく
しやりと顔を歪めた。

間違いない——襲撃者は、リツツ副会長だわ！

驚きによろけた彼女は、棚に当つて、思わず大きな音
を立ててしまう。隣の作業室から——

『ん……王女か？』『遅いな。俺、見てくるわー』

副会長の声が聞こえ、シエルは慌てた。

まざい！　どうしよう？

シェルは天井を見上げる。

そうだ、二階！

この生徒会館は二階建てなのだ。

シェルは、静かに、しかし全速力で廊下を走ると、リツツ副会長が部屋から出てくる前に、辛うじて階段を駆け上がつた！

その頃、校内を探索中のカイとヴィーは一

「ここでもない……ということは一しまつた！」

残り二箇所のうちの一つを調べ、そこが射出場所ではないと確信したヴィーは、校舎の平面図の一点を指差す。

それを見てカイが——「……え？」——息をのんだ。残りは一箇所。そこがどれほど信じがたい場所だろうと、他の可能性が消えた以上、そこ以外、考えられない。その場所は——

「……南校舎の端……？　そこは——」

カイの髪の毛が、ぶわあつと逆立つ。

ヴィーが悔しそうな顔で叫んだ。

「行け、カイ！　そこは——生徒会館だ！　おそらく二階の窓から射て——」

瞬間——

カイはヴィーの言葉を最後まで待たずに、力いっぱい廊下を蹴つて走り出す。

歯を食いしばると、一気に速度を上げた。

「オレさまもすぐ行く！ なんとかしろ、カイ！」
遠ざかるヴィーの叫びを聞きながら、カイは力の限り走る。教室に残っていた生徒たちが、矢のように駆けるカイを見て、何ごとかと目を見開いた。

「まさか……まさか、生徒会の中に暗殺者が!?

カイは唇を噛みしめる。

シエル……あんなに楽しそうに仕事をしていたのに

彼女の気持ちを思うと、カイは胸が張り裂けそうになつた。

カイはキツと顔を上げると、渾身の力で廊下を駆け、

生徒会館へ急ぐ。

シェル、無事でいてくれー
いま行く！

生徒会館。二階廊下ー

まさか、リツツ副会長が襲撃者だつたなんて！
とにかく一逃げなきや！

シェルは混乱しながらも警戒を怠らず、廊下の左右を見回す。誰もいない。二階では、一般生徒たちが作業をしているはずだったが一それにしてもやけに静かだった。

確か、奥の部屋で作業中のはず……

シェルは廊下を慎重に走り、すこしだけ開いている扉に近づくと、隙間^{すきま}から中を覗いた。そして――

ああ……！

シェルは室内に入り一息をのむ。

生徒会を手伝いに来ていた生徒たちは全員、机に突つ伏すように倒れていた。背中が上下しているところを見ると、皆、生きているようだ。机の上にはカップが散乱し、独特な香りが立ち込めている。

ま……まさかこれは――モニ力先輩のお茶!?

シェルは目まいを覚え、思わずふらついた。ということは――

王女は唇を思いきり噛みしめる。

リツツ副会長だけでなく、モニカ先輩も協力してゐる

二人は共犯だわ！

シェルは生徒たちを見回して、顔を悲しそうに歪めた。
私のせいでの、また他の生徒たちを巻き込んでしまつた
……ごめんなさい……ほんとうにごめんなさい——でも

王女はキッと顔を上げる。

すぐ助けを呼んでくるから！

彼女は窓際に走ると、外を見回す。窓の近くに大きな木が生えていた。

あの木に飛び移れば、怪我はするかもしないけど、

死ぬことはない——

よし！

彼女は覚悟を決め、窓を開けようと力を込める。しかし

「え？ 開かない!?」

ただの引き戸なのに、ありつたけの力を込めても開かない。

な……なんで？ それなら！

椅子で窓を叩き割ろうと、シエルが考えたとき——

「そこは開きませんよ？ 封印が施されていいますからね」

背後からの声に、シエルがびっくりとして振り返る。そ

ここに立っていたのは——

「モ、モニカ先輩！」

生徒会の書記——モニカ・アベルであつた。

彼女は、気味の悪い笑みを浮かべると、すたすたと歩いてくる。

「私のお茶を飲んでいただければ、いろいろ面倒もなかつたのに……。さあ王女、おとなしくこちらへ」

「来ないで！」

シエルが椅子を持ち上げて威嚇する——

「きひひひひつ！」

奇妙な雄叫びを上げて彼女がしゃがみこみ——「え？」

——まるでカエルのようにシエルに向かつて飛んできた。

王女は息をのむ。尋常な人間の動きではない。モニカの目は淀み、光が失われている。これは——

精神支配系の魔法!?

しかし、そうではなかつた。モニカの□から覗いたもの——それは——

「なつ!?

何本もの、黒い触手^{しょくしゅ}。体内に寄生し、脳の制御を乗つ
取る、その生物^{しょくじゆ}は——

「ま、魔法蟲^{まほうちゅう}!」

魔法蟲——触手の生えた、なめくじのような形の魔法生物である。体内に脳内物質^{ぶんぴつ}を分泌する器官を持ち、組み込まれた命令に従つて人間を操る違法な実験生物であ

つた。

モニカ先輩は操られている！

モニカが手を伸ばし、シエルに飛びかかる、その瞬間

「〈隱形靈〉——お願い！」

死靈。

クロエが、シエルの護衛としてつけてくれた
〈隱形靈〉である。死靈がモニカに絡みつき、床に組み
伏せる。影の刃をモニカの首元に当て、彼女の動きを封
じた。

「いい子ね、〈隱形靈〉。そのまま拘束して！」

じたばたするモニカを見て、シエルが一息ついたその

とき――

「油断大敵だよ。シエルちゃん」

「な！」

シエル王女が振り返ると、何本もの矢が連續して飛ん
できた。「う！」体のすれすれを狙つた攻撃に、彼女は
思わず尻もちをつく。

「リツツ副会長！」

「隐形靈」が自動防御に従つて、王女に危害を加えた
リツツに牙を剥く。そこで――

「隐形靈！ やめて！」

シエルが叫んだ。なぜなら――

「あつぶねー。シエルちゃん、ありがと！」

——リツツが、机に突つ伏して いる生徒たちに弓矢を向けたからである。おそらく生徒たちはまだ生きている。彼らを人質に取られたのだ。

シエルが顔を歪ませる。

「あなたも操られて……！」

「え？ ああ、どーなんだろねー？ でも気分いいから、まいつか！」

リツツの目も濁り、^{にご}その光は失われていた。シエルは唇を噛み締める。

「先日の襲撃はあなたね！」

「まーね」

リツツ副会長は肩をすくめ、肯定^{こうてい}した。そして、さら
に最悪なことに――

「申し訳ない、シエルさん。おとなしく、僕たちの指示
に従つてもらえないか?　君を傷つけたくはないんだ
よ」

う……

部屋に入ってきたのは――会長のキース・クルーゼだ
った。

会長の目にも光はなく、魔法蟲に操られているのは間
違いない。

「会長まで……みんな目を覚まして!」

王女の叫びを無視して、キース会長がモニカに目をや

る。

「まずはモニカを離してもうおうか？」

シエル王女

リツツが続けた。

「さもないと、こいつらの命はない！　一つて、一度、

言ってみたかつたんだよねえ」

「この卑怯者！」

王女が声を上げるが、リツツは弓矢の照準^{ひょうじゅん}を庶務の女子生徒に向ける。きりきりと弓を引き絞る音が響いた。

シエル王女は悔しそうに顔を伏せると、命令する。

「〈隐形靈〉……その人を離して……」

〈隐形靈〉^{シャドウ}がモニカから離れると一キース会長が、踏

み込みざま剣を振り、死靈を真つ二つに斬り裂いた。

シエルは息をのむ。一撃で死靈を斬つたいうことは
 いまのは神聖剣技なのだろう。さすがはクルーゼ家の
 嫡子^{ちやくし}。シエルの目から見ても、彼がかなりの手練^{てだれ}だとわ
 かつた。

消えていく〈隱形靈^{シャドウ}〉を見て、王女は唇を噛み締める。
 たとえ死靈といえども、自分を守ってくれた存在をあつ
 けなく消されたことに、彼女は怒りを覚えた。

「……私をどうしようというの？」

モニカが立ち上がり、生徒会役員三人が揃うと、キー

ス会長が口を開く。

「ある御方^{おかた}が君をご所望^{しょもう}でね。一緒に来てもらおう」
 シエルが叫んだ。

「無駄なことよ！　すぐにカイヤニアが駆けつけてくる！　あなたたちに逃げ場はないわ！」

キース会長は役員二人と田を見合わせると、懐から巻物を取り出す。表面に記された魔法の等級を示す印を見て、それが高位魔法の巻物だとすぐにわかった。

「素晴らしい巻物だろう？　高位魔法へ^{ポータ}転移

」が封じられていて、「追跡妨害の付与効果まであるんだ」

な…：

キースの言葉に、シエル王女は絶句する。

〈^{ポータ}転移〉を使われたら一終わりだ。妨害付与まであるなら、たとえヴィーだつて、追つてくるには時間がかかる。

王女は歯を食いしばり、目を伏せた。

やられたー

私はどうすれば……どうすればいい!?

なにかないの!? カイたちに、手がかりを残す方法

は!

シエルは考える。猛烈な速度で考える。目を固く閉じ

考
え
る

考
え
る。考
え
る。考
え
る。

そしてー

彼女はハッと目を開いた。

そうだ……そうだわーーその手があつた!ーでもー

シエルは体を震わせる。キースたちが近づき、シエル

王女を囲んだ。不気味な光のない目で、王女を見つめる。
キースが巻物^{スクロール}を開き――
……もう……それしかない。覚悟を決めるしか――な
い！

カイー私に――勇気を！

シエルは口元に手を寄せ――そして――
キース会長の口^{ポータ}が動いた。

「術式解放――〈転移〉」

不意に、突然に――四人は部屋から消えた。

あとには、まだ眠り込んでいる生徒たちだけが残された。

* * *

カイが全速力で駆けていると、生徒会館近くで待機していたミリアがそれに気づき、なにごとかと走ってきた。二人は生徒会館前でちようど落ち合つた。走りながらカイが叫ぶ。

「ミリア、生徒会が怪しい！ 役員の中に先日の襲撃者がいるかもしれない！」

「なんですつて!?」

ミリアが驚きの表情で声を上げた。

「とにかくシエルの無事を確認する！ 会館に突入するぞ！」

「わかつた！」

カイが生徒会館の扉に手を伸ばす。しかし――
「なつ?」

バチンッと強力な力に弾かれたように、カイが吹っ飛んだ。「くくっ！」後転してすかさず起き上がり、扉に目をやる。

「これは――結界!?」

「生徒会が怪しいのは確定ね！ 下がつて！」

ミリアがレイピアを抜刀し、扉に強烈な突きを連続して放つた。火花が飛び散るが一刃は通らない。ミリアが一度舌打ちし、叫ぶ。

「カイ！ 窓！」「駄目だ！ 開かない！」

側面の窓を開けようとしていたカイが、すぐさま応じた。そこへ—

「お、おい！ シエルはどうなつた!?」

ひーひー言いながら走ってきたヴィーを見て、カイが扉を指差す。

「結界だ！ ヴィー、解除頼む！」

「いきなりかよ！ まーいやー任せろい！」

ヴィーが扉に触れると、会館の壁を覆^{おお}うほどの巨大な魔法陣が出現した。ヴィーが珍しくたじろぐ。

「げ！ なんじゃこりやあ！ すげー高度な魔法封印

だ！ 学生レベルの結界じゃないぞ！ —離れてろ—

解錠術式、二番、五番、七番展開！

ヴィーの三重の解錠魔法陣が展開され、封印を解除しようと術式計算を始めた。しかし——
「うわつ！ ダミーの封印まで張つてある！ カイ、こ
れは時間がかかるぞ！ どうする？」

カイがヴィーに問う。

「封印はどこからどこまでだ!?」

「え？ どこからどこまで……？ えつと——壁周りは
せんぶだ！」

カイはうなずくと、ミリアに目で合図した。

「ミリア！ 上だ！」

「わかつた！ 来て！」

ヴィーが眉根を寄せ、声を上げる。

「おい！二人ともなにする気だ!?」

ヴィーの問いを無視して、カイが走った。ミリアが壁際で指を組み、待ち構える。カイがミリアの両手に乗つた瞬間――

「せーのつ！」

ミリアが両手をぐつと持ち上げ、カイを押し上げた。カイのジャンプ力と、ミリアの腕力が合わさり、カイは一屋根の上まで飛び上がつた。そして空中で抜刀する

と――

「**武装鍊成**」――死^デを招くものアアアアアツ！

屋根に渾身の一撃を放つと、その勢いのまま屋根をぶち破り、会館の二階へと無理やり飛び降りた。あちこち

に破片が飛び散り、砂煙^{すなけむり}が上がる。

ヴィーは口をあんぐり開けて、その光景を見上げた。

「ムチャクチヤヤ……」

二階の一室に降り立つたカイは、周りをすばやく見回す。誰もいない。そこへ――

『お兄！』

シーツを被つたような死靈が、屋根の穴から降りてきた。

「クロエか！ 今どこだ!?」

『さつき、シエルにつけてた〈隐形靈〉^{シャドウ}が消えたから、急いでそつちに向かつてるとこ！ 神聖校まで、あと五分！』

クロエほどの術者だと、死靈を通じて言葉を伝えることができるのである。

「助かる！」死靈を放つて、会館内を探索できるか？

低級靈

しばらくすると、数体の死靈えんかくしょうかんが、屋根の穴から館内に侵入してきた。死靈の遠隔召喚えんかくしょうかんである。そこへ、外からミリアの声が――

「カイ、
私を引き上げて！
——
〈聖鎖〉^{バインド}！」

屋根の穴から白く輝く鎖が降りてきた。〈聖鎖〉を□
一代理わりにしようというのである。

カイが〈聖鎖〉を撼むと――「ぐく！」痛みに歯を食

いしばつた。神聖魔法である〈聖鎖〉は、カイにはダメージなのである。

カイは痛みを無視し、ぐつと腰を落として踏ん張る
と一〈聖鎖〉^{バインド}を一気に引いた。ミリアが引き上げられ、
屋根の穴の縁に姿を現す。彼女は背中にヴィーを背負つ
ていた。

「ヴィー、飛び降りるよ?」「おうよ!」

ミリアが飛ぶと、ヴィーと一緒に二階に着地する。

カイが皆を見てうなずいた。

「よし、揃つたな。クロエもいま向かっている。ーシ
エルを探すぞ!」

カイたちはすぐさま行動を開始した。

「内側からなら封印を破れるか？」
「ヴィー」

「非対称封印つぽいからな……すぐに破つちやる！」
「にしてもおまえら、すげー連携だな……」

「頼んだぞ、ヴィー」

カイはヴィーに声を掛けると、ミリアと目を合わせる。
「二階は〈低級靈ゴースト〉があらかた探索を終えた。——階
に降りる」

「わかつた……先行する！」

二人は廊下に出るとすばやく左右を見回し、すぐに階段へと走る。ミリアの先導で階段を降りていくと、途中で階下から何者かが上がってきた。ミリアが声を上げる。

彼らは一

「な！　うちの生徒じやないの！」

「なに！　敵なのか？」

生徒たちはのろのろした動きで、二人を阻^{はば}もうと殺到する。ミリアが応戦するが、生徒だとと思うと手を出しにくい。彼らの濁つた目を見て、ミリアが目を見開いた。

「カイ！　みんな操られてるみたい！　どうする？
無闇^{むやみ}に傷つけられない！」

カイが一度、奥歯を噛みしめると、階上に向け叫ぶ。
「ヴィー！　封印はどうだ!?」

二階からヴィーの声が響いた。

「よっしゃ！　破つたぞ！」

カイがうなづく。

「よし——ミリア。ヴィーを連れて退避しろ」

「……え？ カイ、あんた何する気？」

「急げ！」

ミリアが、階段を登つてきた先頭の生徒を蹴ると、カイの横を通り抜け、ヴィーの元へと走る。

カイは階段の踊り場まで下がると一剣を床に刺し、
氣合いを溜め始めた。

「ちよ、ちよつとカイ！ 待つて待つて！」

ヴィーが声を上げる。

「なんだ……？ なにするんだ？」

すぐに氣づいて青ざめたミリアは、のんびりしゃべつ

て い る ヴ イ ー を 抱 え 上 げ る と 、 窓 の 縁 に 足 を 掛 け 一

—
^ ?

ヴィーが間の抜けた声を上げた瞬間

「ちよつミリーラウわああああ！」

一 窓から飛び降りた。

そしてカイは、ぐつと腰を落とすと――

裂帛の気合いを放つ。その体から、禍々しい気配が一

気に吹き出し、まるで黒い霧のように館内の隅々まで溢

れかえつた。

その凄まじい圧力と、
濃厚な殺意――

濃厚のうこく

殺意

暗黒騎士の上位スキル——**強威圧**——である。

階段を登ろうとしていた生徒たちが——「あが！」
「ギー！」「ぐはあ！」□を開けて氣絶し、ばたばたと倒れ
ていく。一階にいた他の生徒たちも、**〔氣絶〕**や**〔麻痺〕**
の状態異常で、身動きが取れなくなつた。

よし！

カイは倒れた生徒たちを軽々と飛び越え、すかさず一
階に着地する。警戒しながら、扉という扉を開けていつ
た。

シェル——どこだ？

カイが部屋を探し回つていると、玄関から、ミリアと
ヴィーが再び館内へと入ってきた。
ヴィーがしかめつ面で言う。

「……ムチャクチャしゃがつて……死ぬかと思つたぞ！」

「死ななかつたでしょ？」ヴィーは生徒たちを診てあげて。「カイ！」

ヴィーに生徒たちを託すと、ミリアは、カイとともに一階の探索を開始した。しかし、倒れている生徒たちの中に、シエルの姿はない。そこへ玄関から声が――

「お兄！　来たよ！」

カイとミリアが、その声に振り返った。カイが珍しく、苦しそうな声を上げる。

「クロエ！　頼む――シエルを探してくれ！」

兄の声に状況をうかがい知つたクロエは、一瞬泣きそ

うな顔をすると、キッと表情を引き締めた。そして一召喚する。

「お願い——〈使役靈^{ファンタム}〉。シエルを探して！」

ぶわあつと十数体もの死靈が、一斉^{いつせい}に館内を探し始めた。あらゆる場所を、くまなく、シエルを求めて死靈が飛び交う。

しかし、全員で探しても――

「いない！ 生徒会の役員も見当たらぬいわ！」

皆が一階に集まると、ミリアが悔しそうに声を上げた。生徒を診ていたヴィーが立ち上がり、倒れている生徒たちに目をやる。

「こいつら、操られてたぞ――魔法蟲だ……」

「ま……魔法蟲……なんてこと……」

ミリアが息をのみ、顔を歪めた。クロエが、ミリアの腕にすがる。

ヴィーが苦々しい表情で言う。
〔にがにが〕

「たぶん、生徒会の役員全員が、魔法蟲に操られてたんだ……」
〔あやつ〕

ヴィーの言葉に、館内が静まり返った。

重苦しい沈黙の中、皆がカイに目を向ける。

カイは奥歯を噛みしめ、喉から絞り出すように声を出した。

「シエルが一さらわれた」

三章 追う者・阻む者

カイは一度、壁を思いきり叩くと一歯を食いしばり、顔を伏せた。

最悪の状況を思い描き、カイは固く目を閉じる。怒りで体が震えていた。

「カイ……」

ミリアが、カイの肩に手を置く。クロエは、珍しく取り乱す兄の姿を見て、目に涙を溜めていた。

カイは、自分を落ちつかせるように一息長く吐くと、

目を開ける。皆を見回し、唇を噛みしめた。

そうだ……俺は一人じゃない。

みんながいれば一きつとシェルを探し出せる！

カイはパンツと自分の頬ほおを叩くと、決意も新たに顔を上げた。

「シェルの暗殺が目的なら、この場で殺しているはずだ」

自分に言い聞かせるように、声を上げる。

「シェルは絶対に生きてる！」

皆がカイの言葉に、力強くうなずいた。カイはすぐさまクロエに問う。

「クロエ、ここからの抜け道はないか？」

クロエが首を振った。

「〈使役靈〉たちは、ないつて！」

ミリアがうなずき、続ける。

「なら、転移魔法だわ！　ヴィー、どこかに転移の痕跡
はない？」

ヴィーがぐるりと周りを見回した。賢者セージの探知能力は
並ではないのだ。

「うみゅう……二階だな」

階段を登るヴィーの後を追い、皆も二階へと上がつた。
カイが最初に降り立つた、大きめの部屋にヴィーは入つ
ていく。

木材が散乱している室内を見回すと、ヴィーが一点を

さんらん

見つめた。

「むーこだ。〈転移〉の痕跡がある！　一にやるほど……転移するから屋根まで封印してなかつたんだな……おーっしー」

「追跡できるか？」

「黙つてろ！　もうやつとるわ！」

カイが問う前に、ヴィーは探索魔法を起動していた。
複雑な探索魔法陣が、経路を解析していく。しかし――
「……え？　うきやああ！　追跡妨害してある！　最高
級の転移卷物を使つたな！」

ヴィーがぐぬぬと苦い顔になつた。

「あのすげー結界といい、魔法蟲やら、最高級卷物まで

まほうちゅう

スクロール

……敵は相当やばい奴らだぞ！」

「……追跡できなかっのか？」

ヴィーが悔しそうにうなる。

「できないわけないだろ！　一でも、時間がかかりすぎるんだよ！」

カイが歯を食いしばるような表情を見せたあと、クロエに尋ねる。

「〈シャドウ隐形靈〉は!?　—そ、そつか……消されたんだつ

たな……」

「うん……消されてなければ、だいたいの場所くらいはわかつたはずだけど……ごめんお兄」

「謝らなくていい。クロエはよくやつてくれている」

転移先

ポータ

ルを助けることもできない。

皆が、不吉な予感に静まり返る。だが一
絶望して当然のこの状況で、カイは、すぐさま周囲を
探し始めた。

「みんな、大丈夫だ。シエルなら！」

カイが木材をどけ、床に目を落とす。

「一ぜつたにに、なにか手がかりを残している」

ミリアとクロエが、目を合わせるとなずき、カイに
続いた。散乱した椅子^{いす}や割れたカップの破片をどかし、
食い入るように手がかりを求める。

ヴィーは三人の姿を見て、驚きに目を見開いた。

「……な、なあ……こんなこといーたかないけど……手
がかりなんて、残す時間あつたと思う……？」

ミリアが、横目でヴィーを見ながら口を開く。
「ヴィー、心配いらないわ。シエルなら、きっと何か残
したはずよ」

ミリアが平然と言うのに、ヴィーは思わず後ずさりし
た。

「な……なんで、そんなことがわかるんだ……？」

三人が答える。

「シエルだからだ」カイがー

「シエルは守られてるだけのお姫さまじゃないわ」ミリ
アが。そしてー

「知らなかつた？ シエルつてけつこう度胸すわつてん
のよ？」とクロエが一

三人は、シエルを信じていた。

彼女なら、絶対に、手がかりを残す——
シエルファー・クランニアスティリオは、いざというと
き捨て身で行動する——そう、皆が確信していた。

ヴィーがため息を吐くようになると
「おまえらつて……すげーな……」

しばらくして——カイが動きを止めた。息をのみ、目
を見開く。

一度、思いきり歯を食いしばると、口を開いた。

「……見つけたぞ——シエルの手がかりだ」

「え?」「お兄、どこ!」

ミリアとクロエ、ヴィーもカイに駆け寄る。そして
一皆の目が見開かれていく。そこで、彼女たちが見たも
のは――

「な……なんてこと……シエル」「うそ……でしょ……」
ミリアが思わず口元を押さえ、クロエが眉根を寄せて
涙目になつた。ヴィーは――

□を開け、すとんと尻しりもちをつく。

「……シ……シエルは――オレさまのこと……信じた
のか……」

床に落ちていたもの、それは――
カイが膝ひざをつけ、体を震わせる。

——第一関節から噛みちぎられた、王女の小指。

賢者の持つ因果干渉魔法〈復元レストア〉を使えば、この小指は元に一つまり、自分自身に戻すとする——その効果を利用すれば、きっと場所を特定できる——

そう考えたシエルは、決死の覚悟で小指を噛みちぎり、手がかりを残したのだ。

ヴィーを信じて——彼女の魔法を信じて——

それが可能かどうかわからぬ。推測でしかない。ただ指を失うだけかもしれない。

それでも、シエルは手がかりを残した。

皆を信じて——皆が来てくれることを信じて——

これが第四王女、シエルファー・クランニアステリオ。

そこにいた全員が、シエル救出を心の中で固く誓つた。

「これで、たどり着ける」

カイは顔を上げ、皆に深くうなずいた。

「追うぞ、シエルを」

* * *

「よし……ポータ転移成功だ——この先の屋敷で、あの御方が待つていらっしゃる」

キース会長が言うと、リツツ副会长、書記のモニカがうなづいた。あの御方の役に立てるかと思うと、三人は興奮を隠しきれない。魔法蟲に、そのように思わされて

いるのだ。

シェル王女は気絶させられ、猿ぐつわを噛まされてい
た。そして用意周到なことに、そのほつそりとした首に
は、魔法詠唱を妨害するアイテムへ嘆きの首輪なげくびわが嵌め
られていた。

ここは王国西方の高原地帯——王侯貴族の避暑地ひしょちにも
なっている場所である。

「追跡は当分不可能だ。さあ、シェル王女を屋敷やしきまで
——ん？」

キース会長の表情が曇くもつた。なぜなら——
「……なんだこの怪我けがは……」

ぐいっと会長がシェルの腕をつかむ。会長の目が見開

かれた。

「な……なぜ指から血が！」

そのときである——

「一見つけたぞ……シェルを一返してもらおう！」

「な——」

上空からの声に、会長たち二人が空を見上げる。直上に広がる魔法陣——そこから飛び降りてきたのは——

「うおりやああああああつ！」

——巨大な両手剣を振りかぶる、悪鬼の^{あつき}ごとき男——
王国最強の暗黒騎士——カイ・ブラッディアである。

「なぜ、ここが!?」——ええい、迎え撃て！——

キース会長の叫びに、リツツがすかさず矢を番^つえた

「だが――

「遅い！」

「有無を言わせぬ豪快な一撃が炸裂する。地が裂け、爆発したかのように大量の土が飛び散った。

「くくううつ！」「化け物かよ！」「なんて威力なの！」

爆風に吹き飛ばされた三人が、驚愕の表情を浮かべる。カイの一撃を受けた地面には、まるで爆裂魔法が発動したかのような大穴が穿たれていた。

カイが剣を構えなおし、油断なく三人に目をやる。

今のは――ただの威嚇。

シエルの安全を確保できない限り、カイも全力は出せないので。

キース会長が、珍しくうなり声を上げる。

「ちつ！ なぜ転移位置ポータがわかつた!? 一な……これ
は！」

シエル王女の小指が元に戻つていくのを見て、会長の
端正な顔ゆがが歪んだ。

「〈復元レストア〉!? まさか……術式効果を辿たどつてきたのか!
——くつ……常識外れどもが！ とにかく屋敷まで

」

会長が指示を出そうとした瞬間——

「黙れえええええええつ！」

カイが裂帛れっぱくの気合いを込めて叫ぶ。カイの全身から
禍々しい気配が一举に溢あふれ出し、役員たちに襲いかかる。

黒い霧のような殺意を浴び、三人がびくりと震え、動けなくなつた。

暗黒騎士スキル——プレッシャー威圧（エイジヤク）である。

カイはすかさず会長の目前にまで踏み込み——「ひゅう！」——鋭い呼氣とともに、横薙（けんげき）ぎに剣を振るつた。本気の剣撃（けんげき）ではなかつたが、硬直した相手を無力化するには十分である。しかし——

「む！」

キース会長は、紙一重のところで硬直から抜け、カイの攻撃を回避すると——逆に鋭い突きを放つてきた。カイが目を見開く。その突きが、あり得ない方向から伸びてきたからである。

なに！　どこから剣が出た？

カイは突きをかわすと、交戦を嫌つて一旦後方へと飛び退つた。その後を追うように、何本もの矢が連續で放たれる。

「く！」

カイはすべての矢を叩き落とすと、強く一息吐き、油断なく構え直した。

⋮⋮硬直からすぐには抜けるだけでなく、反撃までしてくるとは⋮⋮

ぐつたりしているシエルを見て、怒りと焦燥に駆られるカイだつたが、彼らの予想以上の実力を見て、警戒を怠らない。

しおうそう

おこた

これは……まさか——

キース会長が、役員の二人にうなずき、カイに目をやつた。

「ふふ……僕たちの力に驚いているのだろう？　これも——あの御方から授かつた力だ！　見るがいい——」

うおおおおおおおおんつ——

三人が奇妙な雄叫びを上げると——彼らの目が、見る間に赤く染まつていく。みしりと体が一回り大きくなり、肌が黒みを帯びていつた。

身体能力が飛躍的に上がり、ともな痛覚つうかくが鈍にぶり、恐怖心が薄らぐ。それに伴い、潜在的な魔力やスキル能力も高まつていいく——

魔法蟲の分泌物による、身体・精神強化である。

やはり……蟲の力か！

カイはぎりりと奥歯を噛みしめた。そのとき——
「う……ううう！ ううううう!!」

目を見ましたシエル王女がうなり声を上げ、目に涙を浮かべてカイを見つめる。

それを見て、カイが——
「シエル！ いま助ける！」

一步踏み出そうとする——書記のモニカとリツツ副会長が、目の前に立ちふさがつた。

瞬間——カイの髪の毛がぶわあつと逆立つ。

「そこを——退けえええつ！」

叫び声を上げると、一瞬にして二人の目前まで踏み込んだ。シエルからは十分離れている。彼女を巻き込む恐れはない！ ならば一斬きる！

カイは二人を殺す覚悟で、渾身の水平斬りを叩き込むとするが――

「ううううううううう！」

――懸命けんめいにうなる王女の顔を見て、「くつ！」無理やり剣撃を止めた。カイは一度、思いきり奥歯を噛みしめると、後方へと飛び退さる。

二人の役員がカイの奇妙な行動を見て、いぶかしげに顔を見合せた。カイは悔しそうに顔を歪める。

カイが攻撃を止めた理由、それは——シエル王女が何度も首を振つたからだつた。

シエルの表情を見て、カイにはすぐにわかつてしまつた。

その意味は——『殺さないで』。

生徒たちは蟲に操られているだけ——シエル王女は、彼らを殺して欲しくないのだ。

そしてまた、王女は、カイに、生徒殺しの汚名おめいも着せたくないのである。

カイにはわかつてしまつた。わかつてしまふことが——苦しい。

シ……シエル……！

カイは体を震わせ、唇を噛んだ。

躊躇したカイを見て、キース会長は――

「リツツ、モニカ。こいつを足止めしろ！ 屋敷までたどり着ければ――僕たちの勝ちだ！」

――すかさずシエル王女を抱え、屋敷に向かつて走り出した。

「ま、待て！ シエルを返せ！」

しかし――

「ここから先は行かせませんよ？」

「ここを通りたきや、俺たちを倒してからにしな！――

つて言つてみたかったんだよねえ」

二人の生徒会役員が、カイを牽制するように回り込み、

行く手を阻む。
はばむ。

く……！

シエルの想いを知ったカイは、一度歯を食いしばると背後へと飛び退り、一緒に転移^{ポート}してきたミリアとヴィーに目をやつた。

「ミリア……ヴィーは大丈夫か？」

カイが尋ねると、ミリアは眉根を寄せ、小さく首を振る。

「すごい熱を出してる……無茶しすぎたのよ……」

ヴィーは〈復元^{レストア}〉の術式効果を逐一^{ちくいち}計算しながら、何度も近距離^{ヘイタ}〈転移^{ポート}〉を繰り返してきた。そもそもヴィーでなれば成し得ない、無茶苦茶な追跡である。魔力経

路が焼ききれるほどの、過剰な魔法行使であつた。

ヴィーは大粒の汗を流し、荒い息を吐きながら、ミリアとカイを見上げる。震えながらも、口元を上げて見せた。

「なんだよ……そんな顔するな！ 大丈夫……オレさま、天才だぞ？ ……コロリに^{ポータ}転移位置を教えないどな

⋮⋮

少しでも負担を減らすため、^{ポータ}転移^{ポータ}で連れてこれたのはカイとミリアの二人。

クロエは今、学園で^{ポータ}転移^{ポータ}が使える術者を探していく途中である。^{ポータ}転移^{ポータ}は高位魔法であり、教師でも使える者は限られるのだ。

ヴィーは自分の影に目を落とすと一命ずる。

「……おい、〈**隱形靈**〉……コロリに場所を教えろ——行
け！」

それは死靈——クロエが通信用につけてくれた
〈**隱形靈**〉である。死靈は一度震えると、とぶんと影の
中に沈みこみ、見えなくなつた。

カイは膝をついて、ヴィーを見つめる。

「ありがとう、ヴィー。ここまで来れたのはおまえのお
かげだ。無理をさせてすまなかつた……」

「うるせーぞ、カイ……とつととシエルを連れもどせ
……！」

ヴィーは咳き込みながら、苦しそうに口にした。ミリ

アガヴィーの頬を優しく撫^{ほお}でる。

「ヴィーはここで休んでいてね」
カイがうなずいた。

「あとのことは俺たちに任せろ」

二人は目を合わせると、立ち上がり一静かに振り返る。
その視線の先にいるのは、魔法蟲に操られた生徒会の
二人——リツツとモニカ。

そしてその先に——

シェルを連れ、屋敷へと急ぐキース会長がいる。

カイは、はやる気持ちを抑え、口を開いた。

「ミリア、聞いてくれ……。シェルは——会長たちを死
なせたくないし、俺たちに生徒殺しをさせたくもないん

だ……。——正直に言えれば、俺は全員を殺してでも、——
刻も早くシエルを助けたい……だが——

カイが噛みしめるよう口にする。

「シエルの想いを無下にしたくない。俺はその想いに——応えたいんだ」

隣で、ミリアが一瞬泣きそうな表情を見せる。

「……ほんと……シエルらしいわね……。——それに……きつとシエルは信じてるのよ——」

ミリアがカイを横目で見た。

「私たちになら、生徒を一人も殺さずに、この事態を解決できるって」

カイは、ミリアの言葉に奥歯を噛みしめる。

「そうだな……きっとそうだ。その想いと信頼に一応えよう

二人は不殺^{ふさつ}の決意を胸に一劍を正面で立てる。王国最高レベルの暗黒騎士と、聖騎士^{パラディン}の中の聖騎士^{パラディン}。

そして一

レアスキルを持つ聖射手^{アーチャー}と、得体の知れない治療師^{ヒーラー}

学園屈指の実力者たちが、ここに対峙^{たいじ}した。

魔力切れのヴィー！

人質に取られたシエル。

魔法蟲によつて強化された一傷つけられない生徒た

ち。

「では一に行くぞ」
シェル王女を救出するための、厳しい戦いが一いま、
はじまる。

* * *

「カイ、ついてきて！」

「わかつた！」

盾たてを装備そうびしてきたミリアは、縦に長いカイトシールドを前面に掲げ、敵へと疾走しつそうした。カイは、ミリアを追いかけるようにして走る。

一殺さずに、武装を解除し、無力化する。

一撃必殺の剣技を持つカイにとつて、そのような戦闘はもどかしい限りだつたが——聖騎士ミリアには、そういつた纖細な戦い方はお手の物であつた。

カイは内心の怒りと衝動を抑え、ミリアに従う。

最初の相手は——

「モニカは治療師よ！ 定石どおりなら、彼女が先だけど——」

カイがうなずいた。

「ああ。向こうの攻撃力は聖射手のみ。飛び道具を潰すのが先だな！」

「そういうこと！ いくわよ……一気に一距離を詰める！」

ミリアが器用に懷から巻物^{スクロール}を取り出すると、前方に放り投げる。巻物^{スクロール}が燃え上がり、青白い魔法陣が現れた。

彼女はその魔法陣を、全速力で駆け抜ける。ミリアの体が輝き、魔法効果^{ダブル・ストレングス}が発動した。

その魔法は一^{ダブル・ストレングス}へ強化^{ストレングス}。

支援魔法へ強化^{ストレングス}の上位魔法である。

ミリアの筋力が急激に高まつていく。彼女は効果を確認すると、ぐつと前傾姿勢を取り一

「先行する！」

一気^{アーチャー}に加速した。

目指すは、副会長のリツツ。弓矢^{ゆみや}での攻撃を得意とす

る聖射手に、距離を取らせてはいけない。懷に入り込む

のが定石である。

逆に言えば、距離を詰めてしまえば一弓矢など恐る
るに足りないので。

爆発的な速度で敵に接近するミリア。見る間に距離が
縮まる。近づく。

もう目前！

リツツ副会長はミリアの突進に気づくと、すかさず矢
を番え、引き絞る。ミリアが、矢を警戒し、盾を前方に
押し出した。それを見て一リツツは不敵に口元を上げる。
彼は、矢の軌道を自在に変化させるスキルを持つてい
る。

盾に隠れた体を狙うのは、彼にとつて造作もないのだ。

むしろ、盾の向こうに必ず標的があるため、狙い撃つのに好都合なのである。

「盾で守れると思つたか!? こだから防_タ御_{ンク}役は!」

リツツが叫び、連續して矢を放つた。その尋常ではない矢の数。彼は一度に複数の矢を放つことができるのだ。左右から弧を描き、盾を避けるようにして何本もの矢が迫る。リツツが舌なめずりをし—

「ひやははは！ あつけねえなああつ！」

盾の向こうに、矢が吸い込まれた瞬間—

「……は？」

リツツの目が見開かれた。矢が一盾の向こうにいるはずのミリアを素通りして、左右に分かれて飛んでいつ

だからである。

「……え？　ええつ!?」

リツツが、驚きの表情を浮かべ、思わず声を漏らした。
そのとき――

白と金色がリツツの視界をかすめる。

そのとき、聖騎士ミリアは――

「な――」

――リツツの――右側面に――回り込んでいた。

「なにいいいいいいいつ!?」

リツツが顔を歪め、正面の盾を見る。盾が金属音をさせて――地面に落ちた。ミリアが、口元をにやりとさせる。そう。盾は――おとり化。

ミリアは、リツツの目前で、盾を——前方に投げたのだ。
リツツが盾に気を取られている間に、彼女は右へと回り
込み——そして——

「カイイイツ！」「おうつ！」

カイは——

リツツの顔が、ぶざまに引きつる。

カイは、リツツの——左側面にいた。

これは、左右からの挟撃——カイとミリアの息の合つ

た連携攻撃である。

二人はなんの打ち合わせもなく、聖射手アーチャーに対して、高

度な戦術を組み上げたのだ。

幼いころから共に研鑽けんさんを積んできた時間は——伊達だてで

はない。

「くそおおおおおおおつ！」

リツツが大声を上げた。矢を放っている時間などない。二人は一歩大きく踏み込むと――

「ひゅう！」「しゅつ！」

鋭い呼気とともに刺突攻撃を繰り出した。急所は狙つていなもの、当たれば大怪我は免れない。一直線に迫る二本の刃^{やいば}が、リツツの胸元に届く瞬間――

「一なんつって

今度はリツツが一にたりと笑う。

「なに！」「んつ！」

カイとミリアが、同時に目を見開いた。二人は、無理

やり体をひねつて前方に飛び込むと一すぐさま起き上がり、後方へ跳んで、リツツから距離とを取る。なぜなら

二人が目を見合わせ、困惑の表情を浮かべた。

なぜなら、かわしたはずの矢が一喉のど元に迫つていたからである。一人をそれに気づき、辛からうじて矢の攻撃を避けたのだ。

「ひええ……いまのを避けるのかよ!?」どんだけだ、お前ら!

素直すなおに賞賛しょうさんの声を上げながらも、リツツは油断なく、次の矢を番える。

カイが眉根を寄せ、□を開いた。

「なぜ避けたはずの矢が？……回避することまで織り込み済みで、矢を放てるということか……？」

ミリアが、リツツをにらみながら答える。

「信じられないけど、そのようね。ほとんど魔法の域だわ……。避け続けていれば、いづれは矢が尽きると思つたんだけど――見て」

カイはミリアに促され、リツツ副会長に目をやつた。リツツは腰に回した矢筒^{やづつ}から、矢を何本も取り出しているが――

その様子を見て、カイは一度唇を噛むと、思わずうなる。

「あれは……魔道具か……？」

「……その類ね。おかしいと思つたのよー」

ミリアがくやしそうに□にした。

「あれだけ射ても一矢が無くならないなんて」
そう。

法アイテムー

リツツ副会長の矢筒は、代々、ローエン家に伝わる魔
その効果はー〈無限装填〉。

無限に矢を創り出す術式を封じた、レアアイテムである。

つまり彼の矢は一絶対に無くならない。

リツツが二人の視線に気づき、矢筒を叩く。

「なんだ？」矢の心配をしてくれてるのか？ ゼつてー

259

無くならぬから安心しな！」

彼は軽口を叩くと、面白そうに二人に目をやつた。

「お前らが、ただの名家出身のお坊ちゃん、お嬢ちゃんじやないのはわかつたよ。さつきのを避けられるのは、学園でも数人だろうからな！」

リツツがにやりと笑うと、声を上げる。

「改めて名乗ろう。俺はリツツ・ローレンス！ 生徒会副会長にして、聖射手アーチャーの名門ローレン家嫡子ちやくし！ —さあ、そろそろ本気でいかせてもらいうぞ？ とくと味わえ！」

聖射手アーチャーが銀色の弓を引き絞つた。

「俺の弓射スキル——〈狩女神〉をな！」

「来るぞ！」「散つて！」

地面を蹴^けつて、左右に別れた二人に――無数の矢が放たれる――

* * *

「くつ！ 接近させない気だな！」

『矢の数も多いけど――確実に急所を狙^{ねら}つてくるのが厄介だわ！』

カイとミリアは、リツツ副会長の弓射スキルに足止めを食らつていた。

リツツはは休むことなく、矢を番えては射る。速射能とも並でなかつたが――その矢は二人がどこに隠れても、

どう動いても、お構いなしに急所を狙つて飛んできた。まるで、すべてを見通すような正確さである。

変幻自在の弓射スキル——〈狩女神〉。

体内の蟲によつて、潜在能力やスキルも強化されているのだ。

カイはその顔に焦りをにじませる。

「……く……さきほど接近したときに剣技を放つていれば……」

ミリアが、向かい側の木の陰から声を上げた。

「バカね！ そんなことしたら一撃で殺してしまうでしょ！ あんたは加減ができないんだから！ ——いい？

なんとか殺さずに無力化するのよ！」

「……わかっている……！」

二人は矢の攻撃をしのぎながら、機会をうかがう。カイもミリアも、聖射手アーチャーと戦うのは初めてのことだつた。矢軸やじくは細く、黒く塗つてあり、薄暮はくぼの中ではほとんど見えない。二人は突然出現する矢を、音と気配だけを頼りに、なんとか避け続けていた。

リツツ副会長が、思わず感嘆かんたんのため息をつく。

「ここまで避けられたのは初めてだぜ……おつそろしい奴らだな——じゃあこれはどうだ！」

木の陰に隠れたカイに向かい、ぐるりと円を描くように矢が迫つた。

カイがすかさず体をひねつて矢を避けると——

「な！」

「驚くべきことに、木に当たつた矢が一爆発した。」「カイツ！」

向かい側の林に潜んでいたミリアが声を上げる。カイは横つ飛びして地面を転がり、すかさず起き上がる。頭を振ると、歯を食いしばった。

こ⋮⋮これは――

ミリアが目を見開き、叫ぶ。

「矢の先端せんたんに爆発物が！ そんなことまでできるの!?」

それは、衝撃を加えると爆発するようになし工こうされた矢であつた。信号弾などに使われる炸薬やくやくを、リツツは矢に応用したのだ。

二人は奥歯を噛み締め、目を見合わせる。

「無力化などと悠長に言つていられないぞ！」

「そのようね……」

聖射手アーチャーが、ついに標的を仕留めにきたのだ。いまの爆発で、林にいた鳥たちが一斉に飛び立つ。空が鳥たちで埋まつた。

「よし……ミリア——曰_ハ合流する！」

カイは狙われるのを承知で飛び出した。横目でリツツをにらみながら、向かい側の雑木林にいるミリアのところへひた走る。リツツの矢は——

「もう！ 無茶して！」

カイがミリアの側に飛び込むと、すかさず起き上がる。

二人は飛んでくる矢に備えたが――

「……む……？」

矢は一飛んでこなかつた。

二人はいぶかしげに眉根を寄せた。いまのは絶好の機会だつたはず。それなのに――

リツツは、矢を射なかつた――

「……なぜだ……？」 「……どうして射なかつたの

……？」

二人は考える。猛烈な速度で考える。そこに――突破口があると直感したからだ。

木の陰に隠れても、灌木^{かんぼく}の間に潜んでも、矢は正確に飛んできた。

まるで——そう——

まるで——見えているかのように——
見えている——かのように……？
まさか——

ハツとそのことに気づいた二人は、同時に——感づかれないよう——空に目をやる。そこには二人の予想どおり——

「おそらく、あれだ。ミリア」「そういうこと……」

遠くから、リツツの声が響いた。

「いつまで隠れてるつもりだ？　じゃあ遠慮なく、そこを——火の海にしてやるよ——！」

瞬時に、リツツのからくりを推測した二人は——

「カイツ！」「おうつ！」

一雑木林から躍り出た。左右にわかれ、全速力でリツツに迫る。

リツツが驚きの表情を浮かべた。

「お！ 特攻か!? おもしれーじゃねーか！ 受けて立つぜ！」

じぐざぐに走つても、回り込んで、矢は正確に二人目掛けて放たれる。爆発する矢に体勢を崩しながら、二人はその可能性に懸ける。

「ミリアー頼む！」

「任せて！」

走りながらミリアは一詠唱する。^{えいしよ}その魔法は、神聖

属性の支援魔法一

「——我が道を照らす——筋の光あれ——」
リツツが詠唱に気づき、瞬きした。

「な、なんだあ!? 明かりつけてどうする気なんだよ!
——まあいい、〈狩女神〉アルテミスの餌食えじきになりな!」

そう。その魔法は、明かりをつけるだけの魔法。
ミリアは空を見上げると、効果範囲を上空いつぱいに
設定した。そして——

高らかに宣言する。

「覆おおいつくせ——〈光明〉！」

瞬間、上空が光で満たされた。辺り一面が昼間のよう
に明るくなる。空に、光の薄い膜ができただようなものだ

つた。その膜で隠されたもの——それは——
リツツが顔を歪める。彼はなにかを恐れるように、矢
を射ちまくつた。しかし——

カイとミリアが確信し、うなずきあう。
当たらぬ。今までの弓射が嘘のよう^{うそ}に、彼の矢は
的外れな方向へと逸れていく。

正確さに欠けた矢など、この二人に当たるはずがなか
つた。

「くくくくうつ！」

リツツがうなり声を上げ、体勢を立て直そうとするが
——もう遅い。

カイとミリアは、そのときすでに——

「くーくそおおおおおつ！」

剣が届く間合いまで、リツツに迫っていた。

「ふつ！」

ミリアが素早く踏み込むと、矢筒を叩き斬り、返す刀で弓の弦げんを一斬る。その優美かつ正確な剣さばき。一瞬でリツツを武装解除し、「殺したらダメだからね！」ミリアがひと言いつて飛び退ると――

「わかつている」

彼女と交代に、カイが一步、大きく踏み込む。腰こしをひねり、大剣を立て、腕をしならせ――

聖射手リツツの顔が、恐怖で歪む。

「歯を食いしばれ――先輩殿！」

撃を一

「うおりやあああああああああつ！」

一叩き込んだ。

ぼぎりと鈍い音をさせ、リツツが一「がつ！」一吹
つ飛ぶ。

彼は雜木林の大きな木に激突すると、糸の切れた操り
人形のように地面に落ちた。そのまま、ぴくりとも動か
なくなる。驚いた鳥たちが、また一斉に飛び立つていっ
た。

「……よし。無力化成功だ」

カイが、残心して剣を收める。ミリアが小さくうなり

その回転力を一気に開放し、リツツの側面に渾身の一

こんしん

ながら、カイを見た。

「……そこまでしなくてもいいでしょうに……」

「なぜだ？ シエルが望まなければ、とつぐに殺していたぞ」

ミリアが深いため息をつくと、空を見上げた。〈光明〉の効果が消え、夕方の光に戻っていく。そして一空の高いところを飛んでいるのは——大きな鷹たか。

鷹は、周りの状況に今気づいたかのように、一度ばざりと翼つばさをはためかせると——声高く鳴いて飛び去つていった。

「……あれに気づかなかつたら、もつと手こづつていたわね」

「ああ。おそらく、聖射手のレアスキルなんだろう——」

カイも、飛んでいく鷹に目をやる。

「——鷹の目を借りるというのは……」

そう。リツツ副会長が、あれほど正確な弓射ができたのは——上から見ていたからだつた。

レアスキルへ鷹の目ホークアイ——鷹の視界に入り込み、戦場すべてを上空から俯瞰ふかんする、恐るべき聖射手アーチャースキルである。隠れても、潜んでも、上空から見れば一目瞭然いちもくりょうぜん。

そのからくりに気づいたのは——たくさんの鳥が飛び立つたとき、リツツが矢を放つてこなかつたからだつた。

絶好の機会に攻撃してこないのはおかしい。その理由を考えたとき——人は、何かが上空から見ていること、

そして、その何かの視界を鳥が塞いだことに気づいたのである。

ゆえにミリアは〈光明〉^{グローブ}で空を覆い、自分たちの動きを「鷹の目」から隠したのだ。

その鋭い洞察力と、瞬時の連携

すでに二人は学生のレベルを遥かに超えていた。

「よし、次に行くぞ」

「そうね、急ぎましよう。シエルが待つてる」

二人はうなずきあうと、シエル王女を追い、先を急ぐ

カイとミリアの二人ー

複数のレアスキルを持つ高レベル聖射手^{アーチャー}、副会長リツ

ツ・ローエンを駆逐す。

* * *

そのころ、キース会長に連れ去られたシェル王女は

「ううううう！　ううううううう！」

一必死の抵抗を続けていた。暴れ、わめき、悲しい
ような、怒つたような複雑な表情で、キースをにらみつ
ける。

キース会長は、脇に抱えるようにしている王女があま
りに暴れるため、業を煮にしめてその喉元に短剣を押し当

てた。会長がどす黒い顔を、シエルに近づける。

「あまり手間をかけさせないでほしいな……僕はあなた
のよう^{かんよう}に——寛容ではないのでね」

シエルが会長の目を見つめた。キースは彼女の目を見て——思いきり顔を歪める。

「……なぜ……そんな目で僕を見る……？」

王女の目に、怒りではなく、哀れみのようなものが浮かんでいたからだ。

「あなたまで……僕を——侮辱する気か！」

「うう！」

キース会長に突き飛ばされ、シエルは地面に突つ伏す。
その拍子に、口を塞いでいた猿ぐつわが外れた。彼女は

顔を上げると、キツと会長をにらむ。

「あなたが魔法蟲で操られていることはわかつています。でも——抵抗することはできたはずでしょ？！」

キース会長がぐつと詰めた。

魔法蟲は確かに人の精神を支配するが——強い精神力があれば、支配を免れることができるのである。心の中に弱い部分があれば、魔法蟲はその部分を刺激して、支配を強固なものにするのだ。

「会長！　あなたは名門ローエン家の子息ではないですか！　こんなことをする人ではないはずです！　『ご自身の誇りを一思い出してください！』

「……うるさい……」

会長は顔を強烈^{ヤヨウレツ}に歪め、歯をむき出しにした。

「うるさい、うるさい、うるさいいっ！　おまえに何がわかる！　王家に生まれ、なに不自由なく育つたおまえに！　僕のなにがわかると言うんだあああああつ！」

シェルは息をのむと一思わず言^{ハグマ}い返しそうになる自分を止める。

私^{わたくし}だつてー

私^{わたくし}だつて、お母さまが誰かわからない。

私^{わたくし}だつて、王宮でずっと陰^{カゲ}口^ドを囁^{ささや}かれてきた。

私^{わたくし}だつて、こうして命を狙^{ねら}われている。

私^{わたくし}だつて……私^{わたくし}だつて……！

ーでもー

シェル王女は、ふっと息を吐いた。

キース会長も、なにかを抱えている……でもそれを
一誰にも言えなかつた……

自分の秘密を打ち明けられるほどの、仲間がいなかつ
たんだわ……

ああ……

シェルは思う。

私は、なんて幸運なんだろう——

彼女はキース会長を見上げる。

だつて私は、カイと……そしてみんなと出会えたのだ
から——

シェル王女は、いたわるように会長に声を掛けた。

「確かに……そうです……私に会長のことはわかりません……だから——」

シエルは、この状況で——誘拐の実行犯本人に——微笑ほほえみかける。

「私でよければ——会長のことを聞かせてもらいませんか？」

キース会長は、目を見開いた。彼は思わず後ずさる。体を震わせる。しかし——

シエル王女の、心からの言葉も——

「……ふざけるな……」

「……え？」

——キース会長には、伝わらなかつた。

「ふざけるなど言つたんがあつ！ 僕を哀れんでいるのか!? 見下しているんだろう！」

「ち、違います！ 会長、話をー」

「うるさいいいいいつ！」

端正な顔を歪ませ、歯をむき出しにして怒鳴るキース

会長。

彼を怒らせたのはー彼が感じてしまつたのはー器の
違い。

シェル王女が見せたのは、敵さえも包み込もうとする、
人間としての器の大きさであつた。

婚外子である異端の第四王女ーシェルフアーラ・クラ
ンニアステリオ。

キース会長は彼女に、大いなる気高さを感じてしまつた。

シェルに一王の器を見てしまつたのだ。
そして、自分とのあまりの違いに愕然とし、自身の不甲斐なさを嫌悪し、彼は一

「シェルファー・クランニアステリオ！ 澄ました顔しやがつて！ 無傷でとのご命令だつたが一もう知つたことかああ！」

キースはポケットから瓶びんを取り出すると、血走った目でシェルに迫る。

その瓶の中には一
ああ！

「会長！ やめてください！」

「うねうねと蠢く魔法蟲が入つていた。」

「シエルはなんとか会長を説得しようとする。」

「あなたは聖騎士なのでしょう？ どうか騎士の誇りを思い出してください！」

会長は一せらりに怒りを露わにした。

「騎士の誇りだと？ 僕は断じて一騎士などではない！」

起き上がり、逃げようとするシエルを、キースが追いかける。

「おまえのせいだからな！ 僕は悪くない！ おまえにも、この蟲で、僕と同じ屈辱を！」

キース会長が歯をむき出しにした。

「味あわせてやるううつ！」

「カ、カイ！」

心の中でカイを呼び、逃げるシエル。

我を忘れ、王女を追いかけるキース。

彼の手の中の、おぞましい魔法蟲。

後ろ手に縛られ、失血によつて体力を失い、魔法詠唱^{えいじょう}を妨害する首輪を嵌^はめられたシエル王女は——その絶対

絶命のピンチにおいても——

大丈夫……ぜつたいにカイが助けに来てくれる……だ

から——

覚悟を決めると、唇を噛み締めた。

だからそれまでー絶対に諦めない！
あきら

逃げるのよ！

神。

カイへの厚い信頼と、カイに教えてもらった不屈の精神。

シェル王女は力の限り、見知らぬ地を駆けるー

* * *

「む！　いたぞ」

カイとミリアが先を急ぐと、前方の木陰こかげに立っていたのは一書記のモニカだった。

彼女は所在なさげにうつむき、木の幹みきに寄りかかって

いる。

ミリアが走りながら声を上げた。

「モニカは治療師よ——攻撃力は無い！」

「よし——先に行く！」

カイは大剣を抜刀すると、警戒しながら、モニカとの距離を詰める。なにも仕掛けてこない。彼女は支援役であり、攻撃役アタッカと一緒に行動してこそ、その力を發揮する役回りだつた。

ミリアをちらりと振り返る。

「仕掛けてこないなら、構わず走り抜けるぞ！」

「わかつたわ！」

カイが速度を上げるため、地面を蹴り、大きく一步を

踏み出したその瞬間

ツ
!

まさしく——地面に、白い魔法陣が広がつた。その術式構造は

「なに!?」
これは—エヘン、ヒヒヒヒヒヒー。

「力、カイツ！」

力イが白い光に包まれ、感電したように大きく震え
「ぐはつ！」——膝から崩れ落ちた。苦悶の表情で、歯
を食いしばる。力イは大剣たいけんを杖代わりに、なんとか体を
支えた。

ミリアが驚きの表情で、声を上げる。

その術式は

「し、神聖治癒魔法!? まさか……接触発動にしてある
っていうの！」

そう、それは触ると発動するよう調整された神聖治癒
魔法。

言わば一治癒魔法の地雷である。

カイが体を震わせながら、立ち上がつた。頭を振り、
木陰にたたずむ治療師ヒーラーをにらむ。

暗黒体质のカイにとつて、神聖治癒魔法は大ダメージ
の攻撃魔法と同じなのだ。

ミリアが唇を噛み締める。

「こいつ……カイの弱点を一知つてる！」

書記のモニカが、くすくすと笑いながら、木陰から姿

を表した。

「あらあら、そんなものに引っかかって……駄目な後輩こうはいねえ。言つておくけれど、その辺り一帯一地雷原だから

モニカが両腕を広げ、微笑む。

しかし――

「……だから？」

ミリアは少しも臆おくさず、モニカの地雷原に踏み込んだ。
治療師モニカが目を細める。

この治癒魔法の地雷は、暗黒体質のカイを狙つたものである。

聖騎士パラディンであるミリアには、まつたく意味がなかつた。

むしろダメージが治つて好都合ですらある。

「こんなもの、私が先行して発動させれば済むことですし
よう！　一カイ、後からついてきて！」

「わかつた……頼む！」

ミリアが地雷原に踏み込み、モニカ目掛けて走る。
彼女は華麗にレイピアを抜刀すると一地面を蹴つて
加速した。

「悪いわね先輩　一通らせてもうう！」

治療師に物理攻撃力はない。地雷原を突破されてしま
えば、モニカに戦う術^{すべ}は残されていない。しかも相手は、
聖騎士^{パラディン}の中の聖騎士^{パラディン}ミリア・ソレル。戦闘になれば、一
瞬で勝負がついてしまうだろう。それなのに――

治療師モニカは、まるで慈母のような笑みを浮かべた。

「どうぞどうぞ」

そのぞつとするような微笑みに、ミリアが眉根を寄せた瞬間――

「ん！」

ミリアの足元に広がる、白い、聖なる魔法陣。神聖治癒魔法の発動である。

「あら、回復してくださいさるの？」 ありがとーじゃあね、

先輩！――

ミリアが大きく一步踏み込み、しんそく神速の刺突しどつをモニカに放つ。ミリアの体が、治癒魔法発動により白く輝いた。レイピアの剣先が一モニカに達しようとする――その

「ぐつ！」
ミリアの剣撃が止まり、彼女が一度、ぶるりと体を震わせると—
「かはつ！」
—大量の血を吐き、膝から崩れ落ちた。ミリアは呆然ぼうぜんと、地面に染み込んでいく自分の血を見下ろす。
「……え？」
何が起こったのか、ミリアにもわからない。彼女は胸を押さえて咳き込むと、さらに血を吐いた。遠くで見守つていたカイの目が一見開かれていく。
「なーミリアあああつ！　いま行く！」

カイはすぐさま駆け出すると、大きく地面を蹴つてジャ
ンプした。着地点に地雷があるかもしれないが、一発や
二発なら耐えられる。とにかく今は、ミリアを助けるこ
とが先決だつた。

しかし――

「なにつ!?

跳んでいるにも関わらず、地雷が一発動する!
地面から白い光が柱のように伸び、カイの体を覆つた。
地雷の発動範囲は、上空にまで及んでいたのだ。
しまつた!

カイは体を無理やりひねり、治癒魔法の効果範囲から
逃れようとする。だが――

「ぐくうううううううう！」

数発の治癒魔法を喰らい、吹き飛ばされた。体の芯まで貫かれるような凄まじい衝撃に、カイはうめき声を上げる。辛うじて体勢を立て直すと、なんとか着地した。

「くく……上からでも……ダメか」

体中から煙けむりが上がる。カイは全身の痛みに耐えながら、歯を食いしばつた。

この強烈なダメージは、低レベルの治癒魔法ではない

⋮⋮

カイは、このダメージを体で覚えていた。

そう。地雷はすべて、高位の神聖治癒魔法——キュアオール全快キンケイ——で作られているのだ。

「ミ……ミリア……大丈夫か！」

カイに呼ばれ、ミリアは困惑した表情で顔を上げる。口元は血で真まつ赤かになっていた。

なぜダメージを受けたのか——わからない。

治療師モニカが、静かに、膝をついた聖騎士に目を向

ける。

蔑さげすむような、見下すような、憐あわれむような目で——微笑んだ。

「うふふ……なぜ、こんなことになつたのか？　なぜ、瞬殺しゅんさつできただはずの治療師ヒーラーの前で、こうしてひざまずいているのかわからない——そんな顔をしていますね？」

ミリアが歯を食いしばり、モニカを見上げる。

モニカは、おさなご 幼子さどにでも諭すかのように続けた。

「あなたは治癒魔法のなんたるかを、まるで理解してい
ない……」

治療ヒーラー師が、悲しそうに首を振る。

「治療できるということは、私たち治療ヒーラー師は一命を操
つているのよ？ 生命力を操作できるのよ？ その意味
がわかる？ ん？ わからない？ ……ふふ……じやあ、
教えてあげる」

モニカがうなずき、木の幹に手を添えた。

「生命力は文字通り一命の力。こうして、ちようどい
い量を与えれば、生き物を愈いやすこともできるし——
生命力を流し込まれた木の縁みどりが、突然鮮あざやかになり、

葉がつややかに輝いていく。

しかしー

「こうして過剰に与えればー」

ミリアが木々の変化を目かの当たりにして、息をのむ。つやつやしていく葉に太い葉脈はみやくがぼこりと湧き上がり、限界に達すると、ぶしゅっと液体を飛び散らせて破裂はりゃくした。力強かつた幹も、内側から盛り上がりつてくる若い木肌きはだが表面を食い破り、やがて中身がどろりと溶けていく。

木は瞬く間に、肌色はだのどろどろした液体のようになつて、地面に広がつていった。モニカが続ける。

「こんな風に、生き物を一壊すこともできる」

ミリアは胸を押さえ、歯を食いしばつた。

「ま……まさか……そんなことが……」

「うふふ……もう少しで壊してあげられたのに。あなた、血圧が異様に高くなつて、内臓ないぞうの血管が破裂したのよ？だから血を吐いたってわけ。わかる？」

モニカが笑いをこらえきれないような顔をして、両腕を広げる。

「治療ヒーラー師なを舐めたおバカさんたち。私の『超過治癒オーバーキュア』をたっぷり味わいなさい」

カイも、ミリアも、目を見開いた。

命を操る治療ヒーラー師は一命を壊すこともできる。

治療師モニカは、歯をむき出しにして、宣言した。

「ようこそ——治癒魔法の地獄へ」

* * *

「さて、聖騎士さん。まずは、そのおてんばな足をもう
おうかしら？」

治療師が手を広げ、詠唱を始めた。狙いはミリアの一足。

ミリアが青ざめた顔で息をのむ。彼女は、モニカに近づきすぎていた。

「くつ！」

土をかき、その場から懸命に離れようとするミリアだったが——もう遅い。

詠唱が終わる——宣言が始まる——モニカの、唇が、動く——

ミリアの顔が、絶望で歪む。

「力……カイイイイツ！」

ミリアが手を伸ばし、助けを求めた瞬間——
カイは——

「……すこし手荒くするぞ？」

——ミリアの、すぐ目の前にいた。

ミリアの目が、大きく見開かれていく。

一瞬で移動するそのスキルは——暗黒騎士スキル

シャドウラッシュ
〈影走〉。

カイはミリアを助けるため、地雷原を一気に駆け抜けてきたのだ。

ミリアが悲痛な表情を見せる。

「バ、バカッ！ なんで来たのよ！ 地雷が！」

カイの全身に、白く輝く、無数の魔法陣が浮かんだ。
「着地に備えろ！」

ミリアにそう言うと、カイは、彼女を抱きかかえ——
「……え？ ちよつカイ——きやあああああああつ！」

一地雷原の向こうへ、渾身の力でミリアを放り投げた。ミリアは空中でなんとか体勢を整えると、地面に転がるようにして着地する。

「力、カイツ！」

ミリアが振り返ると、カイが地雷原の中央で仁王立ちしていった。

その全身に、無数の魔法陣が広がつてていく。

治療師モニカが、カイを指差し、お腹を抱えて笑つた。

「ぎやははははは！」

いい気味！

その数の

全快

に、あんた耐えられる？　ぷぷつ、むりむりむりいいい！　ぜつたい無理！　あんた死んじやうよ？　死んじ

やうね？　一てゆーか

モニカが満面の笑みを見せる。

「死ねえええええええええ！」

「いや……やめ……やめてええ！」

ミリアが涙の溜まつた目で手を伸ばす。モニカの高笑い。カイの全身に広がる魔法陣。

高位の神聖治癒魔法 〈全快〉^{キユアオール}が、カイの全身で一

カイが覚悟を決めたように、目を閉じた。

一発動する！

白い光が一面に弾け、光の柱が何本も伸びる。目を開けていられないほどの眩しさ^{まぶしさ}。精霊の加護を受けた聖なる力が、暗黒体质であるカイの体に、一気に、激流のごとく一流れ込む。

「カイイイイイイイイイイツ！」

ミリアの悲痛な叫び。〈全快〉^{キユアオール}はカイにとつて、爆裂

系魔法の直撃に近いダメージがある。

そのダメージが、数十も積み重なるのだ。

到底、無事では済まない。いやーもはや、最悪の事態を考えざるを得なかつた。

白い光が薄れ、視界が元に戻つていく。

治療師ヒーラーが嬉しそうな笑みを浮かべた。

「きひひひ……消けし炭すみになつたか？」哀れな暗黒騎士いつ！」

「カ……カイ……」

絶望に、固く目を閉じていたミリアが、恐る恐る、目を開ける。顔を上げる。カイが立つていたところに一目を向ける。

そこで、ミリアが見たものは——

「……え？」

治療師^{ヒーラー}が、目を見開き、ぽかーんと口を開けた。

「…………はあ？」

そこに立っていたのは——無傷のカイ。

暗黒騎士は、あれだけの神聖治癒魔法を受けても、まつたく無傷で佇んでいた。

カイは、ふうと長い息を吐く。
「間に合ってくれたか……」

呆然としていたモニカは——

「な……なんで無傷？　は？」

はあああああつ!?

よ！　嘘だわこんなの！——くらえ！　^{オーバーキュア}超過全快^{オール}うそ

ツ！」

モニカ渾身の〈超過治癒〉がカイの体で一発動する。

しかし――

黒い煙のようなものが上ると、その治癒効果は、瞬く間に一消え去つていた。

「……うそ……うそよ！　嘘おおおおおおつ！」

治療師(ヒーラー)が顔を歪め、思わず後ずさりする。

カイが振り返り一〇元を上げた。

暗黒体质のカイに、神聖治癒魔法が効かなかつた理由、それは――

「来てくれたか――」

カイの視線の先にいたのは――黒い制服の少女。

彼女はツインテールの黒髪を肩の後ろに回し、片方の

眉まゆを上げた。

「——クロエ！」

カイの妹にして、天才死靈術師ネクロマンサ——クロエ・ブラッデイアである。

「お兄、こんなのに手こずつちゃって……私が来なかつたらどうするつもりだつたの？」

「来てくれると信じていた」

「ふうん……あつそ！」

クロエは、誇らしげに口元を上げると——まだ混乱している治療師ヒーラーに目を向けた。

「な……なぜ！　なぜ私の『超過治癒オーバーキュア』が効かない!?」

黒い制服の少女は、可愛らしい仕草しぐさで小首をかしげる。

「あれ、まだわかんないの？　これ見ればわかる？」

一姿を表わせ 〈低級ゴースト靈〉！

クロ工が声を掛けると、カイの周囲に、何十体もの 〈低級ゴースト靈〉が出現した。

治療師ヒーラーが、そのことに気づいたのか、悔しそうに顔を 歪める。

クロ工が続けた。

「あんたが治癒魔法をかけてたのは、お兄の周りにい る 〈低級ゴースト靈〉だつたつてわけ！　治癒地雷も同じ理屈よ。 わかつた？　一あーあ……あんたのせいで、〈低級ゴースト靈〉 たくさん消えちゃつたけど！」

モニカが首を振りながら、後退りしていく。

クロエがにこりと微笑んだ。

「大盤振る舞いしてあげる。〈食屍鬼〉——地雷原を蹂躪して！」

オオオオオオオオオオ！

地面のあちこちから這い出してきたのは——腐りきつた死体たち。濁つた目をモニ力に向けると、一斉に彼女に向かつて殺到した。〈食屍鬼〉は生者を喰らうのである。

「ひ……ひいいいいいつ！」

モニ力が恐怖に目を見開き、涙を流しながら尻もちをついた。

彼女の目の前で、治癒地雷を踏んだ死体たちが、内側から爆発したように弹け、赤黒い肉汁と化していく。赤、

黒、灰色、ピンク、紫——地雷原は、さもざまな色の染料をぶちまけた、奇怪な芸術作品のようになつていつた。文字通りの一地獄絵図じごくえいずである。

「あ……ああ……ああ……」

モニカの目が極限まで見開かれていく。なんとか逃げようとすると力が入らず、その足は地面をむなしに搔かくだけだつた。彼女の目前まで迫つた最後の一體が、治療魔法によつて爆発すると——

バシヤアアアアアアツ！

——彼女の顔に、体に、あらゆるところに、腐くさつた肉汁がぶちまけられる。魔法蟲に恐怖心を抑えられているとはいえ、本能的な恐怖は残つているのだ。体を硬直さ

せ、目をまんまるに見開いたモニカは、一度ぶるりと震えると—

「ヒギイイイイイイイイツ！」

奇妙な悲鳴を上げて倒れ—そのまま動かなくなつた。

「あらう……やりすぎちゃつた？」

クロエが面白そうにぱつと吹き出す。見慣れているミリアでさえ、息をのみ、その凄惨な光景を見つめていた。これが弱冠十二歳の天才死靈術師—クロエ・ブラッディア。

死靈とともに生き、死体とともに育つた—可愛らしい悪魔である。

カイは、ふうと長い息を吐くと、口を開いた。

「ありがとう、クロエ。助かつた」「ふふん！ お兄は私がいないとほんと駄目なんだから！」

クロエが腰に手を当て、胸を張ると――

「オレさまもいるぞ！ カイ！」

「ヴィー！ 無事だつたのか！」「クロエと合流できたのね！」

ヴィーがひょこりと姿を現し、カイに駆け寄つた。ミリアも声を上げる。

单身、ポートタ転移してきたクロエは、すでにヴィーと合流していたのだ。

「ちよつと！ いまはお兄が私を褒め称える場面でし

よ！ 邪魔しないでーっていうかお兄に抱きつくな！

このチビれつた！」

「へへーん！ やだよーだ！」

四人ヨンジンはひとしきり再会を喜んだあと、クロエが持参した水薬ボクシヨンを飲み、立ち上がる。

体力も、魔力も、万全ブツキンではなかつたが、合流したことで皆の士気は一気に高まつた。

カイは三人にうなづくと、道の向こうをにらむ。

「残るはあと一人だ。ー行くぞ！」

ミリア、クロエ、ヴィーの三人は、それぞれの決意を胸に力強くうなづいた。

シエルが、助けを待つてゐる！

ついに合流した四人——
〈超過治癒〉を操る治療師——モニカ・アベルを撃退す。

* * *

とにかく——逃げなきや！

シエルは道を逸れ、森の中に分け入り、闇雲に駆けていた。

深い下草したくさに足を取られ、つまずきそうになりながらも、王女は必死に走る。

「——どこまで逃げるつもりだ！　この森からは出られないとぞ！　観念しろおおつ！」

背後からキース会長の怒鳴り声が響いてきた。

また近くなつてゐる……このままじや、追いつかれるわ！

シェルは氣力を振り絞り、速度を上げる。

はあ、はあ、はあー

息が荒くなる。後ろ手に縛られた手首がぎりぎりと痛む。走りにくい。体中が枝や鋭い草で傷つき、制服に血が滲んでいく。でもー

シェルは、自分を鼓舞するようになっていた。

一カイが絶対に助けに来てくれる。だからそれまで

奥歯を噛みしめ、顔を上げる。

一時間稼ぐのよー。かせ

稼 かせ

後ろから迫つてくるキース会長の足音。必死に速度を上げたシエルだったが――

え！？

左側の藪^{やぶ}の向こうに動く影を見つける。彼女は硬直する。耳をぴんと立て、辺りを探るように目をぎらつかせて、いるその影は――

お
お
お
お
お
狼
か
み

おおかみ

灰色の毛の中型獣。^{けもの}鋭い牙と爪を持ち、人を襲うこともある恐ろしい獣である。

シェル王女は目を見開き、体を震わせた。

しかし詮索している場合ではない。幸い風下にいたシエルは、すぐさま方向転換し、右方向へと逃げた。しかし――

な！

シエル王女は思わず息を飲み込む。なぜなら――
こつちにも？

一方向転換した先から、枝を踏みしめる狼の足音が聞こえてきたからだ。

ど……どういうこと……!?　一とにかくこつちはダメだわ！

足音が聞こえる方向を避け、シエルは元来た道の方へと斜面を駆け上がつていいく。

混乱の中、彼女は考える。

まさか……狼の縄張りに踏み込んでしまったというの
……？

このままじや、キース会長に捕まる前に、狼に食い殺
されてしまう！ 一体、どうすれば一

んつ！

シエル王女は思考を中断し、素早く腰をかがめる。灌
木の向こうに、また狼の影が見えたからだ。

彼女はそこでふと気がつく。

おかしい……おかしいわ……

これじゃ、まるで——狼たちが私を追い詰めようとし
ているみたいじやない！

司教の感知能力でも捉えにくい獣の群れに、王女は困

惑する。でも――

とにかく少しでも時間を稼いで、カイたちと合流する
のよ！

シエルは一人うなづくと、縛られた両手を足の下にく
ぐらせ、前に持つてくる。靴を脱いで両手で持つと、思
いきり、森の奥へと投げた。

靴が、枯れ葉の上に落ちる軽い音が、静かな森に響く。
すると――

森のあちこちから狼の足音が、靴が落ちた方角に向か
つて移動し始めた。

音による陽動である。

よし……うまくいった！

すかさずシエルは走り出した。

きっとキース会長も森の中にはいるはず……。道まで出
られれば、カイたちも私を見つけやすくなるわー

王女の顔に明るさが戻っていく。

もうすぐ一會える！

苦労して斜面を登つていいくシエル王女。しづらしくして
目の前が開けてくると――

「やつた！　出られた！」

シエルは思わず声を上げた。森を抜け、元の道に戻つ
てこれたのである。

うん……たしか左から来たはず！　ここを戻れば――

一歩踏み出した瞬間――

「ツツ！」

彼女は息をのみ、体を固くした。こぼれるほど大きく
目を見開く。なぜなら――

グルルルルル……

――なぜなら目の前に、巨大な狼が立つて いたからで
ある。シエルの背丈せたけほどもある、その巨体。間違いなく
魔獸まじゆうの類――魔狼まろうであつた。

あ……ああ……

シエルは恐怖に凍りつく。体が震え、涙がこぼれ、奥
歯がかちかちと鳴つた。

逃げられない……逃げようとすれば――確実に殺され

る……

そして最悪なことに――

「やあ、シエル王女……ようやく再会できましたね
⋮⋮⋮」

森からキース会長が姿を現した。その丁寧な言葉とは
裏腹に、彼は一激怒していた。目を吊り上げ、歯をむ
き出しにし、憤怒の表情を見せる。

前には魔狼。後ろにはキース会長。

会長におとなしく従つている魔狼を見て、シエルは愕然とした。

ま……まさか……あの森の狼たちも――会長が操つて
いたというの……!?

では会長は聖騎士ではなく一
パラディン

混乱の中、王女は後ずさりする。

「さあ、王女。いまからあなたにー」

会長が奇妙な笑みを浮かべ、魔法蟲を瓶から取り出す。
シエルの顔が青ざめた。

「一僕と同じ日に合つてもらおう！」

キースがシエルに駆け寄り、彼女を蹴り飛ばすと、そ
の腕に蟲を近づける。ぬめぬめと粘液ねんえきで光る蟲が触手を
伸ばした。蟲は皮膚ひふを破つて、体内に侵入できるのであ
る。口から入れるよりも、さらに苦痛を感じる方法だつ
た。

や……いや……や……

ひとり、と蟲が肌に吸いつく感触。シエルの全身の肌が粟立ち^{あわだ}、背筋に冷たいものが走つた。彼女の白い肌が、粘液で汚されていく。

やだ……いやだ……やめ……やめてー

恐怖で動けない。喉が詰まつて声が出せない。歯の根がからから鳴つて、体があり得ないほど震える。

喉から、悲鳴の出来損ないのような音が、ひつきりなしにこぼれた。

うう……うう……うううー

彼女が叫びたい言葉はーー一つだけ。彼女が呼びたい名前はーー一つだけ。

シエルは、最後の勇気を奮い起こしー喉から絞り出

すように——その人の名を呼ぶ。

必ず助けにきてくれる。

私の側にいてくれる。

私の——私だけの——騎士。

その名は——

……た……け……

シエル王女は、渾身の力で——

……たす……けて……

彼の名を——

力——

呼ぶ！

「カイイイイイイイイツ！ 助けてえええええつ!!」

シェル王女の叫びが、森にこだました刹那せつな――

「待たせたな――シェル」

シェルの目が、大きく見開かれていく。目の端はしから、涙があふれた。

一閃ひらめいたのは、黒い輝き。

「な」

キース会長が声を上げた瞬間、彼は凄まじい速度で吹つ飛び――「がつ！」――木の幹に強烈な勢いで激突した。骨が砕ける乾いた音。彼にはなにが起こったかすら、わからなかつた。

「グルルルルルッ！」

突如現れた男に、魔狼が牙を剥き、飛びかかるうとす

む

るが――

静かに振り向いた男の、その目を見た途端とたん――魔獣の全身の毛がぶわあつと逆立つ――魔狼は、ぴくりとも動けなくなつた。

「ググ……グルル……」

その男のまとう強大な力の気配。辺りの空気が重たくなるほどの中圧感。

この人間に襲いかかれば――確実に死ぬ。

そのことを悟つたのか、魔狼は尻尾しつぽを丸め、じりじりと後退し、やがて――

「キヤウウウウウツ」

――声鳴くと森へと逃げていつた。

一瞥いちべつされただけで、魔狼は死を覚悟し、逃げ去ること

しかできなかつた——

彼は威压いあつしたのではない。

殺意をぶつけたのでもない。

ただ——見ただけ。

見ただけで魔獸を圧倒する、強烈な死の気配を漂わせ

た男——彼はもちろん——

「カイ！」

——王国最高レベルの暗黒騎士、カイ・ブラッディア。

カイはシエル王女を振り返ると、声を上げた。

「シエル、動くな！」

すかさず踏み込むと、彼女の腕めがけて、正確な剣撃

を繰り出す。腕の魔法蟲を斬ろうとしたのだ。しかし

「しまつた！」

魔法蟲はカイの剣先が届くより数瞬早く、シエルの腕に巻きついていた。その途端――

「うぐうううううううつ！」

シエルが苦痛に声を上げる。魔法蟲が触手の先から爪のようなもの出し、腕に取りついたのだ。カイは剣を手放すと、力の限り蟲を摑つかみ、なんとか腕への侵入を防ぐ。

「く！ どうすればいい？ 魔法蟲に詳しいのは――」
カイが顔を上げ、叫んだところで――

「やつてくれたな！ カイ・ブラッディアアアアツ！」

一倒れていったはずのキース会長が、背後から斬りかかつてきた。

「な!? いつの間に！」

さきほどの一撃で、かなりの重傷じゅうじょうを負わせたはずである。起き上がるのは到底無理。それなのに、キースは立ち上がり、しかも気配を感じさせずに背後を取ってきた。

「これも蟲の力か!?」

カイが珍しく焦あせりの表情を浮かべる。背中に迫る会長の剣。魔法蟲を撼んでいるカイは動けない。手を離せば、蟲がシエルの腕に侵入してしまいからだ。カイが歯を食いしばり、一太刀食らうのを覚悟したそのとき——

「任せて——カイ！」

——白と金色が、視界の端をかすめた。彼女は盾を前面に掲げ、キース会長の剣を受け止めると——

「ひゅううう！」

——防御の隙間から、連續攻撃を繰り出した。その恐るべき鋭さと正確さ。

「く！ ソレルの聖騎士か！」

キース会長が思わず後ずさりする。彼女は、鉄壁の防御を誇る盾の申し子——

聖騎士の中の聖騎士、ミリア・ソレルである。

先行していたカイに、ようやく追いついたのだ。彼女は振り返り、声を上げる。

「ヴィーならきっと何かわかるはず！ 診せてみて！」
「さあ、あなたの相手は私よ！」

ミリアが会長との戦闘に突入すると、ヴィーとクロエが、カイの元に走ってきた。

カイは蟲を摑んだまま、顔を上げる。

「ヴィー！ なんとかしてくれ！」

「うう……うぐううう！」

王女が顔を歪ませ、苦痛にうめいた。その様子を見て、ヴィーが一瞬泣きそうな顔を見せるが、すぐに表情を引き締め——

「カイ、そのまま手を離すなよ！ —— シエル、オレさまがすぐ診てやるからな！」

ヴィーは王女の側にしゃがみこむと、魔法蟲に目を走らせる。賢者^{セージ}の持つ探知能力で、蟲とシエルの容態^{ようだい}を分析しているのだ。

クロエがはらはらしながら、ヴィーの顔を覗きこむ。「まだわかんないの!?」

「黙つてろ、クロリ！」

クロエに一喝^{いつかっ}して、一通り、検分を終えたヴィーは一目を閉じ、唇を噛みしめた。

「ヴィー、どうなんだ！ シエルからこの蟲を引き剥が^はせないのか！」

カイの問いに、ヴィーが辛そうに首を振る。

「……無理だ……。強引に引き剥がそうとすれば、この

蟲は強力な酸を出す。腕が溶けてしまえば、高レベルの治療魔法でも治療は難しいぞ……。——無闇に蟲を斬らなかつたのが不幸中の幸いだ……」「

クロエが泣きそうな顔になつた。

「そ……そんナ……シエル……」

しかし、カイは食い下がる。

「^{レストア}ヘ復元」はどうだ!? ヴィーの^{レストア}ヘ復元なら——

言い終わる前に、カイも気がついていた。ヴィーが代わりに答えを言う。

「腕が溶けるんだぞ? 耐えられる痛みじゃない!

——それに、溶けた状態から復元^{レストア}できるかどうかわからぬんだ!」

カイが大声を上げた。

「じゃあ、どうすればいい!?」

「落ちつけ、カイ！」

ヴィーがばちーんっと、カイの両頬ほおを叩いた。カイは驚きの表情を浮かべたあと、詰めていた息を吐き、歯を食いしばる。

「おまえが取り乱してどうする！　いいか？　まだ可能
性はある！」

「それなら早く言つてよ、チビれつた！」

クロエが声を上げるのに、ヴィーは顔をしかめてから、言葉を続けた。

「魔法蟲には親と子が存在するんだ。子蟲は、十分成長

するまで親蟲によつて制御される。シェルの腕に引っついてるのは子蟲だ。だから、親蟲を探し出して処分できれば——

「子蟲の方も止まるということか!？」

カイの問いに、ヴィーがうなづく。

「やつてみないとわからんないけど——それしか方法がない！」

カイはすかさず顔を上げ、ミリアと会長の戦況を見た。ミリアがかなり押されている。会長は蟲によつて強化され、しかも奇妙な剣技を使うのだ。

加勢しないとまずい！

カイは一度自分を落ち着かせるように深く息を吐くと、

ヴィーに尋ねた。

「……親蟲はキース会長の中だと思うか？」

ヴィーがうなずく。

「たぶん」

カイが続けて尋ねた。

「体内の魔法蟲を殺すにはどうすればいい？」

「……現状、そいつごとぶつた斬るしかないだろうな

⋮
⋮

カイは首を振る。

「それはできない。シエルがそれを望んでいない」

「わかるけど！ そんなこと言つてる場合か!? シエル

だつて許してくれる！」

ヴィーがつつかかるのに、カイは断固として首を振つた。

「俺はシエルの想いに応えると決めたんだ。——なんと
かしてみせる」

ヴィーは反論しようと口を開いたが、ふんっと鼻から
息を吐いた。

「好きにしろ！」

「すまんな……ヴィー」

そしてカイは、最も重要なことを尋ねる。

「ヴィーなら——蟲の侵入を防げるか？」

ヴィーがキッとカイを睨んだ。

「つたりめーだろ！ オレさまを誰だと思つてんだ？

天才賢者だぞ！ セージ
を張ればいい！」

大声を上げるヴィーの顔を、クロエが心配そうに覗き込む。

「でも、チビれつた……魔力がほとんどないんじゃない
の……？」

「……う……」

ヴィーが珍しく顔を歪めた。それは本当のことである。魔力経路が焼き切れるほど、過剰に魔法を使つたのだ。回復もままならない状態である。

カイがヴィーを見つめ、静かに尋ねた。

「正直に言つてくれ。〈障壁〉を張るとして一ヴィーの

アンチ・マテリアルシェル

蟲とシエルの腕の間に〈対物障壁〉

魔力が切れるまで、どのくらい猶予がある?」

ヴィーは悔しそうに答える。自身の魔力量を把握し、すでに計算していたのだ。

「……三十分。それが限界だ……すまん……」

「……チビれつた……」

クロエが辛そうに、ヴィーに目をやる。

カイがうなずいた。

「わかつた。シエルはヴィーに任せる。二人の護衛はお前だ——クロエ」

「え! お兄、私も戦える!」

クロエが言うのに、カイはゆつくりうなずいた。

「わかってる……でも、さつきの魔獸が戻ってくるかも

しれない。ヴィーとシェルを守つてやつてくれ。これは
「クロエ」にしかできなうことなんだ」

クロエは、シェルとヴィーの一人に目をやると、唇を
噛んでうなずいた。

「……わかつた……お兄」

「クロエはいい子だ。——よし、ヴィー、〈障壁〉を張つ
てくれ」

ヴィーがうなづくと、すばさむ王女の腕と蟲の間に
〈障壁〉を展開する。青白く輝く極小の〈障壁〉。この精
度で〈障壁〉を展開できるのは、彼女を置いて他にはい
ない。

ヴィーがカイを見上げ、口を開いた。

「〈障壁〉の展開座標をシェルの腕に固定して、魔力供給源をオレさまに設定した。これでオレさまの魔力がなくなるか……オレさまが死なない限り——〈障壁〉は消えない」

「すまんな……ヴィー……」

ふんつと、ヴィーは鼻から息を強く吐く。カイは慎重に蟲から手を離した。

「うう……うぐぐうう……」

苦痛に顔を歪め、うなり声を上げるシェル王女。カイは王女に目を落とすと、額^{ひたい}の汗をぬぐつてやつた。しばらく彼女を見つめてから一立ち上がる。

「シェルを頼む」

ヴィーとクロエがうなずくと、カイも目でうなずき返した。

三十分以内にキース会長を無力化し、その体内の魔法蟲を、会長を殺さずに処分する――

カイは決意も新たに、戦場へと駆け戻る。

* * *

く！　また妙なところから剣が来た！

ミリアの腕が薄く斬られ、血が滲む。彼女は会長相手に苦戦していた。

どこから剣が……？

キース会長の剣は、ミリアの防御をすり抜けるように、奇妙な角度から伸びてきた。通常では考えられないようなところから突然攻撃され、ミリアはダメージを蓄積させていく。

絶対におかしい……なにか仕掛けがあるんだわ！

「どうした、ソレルのミリア！ 聖騎士など所詮、その

程度か？ 来ないなら——こちらから行くぞ！」

「あんたも聖騎士でしょ！ クルーゼのキース！」

キース会長は一度膝をぐつと落とすと——凄まじい速度で突進しながら、刺突攻撃を放ってきた。すかさずミリアは盾で〈受け流し〉を試みるが——

ミリアの目が見開かれる。

せいかくいしおの俺ですが最強の聖騎士をめざします2 試読版

「これは、完璧な正中線への攻撃——受け流せない！」

——その重たい一撃に、盾^ゴと後^ズざりした。

〈受け流し〉は、相手の攻撃を打点からずらすことで、その攻撃力をいなすスキルである。

したがつて原理上、完全に^{ズレ}のない重心への攻撃は——受け流すことができないのだ。

ミリアはその技量に驚嘆する。

盾での防御を熟知した聖騎士^{パラディン}でなければ、この攻撃は不可能——

盾を使わないとはいえ、会長はやはり——聖騎士^{パラディン}！

素早い追い足で、キースがさらに踏み込んだ。き

もう一撃——来る！

彼女は膝を曲げ、手首をしならせ、いつそふわりと防御体勢を取つた。その全身の柔らかさこそが、ミリアの防御の秘密である。

彼女は盾と一体になり、全体で一個の柔^{やわ}らかな球となるのだ。

柔らかく変形する球を押しつぶすのは一不可能に近い。

これが盾の申し子、ミリア・ソレル。

キース会長の剣が迫る。その軌道はやはり、刺突。重心を悟らせないよう、ミリアは盾を揺らす。全身でぶつかるような刺突攻撃は強力だが、受け流せば、大きな隙が生まれるのだ。

その隙を狙う——

ミリアが不敵に笑つた。

その刺突——受け流す！

会長の剣が——盾に触れる——その瞬間——

「……え？」

彼女が息をのむ。なぜなら——

ま、まさか！

——会長の剣が、盾の下から、伸びてきたからだ。

下から？

その剣は、まるで生き物のようにしなり、正確にミリアの顎^{あご}の下を狙ってきた。顎から脳へと貫く必殺の剣筋

ミリアは――

避けてえええつ！

――とつやに首をひねり、上体を思いきり仰け反らせた。剣先が顎から逸れる。体の柔らかいミリアでなければ、致命的なダメージを負つていただろう。しかし、そのミリアでさえ――

「くくくうううううつ！」

頬から耳へと剣撃を受け、斬れた金色の髪の毛^{きん}が舞い散つた。

衝撃に後方へと弾き飛ばされながら、ミリアはなんとか会長を目の端に捉え、そして一歯を食いしばる。すでにキース会長が一間合いを詰めていた。

うそ！ 追い足が速すぎる！

「ここまでだ、ソレルの聖騎士！」

盾を避けるようにして、キースの奇怪な剣が、ミリアに迫る。

「まことにやられる！」

その正確な剣撃が、彼女の喉を貫く瞬間――

「避ける――ミリア！」

――背後からの声に、ミリアが極限まで体を仰け反らせると――

「うおりやあああああああ！」

彼女の顔の上を、黒い塊かたまりが、凄まじい速度で通り抜けていった。

それは大剣。空間が切り裂かれるような鋭さに、会長が目をむく。

「ちつ！ 暗黒騎士が！」

キース会長が交戦を嫌い、後方へと飛び退つた。倒れそうになるミリアを支え、会長をにらむのはもちろん――

「カイ！」

——彼女の相棒、カイ・ブラッディアである。

カイはミリアの全身の傷を見て、顔を曇^{くも}らせた。

「ずいぶんやられたな……深手^{ふかで}ではないが、傷が残つてはおじさんに申し開きできん……」

ミリアは、顔を覗き込む幼なじみを見上げてほつとし

たが一すぐりに悪態あくたいをつく。

「こんな傷どうつてことないわ。それよりカイ！ あんた私を殺す気？ 鼻が無くなるかと思つたじやない！」

カイがふつと笑つた。

「お前なら、避けられるだろう？」

そのいつもの答えに、ミリアはふうと息を吐く。
「……当然でしょ？」

カイは、ミリアをしやがませると、シエル王女の状態を手早く説明した。

なんてこと……。ミリアは愕然とし、唇を噛みしめる。

「休んでいてくれ。会長は一俺がなんとかする」

ミリアも、一緒に戦おうと腰を浮かせかけたが一ダ

メージを負った自分では、カイの足手まといになると判断し、悔しそうにうなずいた。

ミリアが、カイの背中に声を掛ける。

「気をつけて。あいつの剣術はおかしいわ！」

カイはちらりとミリアを振り返ると、うなずいた。

「わかっている。おそらくキース会長はー」

カイは会長をにらみ、彼の元へと歩く。

「パラディン聖騎士ではない」

「やはり最後はお前か……」

* * *

キース会長の言葉に、カイは目を細める。

「会長殿。あなたを倒し、あなたの中の魔法蟲を一殺します」

会長が歯をむき出しにし、顔を歪めた。

「やつてみるがいい、暗黒騎士！」

「ではー」

カイが静かに下段に構えると、キース会長は正面で剣を立てる。

クルーゼ家は神聖系の家名。彼の構えも聖騎士然とした堂々たるものだつた。

学園屈指の強者が一つ一に対峙する。
しばしの沈黙。そして。

キース会長が息を吐いた瞬間——

「な!?」

会長が足元に目をやる。

——彼の足元に広がつていたのは、**刺激臭**を放つ——**毒**

の沼。

暗黒魔法へ**毒沼**である。
ポイズン

ずぶりと会長の足が沈んだ。

「くつ！ 魔法も使えたのか！」

キース会長が足元に気を取られている間に、カイは

「ツツ！」

すでに、彼の目前まで踏み込み、上体を引いていた。

腰をひねり、肩を逸らし、腕をねじる。引き絞つた『の
よう』に、圧倒的な力が上半身に溜まつっていく。

その構えは一刺突。

会長が危険を感じたのか、反撃を諦め、カイから離れ
ようと後方へ跳ぶ。

しかしそれは一最悪の選択だつた。

直線的に逃げても、刺突からは逃げられない。

会長の顔が壮絶に歪んだ。

明確な殺意を込めて、カイは一

上半身に溜めた力を、回転させながら、一気に、一直
線に、こじ開けるように一

「会長殿——お覚悟をおおつ！」

—解放する！

その技—暗黒剣技〈羅刹らせつ〉。

戦いを見ていたミリアが驚き、声を上げる。

「力、カイ！ 殺す気なの!?」

ねじ切るような回転力を与えられた、悪夢のような刺突が、会長の顔面に迫った。

その圧倒的な力の前に、キース会長の選択は—
—キヤウウウウウンッ！

突然、甲高い獣の声が響き渡つた。なぜなら—
「むう！」

カイがうなる。

—巨大な獣が、〈羅刹〉を止めるため、剣先に飛び込

んだからだつた。

会長がその隙に、後方へと大きく飛び退る。

その獣はさきほどの——魔狼。

だ。しかしその直後——

「やはり、そうか……」

魔狼は光の粒子になると、消え去つていく。

確かに手応えが消え、何ごともなかつたかのように、

魔狼は消えた。

キース会長が、カイをにらむ。

ミリアは、困惑の表情を浮かべた。

「な……どういうこと!?」

カイが剣を振ると、□を開く。

「キース会長は聖騎士^{パラディン}ではない。会長殿はー」

カイは目を細めた。

「一召喚士^{サモナー}だ」

「サ……召喚士^{サモナー}!? クルーゼの人間が!?

ミリアの叫びに、会長が顔を歪める。

「言うな……言うなあ！ ソレルの聖騎士^{パラディン}がああつ！」

クルーゼ家は神聖家系。本来なら、キースも聖騎士になることを望まっていたがー

キースが震えながら、両腕を広げ、声を上げた。

「そうだ……そうだよ！ 僕は召喚士^{サモナー}だ！ 僕は聖騎士^{パラディン}

にはーなれなかつた！ 神聖系の魔法が使えないから

だ！……おかしいか、ミリア・ソレル。無様だろう！

笑うがいい！」

ミリアが目を見開く。

キース会長にはあれほどどの素質があるというのに、魔法が使えないだけで——聖騎士になれなかつた……

聖騎士になつて当然——

神聖戦士家系の嫡子は、聖騎士になれなかつたキースが、クルーゼ家でどれほど辛い立場にいたか——その辛さは、ミリアには痛いほどよくわかつた。

「じゃ……じゃあ、あの狼は——召喚獣……」

ミリアの言葉に、カイがうなづいた。

「全力で殺しに行けば、必ず出てくると思つていた。

「魔獸とはいえ、見事な覚悟だ」

「……黙れ……」

キー・スが、震えながら、声を上げる。

「黙れ、黙れ、黙れええええっ！ お前らに僕の気

持ちなどわかるはずもない！」

聖騎士パラディンと、暗黒騎士パラディンの分際で王宮聖騎士ロイヤルパラディンを目指そうなど

という、ふざけた奴にはなああああつ！」

会長こうぜいが顔を壯絶そうぜつに歪め、叫ぶ。

「あの御方は！ 任務を果たせば、僕を聖騎士パラディンにしてく

れると言つた！ いいか！ 僕は！ 聖騎士パラディンになる！

「お前らにー邪魔はーさせないつ！」

うおおおおおおおおおおおつー

会長が腰を落とすと、強烈な気合いを込めた。

筋肉が盛り上がり、制服がはじけ飛び、体中に血管が浮き出る。

会長の目が、怪しい紅色に輝いた。^{ベニ}

魔法蟲による、さらなる身体強化。辺りが震えるほどの力の波動が、会長の体から溢れ出す。

ミリアが叫んだ。

「キース会長！ もう止めてください！」

しかし——彼女の言葉はもう、会長には聞こえなかつた。「くはははは！ これが蟲の力だ！ あの御方の力だ

あ！ 僕が召喚士だと見破つたのは褒めてやる！ しか

サモナ-

しーだからどうした！　それがわかつたところで、僕の剣は見切れない！」

会長が地面を強烈に蹴つて、カイ目掛けて突進する。カイが迎え撃つが――

「くくっ！」

すれ違いざま、体中に剣撃を受けた。深手ではなかつたが、鋭い切り口からは血があふれる。傷口が鋭いほど、血は止まりにくいのだ。

「カイ！」

ミリアの叫びに、カイがうなる。

キース会長の剣は、確かに見切りがたい。

接触の瞬間、会長の体が増えたかのように、奇妙な角

度から剣が伸びてくるからだ。

その技量には、カイでさえ翻弄ほんろうされる。

だが――

カイは不敵に、□元を上げた。

「その仕掛けは――もうわかりました」

「な……なにい？」

キース会長が、カイを射殺さんばかりの目でにらむ。

「ならば我が剣――見切つてみろおおおつ！」

二人が地面を蹴つた。互いの間合いに入る。会長の剣は下から斬り上げる逆袈裟ぎやくけさ。そのときカイは――

会長の下からの剣を回避しながら――

「そこおおおつ！」

——キース会長の右上の、なにもない空間に、豪快な袈裟斬りを放つた。瞬間——
手応えあり！

会長が歯を食いしばり、後方へと飛び退る。カイの剣先に残されたもの、それは——

——会長と瓜二つの、黒い人影。

真つ二つにされたその人影は、ぶわあつと煙のような粒子を残し、消えていった。

カイが剣を振り、再び構える。

ミリアが目を見開き、声を上げた。

「な……あれも……召喚獣……？」

キース会長が、カイをにらむ。

そう。それは——召喚魔。

キース会長と瓜二つの姿形を持ち、彼の能力まで複製する召喚魔〈二重身〉である。

カイが、会長にうなずいた。

「会長殿。召喚魔との連携攻撃、お見事です。背後に隠れ、陰に潜み、巧みに別の角度から攻撃するもう一人の会長……一人だと思つていると必ずやられてしまう。なぜなら会長殿は——」

キース会長を静かに見つめる。

「——人いるのですから」

会長は、自身の秘密を暴かれ、怒りに顔を歪めると

「だから——どうしたああああああつ！」

うなり声を上げ、さらに〈二重身^{ダブル}〉を召喚した。全身が黒みを帯び、血管が浮き出ていく。

会長の周りに召喚される、会長の影たち。その数一十六体。

通常の召喚限界を遥かに超える数である。キース会長が、力に剣を向けた。

「わかつたところで一見切れるものか！」

会長が構えると、地面を一蹴る！

「死ねえええええつ！」

迫る会長と十六体の影。

カイは大剣を正面に立て、騎士の礼をすると一目を閉じた。

「いいえ、簡単なことです」

正眼に構え、カイはふうと息を吐く。

「会長殿が一人ではなくー」

静かに腰を落とすとー

「十七人いると思えばいいだけです」

一ゆつくり目を開いた。

「ほざけええええつ！」

キース会長と、十六体の〈二重身^{ダブル}〉が、前後、左右、

上下、あらゆる方向から、あらゆる角度から、袈裟斬りで、刺突で、逆袈裟で、正面斬りで、必殺の剣技を用い

て、一斉に、一撃に、一息に、カイに襲いかかる。

その怒濤のどとうような剣撃の嵐。その嵐を一

周囲で盛大な火花が散る。

「カイは一剣一本で一弾いた。

「な……なにいいいいいつ!?」

カイを囲む、剣で創られた防御圏。

域。

その名も一ソードテリトリー〈絶対剣域〉。

「け、剣での防御技だと!? この化け物がああ！」

キース会長とダブル二重身たちが見せた動揺。それを力
イは一絶対に見逃さない。

防御圏が一瞬で消え、次の刹那――

「がはつ！」

――会長と十六体の「一重身」すべてを貫く刃が出現した。そのあまりの速度に、腕が、剣が増えて見え、その刃がまるで花弁のように花開く。

カイの周囲に咲き乱れる鉄の華――
暗黒剣技――〈鉄血華〉。

そして――

「ぎやあああああつ！」

会長が悲鳴を上げた。〈鉄血華〉は敵の生命力をも奪う、吸収系剣技なのである。キース会長の生命力が根こそぎ奪われ、その生命力がカイに吸収された。

「二重身」がかき消え、キース会長が、どうと倒れる。カイは残心して剣を收めると、会長に近づいていく。会長は蟲による無理な強化と、限界を越えた召喚、カイが与えた全身の傷とあいまつて、息も絶え絶えとなつていた。

ミリアも、カイの側へと歩いてくる。

二人はキース会長を見下ろした。

神聖家系に生まれながら、聖騎士パラディンになれなかつた男

—キース・クルーゼ。

震えながらも、会長は、最後まで意地を張り通す。

「蟲もろとも……僕を……殺せ……」

「見事な覚悟です。会長殿」

ミリアがカイに目をやつた。

「カイ……どうするの？」

キース会長の体内には魔法蟲がいる。その蟲を殺さなければ一シエルは助からない。

魔法蟲は脳まで達すると、脳の下部に取り付いて肉腫にくしゅのようになる。そうなると、もう酸を出さなくなるのだ。その大きさは、ちょうどクルミほどだと、ヴィーから聞いていた。

カイはおもむろに、背中の大剣を引き抜くと一キース会長の目の前に持つていく。

ミリアが息をのみ、眉根さいごを寄せた。しかし目は逸らさない。彼女も、会長の最期を見届ける決意だつた。

カイはふうと息を吐くと――

「〈武装^{アーミズ}錬成^{アルタ}〉――解除^{解除}」

刃を消失させ、柄^{つか}のみにする。

「……え？　ま、まさか……カイ……」

ミリアが、カイのやろうとしていることに気づき、思わず声を漏らした。

カイはひざまずき、会長の頭を膝で挟んで固定する。

位置はわかっている……大きさも……

カイは柄を握りしめると、見えない剣を突き刺すようには、柄を会長の顔に近づけた。ちょうど剣の切つ先が、蟲の位置に来るよう調整する。

カイがやろうとしていること――それは剣の切つ先だ

けを〈鍊成〉し、瞬時に解除して蟲だけを斬ることである。そのような纖細な鍊成技を成功させたことはなかつたが、それ以外に方法はなかつた。

カイは呼吸を整え、集中した。

目を閉じると、シエルの顔が浮かぶ。

キース会長を殺したら、シエルは悲しむだろう。自分の責任だとと思うだろう。

そんな顔を見たくない。そんな思いをさせたくない。
だから――

カツと目を開ける。

俺に力を貸してくれ、シエル！

決意を固めた瞬間――

「**武装錬成**」——シヨートソード！」

「**武装錬成**」により、刃が切つ先から形成されていく。

何かを斬つた感触にカイは——

「**錬成**」——解除おおおつ！」

一瞬時に錬成を解除し、刃を消した。

“……どうだ？”

極度の集中で、手が大きく震える。精神力と属性力を使い果たすような、曲芸とでも言うべき錬成であつた。

額から大粒の汗がこぼれ落ちる。

「ミ、ミリア、会長は……どうだ……？」

腰を浮かせ、荒い息でミリアに尋ねた。彼女はキース会長の頭部を確認し、心臓の鼓動を確認し、まぶたを開

けて瞳孔^{どうこう}を覗き見ると――

「……やつた……やつたわ！　きつと成功よ！　魔法蟲だけを一斬つたのよ！」

声を上げる彼女を見て、カイは――

「そ……そ……やつたか……」

一思わずバランスを崩し、すとんと尻もちをついた。カイは前代未聞の鍊成技を成功させ、体内の蟲だけを斬つたのである。

会長は魔法蟲を斬つた影響か、気を失っていた。彼の顔色が少しずつ戻り、筋肉の隆起が収まつていいく。目の色も、徐々に赤から元の色へと戻つていった。カイは大きく長い息をつき、安堵^{あんど}に体を震わせる。

やつた……やつたぞ、シエル……！

「ミリア……シエルの様子を見てきてくれ……」

「わかつた！ カイはしばらく休んでいて！」

ミリアにうなずくと、疲れ果てたカイは地面上に大の字に倒れた。

火照^{ほて}った体に、大地の冷たさが心地いい。

横目でキース会長を見た。

「会長殿……蟲で強化されていたとはいえーその剣技は本物でした」

カイは自分たちを窮地^{きゆうち}に陥れた会長に、素直な贊^{さん}辞^じを送る。

聖騎士^{パラディン}にはなれなかつたものの、騎士の技術と召喚士^{サモナー}

のスキルを組み合わせ、強敵として立ちはだかつた生徒会長——キース・クルーゼ。

副会長のリツツも、書記のモニカも、独自のスキルを縦横に操り、行く手を阻んだ。

俺が知らない強さを持った人たちが、まだまだたくさんいる……

カイは改めて思う。

最強への道は——果てしなく遠い。

カイは苦労して立ち上がると、震えながら皆の元へと歩いた。

シエルの腕に取りついた子蟲は、親蟲を殺したことでの動きを止めただろう。

あとは、生徒たちを連れて学園に戻り、今回の真相を突き止めるだけだ——

カイが近づくと、皆が口々に騒いでいる。
なんだ……？

ミリアが顔を上げ、珍しく一泣き) そうな表情を見せた。

「カイ！　蟲が一止まらない！」

「な……なんだと！」

カイが駆け寄り、苦しげなシエルに目を落とすと、ヴィーに尋ねる。

「どういうことだ!?　ヴィー！」

ヴィーが悔しそうに□にした。

「キース会長の中の蟲が……親蟲じゃなかつたんだ

⋮⋮

カイが息をのみ、後退りする。

な……なんてことだ……

カイは奥歯を思いきり噛みしめると、声を上げた。

「親蟲はどこだ！　どこかにいるはずだろう！」

そのとき——

「——ここにいるぞ」

背後からの声に、皆が振り返る。

「誰だ!?」

木々に囲まれた、苔こけむした岩の上に——男が立っていた。

カイは息をのみ、目を見開く。

一目みて、その男がただ者ではないことがわかつた。

対峙しただけで汗がにじみ、体が震える。

尋常ではない気配を漂わせた、その男は――
「親蟲を探しているのだろう？　それは――」

懐から瓶を取り出し、その中に目をやつた。

「――この中だ」

瓶の中でも蠢いているのは――魔法蟲。
皆が騒然となる。

カイが皆を手で制し、尋ねた。

「……お……お前が――あの御方か？」

男が目を細める。

「ああ。彼らに蟲を使つたのは――私だ」
体が震える。寒気が走る。

さむけ

カイにはわかってしまった。

自身が強くなればなるほど——相手の強さもわかる。

いまの自分では——

この男には、到底、敵

かな
わない。

それもそのはず——

「……み……見て……あの……胸の紋章……」

ミリアの震えた声に、男の胸を見たカイは——絶句した。

な……

その十二枚の花びらをかたどつた紋章は——

「□……王宮聖騎士……！」

大陸最強と名高い、神聖アステリア王国、神聖近衛騎

このえ
騎

士団——

称号一

最強の中の最強。

一騎当千の戦士。

百戦錬磨の強者。

王宮聖騎士。

「……なぜ……王宮聖騎士が……？」

カイの問いに、男は当然のように答えた。

「王宮聖騎士が戦う理由など一つしかない。我が国を脅かす存在を一排除するためだ」

カイは目を見開き、愕然とする。

「シ……シエルが、王国を脅かす存在だと言うのか

その騎士団の上位十二名にのみ与えられる唯一無二の

ゆい

む

に

⋮⋮?

男は目を細め、カイを見つめた。

「王女だけではない。君もだー若き暗黒騎士よ。君た
ち二人は今後、王国にとつて危険な存在となるだろう。
私は将来の禍根かこんを断つため、ここに立っているのだ。

一国を守るためならば、私はーおぞましき蟲を使うこ
とすら躊躇ちゅうちょしない」

皆が息を飲み、事態の大きさに混乱する。

相手は、王国を守護する王宮聖騎士ロイヤルパラディン。

そして、シエル王女とカイはー将来、国を脅かす危
険な存在ー

混乱と恐怖に、皆が静まり返る。

男は一息吐くと口を開いた。

「王宮聖騎士すべてが君たちを危険視しているわけではない。我らは同じ騎士団に属してはいても、一人ひとりが独立しているのだ。自らの意志で行動する自由が与えられている。——王宮聖騎士の中には君たちに与する者もいるだろう……だが——私は違う。はつきり言つておこう。私は——君たちの一敵だ」

彼は一人ひとりに目をやり、微かに悲しそうな顔をした。

「君らの戦いは見ていたよ。実に見事な戦いぶりだ。——君たちには類まれなる才能があり、固い信念があり、守るべき仲間がいる。前途有望な素晴らしい若者たちだ。

……しかし——

顔を上げた男の顔に浮かぶ、固い決意。

「——私にも信ずる想いがあり、殉じる誓いがある」「男は、長い槍^{やり}を一度振るうと、居住まいを正した。改めて名乗ろう。私は王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}・序列十二位。槍遣^{つか}いのフウカ——」

胸に手をやり、腰をかがめると宣告する。

「第四王女と暗黒騎士の二名が、おとなしなしくこちらに来てくれば——他の者たちは痛みのないよう一撃で屠^{ほふ}ることを約束しよう」

な……！

カイは唇を噛んで、かすれた声を上げる。

「……断つたら……？」

「全員、ここで一死んでもらう」

カイは奥歯を噛み締め、皆を振り返った。

皆一様に青ざめた顔をしていたが、一決死の覚悟をその表情ににじませている。

みんなには逃げて欲しかつたが――

カイはその槍遣いを見上げた。

この男からは一逃げられない。

「みんな……すまない」

ミリアが、気丈に首を振つた。

「シエルの命が掛かっているんだもの、一命を張るには、十分すぎる理由だわ！」

「お兄……今度こそ……私も戦うから！」

クロエが泣きそうな顔で言うと、ミリアがその頭を撫^なでる。

カイは、シエルを診てくれているヴィーに声を掛けた。
「すまんな、ヴィー……。巻き込んでしまって」「
「ば……ばか言うな！ オレヤまだつてもう一仲間だ
ろ！」

カイが、皆が、驚きの表情でヴィーを見つめる。

ヴィーが初めて『仲間』という言葉を使ったのだ。力
イは皆と目を見合わせると、力強くうなずいた。

「そうだな。すまなかつた。ヴィーはもう俺たちの仲間
だ。力を一貸してくれるか？」

「おうともよ！」
「あくまで己を鼓舞するよういうなづく。

「そうでもしなければ——絶望に、膝から崩れてしまつだろう。」

「それほどに、この敵は別格の相手なのだ。
『さて……返答は如何に？』

槍遣いが問う。

カイは答える代わりに、剣を抜いた。

男が——瞬、目を伏せる。

「そうか……承知した」

フウカが槍を構え、皆に目をやつた。

「では——参る」

「ヴィーはシエルを頼む——各自散開！」

フウカが槍を手に一ふつと岩から飛び降りる。

カイたちが散開した。

まで——あと二十分。

体力も、気力も、魔力も、精神力も残り少ないまま、
カイたちは——

この国で——いやこの世界で——最も相手をしたくない
敵と対峙する。

最強にして最悪の敵——王宮聖騎士。

ロイヤル・パラディン

迎え撃つは——

連戦で疲弊した暗黒騎士カイ。

全身に傷を負つた聖騎士ミリア。そして――
まだ実戦慣れしていない幼い死靈術師クロエ。
魔力残りわずかの賢者ヴィート、蟲の侵入にあらがう
司教シエル。

未曾有の敵を前に、カイたちは、絶望的な戦いに――
身を投じる。

四章 最強 VS. 最強の行方

「全員で掛かるぞ！」

「カイが叫ぶと、ミリアとクロエがうなづいた。

「わかつた！」「了解、お兄！」

最初の攻撃は――

槍遣いのフウ力が地面にふわりと着地した――その瞬

間――

「**囮め**――**骸骨戦士**！」

スケルトンウォーリア

黒いツインテールを振り乱し、黒衣の少女が死靈を

無詠唱召喚する。着地を正確に狙い、敵を四方八方から

並むように、骨の戦士たちが地面から姿を表した。

ロングソードとラウンドシールドで武装した骸骨戦士

の群れ――

その数、なんと一四十九体。

渾身の多重召喚をやつてのけたのは一幼き天才死靈術師クロエ・ブラッティア。

クロエが腕を上げ――

「攻撃いいいい！」

一命じながら振り下ろす。骸骨戦士たちが一斉にフ

ウカに殺到した。その様子はさながら骸骨の津波。骨の

戦士たちが我先にと敵目掛けて剣を振るう。しかし――

赤い光が閃くと――

「ちつ！」

クロエが舌打ちした。骸骨戦士たちが、千切れ、吹き

飛び、粉々に崩れていいく。

それは――凄まじい槍の一閃。

何重にも囲んでいた骸骨の包囲網が、一瞬で吹き飛ばされる。粉々になつた骨が、まるで吹雪のように飛び散つた。

その中心にいるのは――眼光鋭い、王宮聖騎士。

長い槍をくるりと回して、後ろ手に構えると、目を細める。

「無詠唱召喚でこの数とは……見事なものだ。だが骸骨

で私を止められるとはーむ？」

何かに気づいたフウカは、空を見上げた。
彼の瞳ひとみに映るのはー飛んでくる、白い、牙きば。

その牙はー

「わが呼び声に応えよー」

幼い死靈術師ネクロマジシャンが腕を振り上げー高らかに命じる。

「来い！ー竜牙兵ドラゴントウースウォリアーアアアアアツ！」

「なんと！」

槍遣いが驚きの表情を浮かべた。クロエの投げた白い
牙が、見る間に大きくなり、やがて形を成しートカゲ
のような骨でできた巨体の兵士かたでけんが現れた。見上げるほど
大きな骨の兵。兵士は大型の片手剣かたてけんを抜くとー

シャアアアアアアアツ！

「雄叫びを上げ、フウ力に襲いかかる。」

クロエが投げたもの、それは「竜の牙」。

彼女は準備していた牙を媒体に、骸骨戦士より数段強力な骸骨系不死者「竜牙兵」を召喚したのだ。

竜牙兵は「・35の不死者。物理攻撃力においては、狩魂靈をも上回る。」

前回の戦闘で、クロエは、用意周到な敵死靈術師に辛酸を舐めさせられた。

今度は彼女の番――

クロエが、可愛い顔に、不敵な笑みを浮かべた。

同じ失敗は……二度としない！

「足止めして、骸骨戦士！」

「む！」

槍遣いが思わず声を上げる。大量の骸骨戦士たちが彼に群がり、その動きを封じた。そこで――

「狩れ――竜牙兵！」

シャアアアアアアアツ！

クロエが命じると、竜牙兵が雄叫びを上げ、その剣で、骸骨戦士もろとも敵を薙ぎ払つた。

骸骨戦士たちの頭が、腕が、足が一飛び散る。

これは最初から損害覚悟の攻撃。骸骨戦士を犠牲にした、捨て身の一手である。

そこまでしなければ、到底、王宮聖騎士には敵わない

ロイヤルパラディン

かな

のだ。

彼女が悲しそうに眉根を寄せる。

ごめん……ごめんね骸骨戦士たち……

しかし――

う……！

クロエが目を見開いた。

槍遣いフウカがその場で回転すると――その勢いに跳ね飛ばされるように骸骨戦士スケルトンウォーリアが吹き飛び、竜牙兵ドラゴントゥースウォーリアも一瞬で、粉々の白い塊かたまりとなつて、その場に崩れ落ちていく。

どう動いたのか、見えない。

何が起こつたのか、わからぬ。

槍を振るつたのかどうかすら、定かではない。

フウ力が大量の骨の向こうで、片方の眉毛を上げた。一筋の傷どころか、息さえすこしも乱していない。
これが王宮聖騎士——最強の中の最強。

骨の戦士たちが束でかかつても、どうにかできるような相手ではなかつた。

死靈支配力を費やし、大量の不死者を犠牲にしても、傷一つつけられない。しかし——

クロエは、口元を緩める。

今までの攻撃は、すべて時間稼ぎ。本命は——

「……なに?」

王宮聖騎士が——最強の騎士が——微かに眉根を寄せた。

粉々に砕け散つていく大量の骨にまぎれて——
 いつの間にか、聖騎士パラディンが彼の間合いに踏み込んでいた
 からだ。

「行つけえ！　ミリアあああああつ！」

クロエの叫びに、ミリアがうなづく。

槍の間合いは長いが、懷ふところに飛び込めば勝機はある——
 ミリアは最初から、槍遣いの間合いに踏み込むことを狙つていた。それを瞬時に理解し、クロエは自ら時間稼ぎを買つて出たのだ。

盾たてを前面に掲げ、果敢かかんに槍遣いに挑むのは——

鉄壁の防御を誇る聖騎士パラディンの中の聖騎士パラディン——ミリア・ソレル。

時間稼ぎありがと……クロエ！

ミリアは目前の敵をにらみ、盾を掲げて疾走する。
震えそうになる体を無理やり押さえ、ひたすら走った。

彼女は一怖いのだ。

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士の間合いに入るということが、どれほど
無謀なことなのか、彼女は十二分に理解していた。

自分の剣技が通用するのか、敵の攻撃を防げるのか、
一瞬でやられるんじゃないか——彼女の脳裏のうりに最悪の状
況が浮かんでは消えていく。

こわい……怖い！

ミリアは思いきり歯を食いしばつた。

でも！

力に迫る。

私は防^{アタック}御^{タンク}役！ 私の役目は—

攻撃役に—カイに—チャンスを作ること！

槍遣いフウ力が、目を細めた。

すでに槍の間合い。

攻撃が—来る！

その刹那^{せつな}—

ゴウンンンンツ！

「ツツ！」

—巨大な鉄槌^{てつつい}にでも殴られたような、強烈な衝撃^{ショッキ}が

ミリアを襲つた。悲鳴すら上げられない。体がねじきれそう。倒れずに踏みとどまれたのが、奇跡だつた。

ミリアは目を見開き、息をのむ。
い、いまのが一槍の攻撃!?

技の出などまつたく見えなかつたものの、おそらくい
まのは一突き。

点攻撃である突きなのに、面攻撃されたような凄まじ
い衝撃だつた。そして、盾を見て一ミリアの背筋を冷
たいものが走り抜ける。

盾の上部が吹き飛び、紙きれのようにひしやげていた。
な……盾を一抜かれた——！

今回、ミリアが持つてきた盾は、ソレル家の武器庫か

らくすねでおいたミスリル銀製のカイトシールドである。強さと軽さを兼ね備えた逸品中の逸品のはずだつた。それなのにー

一撃で!?

実力差があるのはわかっていた。敵かないのは理解していた。でもー

ここまで差があるなんて!

ミリアが、美しい顔を歪ゆがませる。

彼女がその突きに耐えられたのは、とつさに〈受け流し〉を試みたからだった。

そうでなければ一頭を吹き飛ばされ、とつぐに倒されていただろう。

ミリアの足が、恐怖で止まりそうになつた。だが――

それでも――

「行けえええええつ！」

彼女は恐怖を押さえ込み、盾を構えて、再び駆ける。敵への道を作るのは――私の仕事！

槍遣いフウ力が眉を上げ、かすかに驚きの表情を見せた。いまの一撃を喰らつて、突進してくる戦士がいるとは思わなかつたからである。

「ほう……強く、気高く、美しい。素晴らしい戦士だ」

フウ力の槍が走つた。その尋常ではない速度により、槍の軌跡はただの赤い光としてしか認識できない。ミリアは――

集中！

彼女は両手で盾を支え、感覚を研ぎ澄ます。直撃されたら盾が保たない。だからー

彼女はふううと息を吐くと、力を抜き、全身を柔らかいバネのようにした。

この極限状態で、ミリアの真価が發揮される。

ーだから、その槍ー

あろうことかミリアは、目を閉じた。

ー受け流させてもらう！

槍の穂先ほさきが、盾に迫る。ミリアに、その速度の攻撃は見切れない。だがー

ぴくりとミリアが反応した。彼女はー

「そこおおおつ！」

一盾を纖細に操り、敵の攻撃を一受け流した。

打点が逸れ、衝撃が大幅に減る。それでも、大型の魔獣に突進されたような衝撃が走った。彼女は歯を食いしがつてダメージに耐えると、さらにフウカヘと駆ける。ミリアは攻撃を見ていない。ミリアの目では、槍の速度についていけない。

彼女が感知しているのは一盾の振動。

槍の穂先が盾に届いた瞬間の振動を、彼女は指先で捉え、正確に受け流したのだ。

まさに神業。盾の申し子、聖騎士ミリアにしか成し得ない、超絶の防御スキルである。

フウカが、さうに突きを放つが——ミリアは止まらない。すべての突きを受け流しながら、突進する。

槍遣いまで、あと数歩のところで——

「もう……ここまで受け流されるとは——では……これはどうだ？」

フウカの槍が走る。その攻撃は——

ミリアが唇を噛んだ。

それは、完璧な正中線への攻撃。受け流せない——直撃する！

だが――

彼女は、にやりとする。

それが――その攻撃――そが――ミリアが待ち望んでいた一撃。

槍の穂先が、ミスリルの盾を、紙きれのように貫通した感触に――彼女は目を開いた。

いまあああつ！

ミリアは渾身こんしんの力で盾をひねると、すぐさま盾を手放し、後方に倒れるよう跳ぶ。穂先を避けきれず「ぐくつ！」肩口に傷を負つたが――上出来だつた。

ミリアがやりたかったこと。それは――

王宮聖騎士ロイヤルパラディンがいぶかしげな表情を見せる。

フウカが槍を戻そうとするトドー 「なに!?」 — 盾が、穂先に引っ掛けたつていた。

ミリアが口元を上げる。

彼女がやりたかったこと、それは、ほんの一瞬でも槍を封じること。

盾が引っ掛けたままでは、いかに王宮聖騎士ロイヤルパラディンといえども、完璧な攻撃はできない。やつた……やつたわ！ あとは――

彼女が倒れながら、後方に目をやつた。

ミリアの後方を駆けていたのは、もちろん――
カイがやつてくれる！

――頼れる相棒あいぽう、カイ・ブラッディア。

カイはミリアにうなづくと一溜めていた属性力を一気に解放する。

暗黒属性力を溜めるために、カイは一連の攻撃に加わつていなかつたのだ。

カイの狙い、それは――

「うおおおおおおおおおおつ！」

カイは気合いを込め、一度目を固く閉じると一キツと目を見開いた。

属性力を全力解放し、全身の武装を変化させる
〈**鍊成**〉^{アルケミー}の上位スキル――

そのスキルは――

「**全身武装鍊成**」アアアアアアツ！」

ぶわああつと黒く禍々しい瘴気が吹き出し、カイの全身を覆つていいく。まるで爆発したかのように辺り一面に満ちていく闇色の霧。^{まがまが}その濃厚な霧から、弾丸のように飛び出してきたのは――

「な……『全身武装鍊成』だと!?」

一黒い死神のような戦士。

漆黒のプレートメイル。凶悪な形のガントレット。
無骨なヘルム。闇を凝縮したような黒いマントが激しくはためく。

背中に背負つた巨大な両手剣は、抜刀すると同時に
〈再錬成〉されていった。

黒い刀身に赤い血溝が走り、その銘が刻まれていいく。

その剣の名は——死を招くものⅡ。
 デスブリングガーッツヴァイ

死を招くものの上位剣である。

鬼神のごときその姿。彼は死の化身。死そのもの——
 キシンショウシンショウメイ

正真正銘、全身全靈の——暗黒騎士。

ミリアはその姿を見て口元を緩めると、そのまま、どうと地面に倒れた。極度の集中と全身の傷により、満身創痍の状態である。

「あとは……任せたわ……！」

カイは倒れた彼女を横目に、全速力で駆け抜けていく。

クロエが不死者を大量に消費して時間を稼ぎ——

ミリアが盾と自分を犠牲にして作った隙を狙い——

王宮聖騎士に迫るのは——

ロイヤルパラディン

「任せておけ」
神聖アステリア王国、最強の暗黒騎士——カイ・ブラツディア。

カイは槍の引き際に合わせ、ロイヤルパラディン王宮聖騎士の懷へ飛び込んだ。

敵は槍を引きながら、ミリアの盾を振り落とそうとする。次の攻撃までのわずかな時間——

クロエとミリアが決死の覚悟で作り出してくれた、かすかな隙。

その貴重な隙を一無駄にするカイではなかつた。

カイは鋭く踏み込みながら——ばさりとマントを回す

と、後ろ向きになつた。

「なに……？」

槍遣いが、当惑の表情を浮かべる。即座にカイは——

「ふつ！」

——背後のフウカに向け、マントを貫きながら、鋭い斬撃ざんげきを放つ。カイは、マントで剣筋を隠し、槍遣いの不意を突いたのだ。

「く！ 初撃で〈遮蔽技クローキング〉とは！」

フウカが突然現れた剣に、体勢を引く。カイはすかさずその場で回転すると——

「ひゅううううううう！」

——今度は足を刈り取るよう、低く、豪快ごうかいに薙ぎ払

つた。風圧で地面が削れ飛ぶほどの凄まじい剣速。
刃先が空気との摩擦^{まさつ}で鳴り、奇怪な音を立てる。

「ちいつ！」

槍遣いが跳んだところで、カイは一回転目の剣撃^{けんげき}を放つた。

「……なに!?」

カイは回転力をそのままに、体勢を徐々に高くしながら、中段、上段と、回転数を上げながら、猛烈な勢いで薙ぎ払う。刃先が高く鳴き、まるで断末魔^{だんまつま}のような音が響き渡つた。

コマのように回転しながら、下段から上段まで、辺り一帯をことごとく刈り取る回転剣技^{けんぎ}——その技——

「暗黒剣技——〈鬼哭〉！」

しかし、敵もさるもの——いち早く技の特性を理解し、大きく後方へと飛び退^{すさ}る。

だが——

それは、カイの予想通りであつた。

「な!?」

槍遣いが思わず声を漏^もらす。彼が着地するその瞬間——目の前に、カイが現れたからだ。

「高速移動スキルか！」

そのスキル——暗黒騎士スキル 〈影走〉。

そして、さらに驚くべきことに——
フウカが、驚愕に目を見開く。

一カイは移動中すでに一刺突の準備を終えていた。

ぎらりとカイの目が輝く。

狙うは敵の心臓。

「こ、ここまでとは！」

王宮聖騎士ロイヤルパラディンが声を上げる。

カイは、ひねつた腰こしの、肩かたの、腕うでの回転力を、目前の

敵目掛け、一気に、一直線に——
「うおおおおおおおおおつ！」

——解放する。

その最速最短の刺突技は——暗黒剣技羅刹——
（ラセツ）

「くく！」

しかし、〈羅刹〉が胸に達する寸前、フウカは槍を地

面に突き刺し、腕の力で体を持ち上げ回避した。

最高のタイミングで放たれた、神速の回転突き （羅ロイヤル・パラディン）刹（カタツムリ）がかわされた——さすがは王宮聖騎士。だが——

カイの連續攻撃はまだ終わっていなかつた。

大きく踏み込む。腰を落とす。巨大な両手剣が次第ににじみ、ぼやけ、黒い影となつた。

カイは歯を食いしばり、槍遣い目掛けて、大剣を振るう。

超高速で無数の剣撃を放つ、その剣技は——

「うりやああああああああああ！」

——暗黒剣技 （無尽）。

カイとフウ力の間で、無数の火花が散る。身の毛のよ

だつような硬質こうしつな音が響き渡つた。

一連の連續攻撃。カイが押しているように見えたが、
その実――

……当たらない！

――〈無尽〉の剣撃を、フウ力はすべて槍で弾いていた。
カイの体中から汗が吹き出す。急速に体内の酸素さんそが失
われ、腕が重たくなつていいく。

息が……保もたない！　せめて――太刀ひとたちだけでも！

カイは最後の力を振り絞り、空中で前転するように高
速回転すると、垂直斬りぎざんりを放つた。

「ひゅうううううつ！」

回転力を加味して一撃の威力を上げる暗黒剣技――

〈火車〉である。

〈無尽〉を無理やり止め、〈火車〉を放つた力イだつた
が――

「うむ……いまのはいい技だ」

――その大剣は、ぶざまに地面に突き刺さつていた。

く……

目の前に敵の姿はない。

フウカはすでに、宙返りして後方へと飛び退つていた。

カイは敵はにらみ、歯を食いしばる。

王宮聖騎士フウカの、その静かな表情。

彼は息さえ乱していなかつた。それどころか、口元を
微かに上げ、笑みさせ見せて いる。

男は百戦錬磨の強者。カイの強さを知り、この戦いに愉悦を見出しているのだ。

一方、カイは荒い息を吐き、大剣たいけんを杖つえがわりにして震える体を支えていた。

失われた酸素を取り入れるため、カイは何度も深呼吸する。手足が震え、力が入らない。

それもそのはず、四つの必殺剣技を休みなく連続で繰り出したのだ。

体への負担は、計り知れない。

全身の筋肉が張り詰め、骨がきしみ、心臓が早鐘はやがねのようすに打ち、汗がとめどなく流れる。

そして槍遣いは――

「その歳で、**全身武装鍊成**」が使えるとは……さきほど
の幼い死靈術師ネクロマンサーといい、盾の扱いに長けた聖騎士といい
——私は、君たちを過小評価していたらしい……。許さ
れよ」

槍を肩で器用に回転させながら、いつそ楽しそうに口
にする。

カイは、震えた息を吐いた。
必殺剣技を連續で放つても——敵の息一つ、乱すこと
さえできない。

クロエとミリアの二人が、決死の覚悟で作ってくれた
隙を生かすことができなかつた……
これが——王宮聖騎士イヤルパラディン。

最強の中の最強。

しかもフウカは序列十二位。この実力で、王宮聖騎士の最下位なのだ。

「さて」

槍遣いフウカが、目を細める。

「準備運動はこれくらいでいいだろう」

カイが思いきり唇を噛んだ。

ここまでが準備運動……

カイの戦いを見守つていたクロエとミリアが、絶望に

顔を歪める。

これほど……実力が違うのか……！

カイは奥歯を噛み締めた。

死靈支配力、残りわずかのクロエ。

満身創痍で、盾も失ったミリア。

必殺剣技を出し尽くし、打つ手のないカイ。

分。

カイは震える体を起こし、大剣を構える。

い！

策は何もない。だが、ここで倒れるわけにはいかない！

王宮聖騎士フウカは、とんとんと跳んで調子を整える
と一槍を構えた。

「さあ一はじめようか」

「お相手します！」

フウカがその返答に、思わず口元を上げる。

カイは自分を鼓舞するよう応えると——
覚悟を決め、改めて最強の騎士に挑む。

* * *

ヴィーは、遠目からカイたちの戦いを見て、目を大きく見開いていた。

あ、あいつら……あんなに強かつたのか……でも——
彼女は敵をにらみ、思わずごくりと唾^{つば}を飲み込む。

それでも、ぜんぜん敵わないって……

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士のデータラメな強さに、怖いもの知らずのヴ

イーでさえ恐れ慄いた。

戦闘が始まつてから、すでに五分。

〈障壁〉に阻まれた魔法蟲は、鋭い爪^{つめ}を王女の腕に食い込ませていた。魔力ぎりぎりのヴィーには、その爪まで防ぐ〈障壁〉を張ることができない。魔力が切れるまで、もう十五分もなかつた。

「ごめん……ごめんな……シエル……」

「うう……ううううう……！」

王女が苦悶^{くもん}_{ひたい}のうなり声を上げる。顔色は青を通り越して白くなり、その額^{ひたい}には大粒の汗が浮かんでいた。さらにも悪いことに、蟲の体表から少しづつ酸^{ひふ}がにじみ出し、シエルの皮膚^{ひじ}を焼き始めている。激痛に身を捩^{よじ}るシエル。

会話をすることなど到底不可能だつた。

ヴィーは王女の額の汗をぬぐいながら、カイの戦いにやきもきしていた。

⋮⋮⋮王宮聖騎士ロイヤルパラディンは強い。べらぼーに強い。

悔しいけど、オレさまが全力で魔法戦闘しても、多分勝てない……

でも――

ヴィーには確信があつた。

カイが、あのことに気づけば、絶対に一勝機はある！

彼女は唇を噛み、思わずつぶやいた。

「どうしてわからんないんだ、カイ……。オレさまが教えしたこと忘れちゃつたのか……？」

ヴィーが独り言を言った、そのとき――

・
・
・
・
え
?
思

想像を絶する
ヴィーは息を

想像を絶するほ
唇で声を
る!! グ
るべ
た。

「シ…
尚た
エリ！
エリ

王女は顔を壯絶

る。
そし
本
十

「行」
「中」

ナ・イ
は
施

わTwitterでハッシュタグ「#GZFん」を
が付けて、試読版の感想をツイートし
らしてください。 め 茶 激

な抽選で10名の方には 著者痛 西乃
リョウ先生、イ痛は・藤ちよこ先生
とのサイン本をプレゼントいたします。

、 と つ 、 が
□ 対象はハッシュタグで#GTF王がついたツイートのみとなりますので、注意ください

まだまい　ま、」

応募期間は2018年1月30日まで
となります。

「開けた。」
「ヴィーを目
のである。
」を開け、電

が震えながら続ける。

「……行つて……カイにーかは、がはつ！」
強烈に咳き込み、シエルは血を吐いた。痛みに耐えようど、あまりにも力を入れすぎたため、喉^{のど}が切れたのである。

「シ、シエル！」

王女が唇を動かす。でももう声が出ないようで、その喉からは、悲鳴のようなか細い音が漏れるだけだつた。血まみれの唇を懸命に動かすシエルを見て、ヴィイーは

「……シエル……」

一目に涙をいっぱいに溜めながら、王女の唇に耳を寄せる。

シェル王女は、途切れ途切れの、本当にかすかな声で囁いた。

「……カ……カイに………教えて……あげて……」

ヴィーは息をのみ、顔を上げる。

「……な！　なに言つてんだ、シェル！　ここを離れる
わけにいかないだろ！」

王女は、ぶるぶると震える手を持ち上げると――

「……シ……シェル……？」

――ヴィーの手に重ねた。

その手は熱を持ち、あり得ないほど震えていた。

シェル王女は、無理やり口元を上げる。

それは、ただ頬が引きつったようにしか見えなかつた

がー

彼女は笑つたのだ。

微笑ほほえんだのだ。

そして、ヴィーの目を見つめる。

「……行くのよ……ヴィー……だつて……あなたはー」

「ヴィーの目が、极限まで、見開かれていく。

「カイの一師匠しじょうでしょう……?」

耐え難い苦痛の中、魔法蟲に侵される恐怖の中ー

シエル王女は、ヴィーに、この場を離れ、カイのところへ行くよう頼んだ。

カイに教えてあげて欲しい。

勝機があるなら、気づかせてあげて欲しい。

そしてシエルは——
ヴィーに、ここを離れる大義名分も与えたのだ。
師匠なのだから、弟子でしに教えに行くのは当然なのだ
——と。

ヴィーは息をのむ。

くしゃりと顔を歪めると、大粒の涙が溢あふれた。

シ……シエル……

おまえは、ここで……それを言えるのか……
痛いだろうに……怖いだろうに……誰かに側にいても
らいたいだろうに……
シエル、おまえは——

ヴィーは歯を食いしばると、乱暴に涙を拭ふく。

「なんてすごい奴なんだ！」

シエルを一人残していくことに躊躇ちゅうちょはあつた。

魔力切れの賢者セイジが戦場に行くことに恐怖はあつた。

でも——それでも——

ヴィーはにかりと笑う。

苦痛に震えるシエルに、無理やり笑いかけた。

「わかつた！ シエル、任せておけ！」

ヴィーは力強くうなづく。

「カイの魔法の師匠シフウである、この天才——ヴィレッタ・パウリさまにな！」

* * *

「なんと……暗黒騎士が〈受け流し〉を使うとは！」

「く！くくくつ！」

王宮聖騎士・槍遣いのフウカの猛攻を、カイは辛うじて〈受け流し〉ていた。

光にしか見えない槍の攻撃を、剣の刀身を盾のようにして受け流す。

そのスキル——〈剣による受け流し〉。

カイがたゆまぬ修練の末に身につけた、超絶の防御スキルであつた。

しかし——

槍遣いが、楽しそうに目を細める。

「では……少し変化をつけてみよう」

「ぐ！」

これまで突き一辺倒いつぺんとうだつたフウ力が、振り下ろし技や回転技といつたトリックキーな攻撃を見せ始めた。その尋常ではない速度の攻撃に、多彩な技のバリエーションが加わっていく。

避け……きれない！

〈受け流し〉が間に合わず、カイは体のあちこちに攻撃を喰らう始めた。

「く！　くく！　ぐくくつ！」

二人の間で火花が散り、剣と槍の風圧で周囲の砂が盛大に巻き上がる。まるで二人は、台風の中心で戦つてい

るようだつた。

「力、カイ！」「お兄……！」

ミリアとクロエが、唇を噛む。明らかにカイの劣勢である。

カイは歯を食いしばつて防御に専念した。腕が重くなり、手足が震え、汗が流れる。

槍遣いフウカは、鎧の関節部分や装甲の弱い部分を的確に攻撃してきた。各部を守ろうと無理な防御体勢を取れば、大きな一撃が急所を狙つて確実に放たれる。

上手くて……強い！

直撃を喰らえば、勝敗はすぐに決してしまうだろう。

それほどに、フウカの槍は鋭く、重いのだ。

集中し、神経をすり減らし、緊張感を持続させ、カイは果てしなく続く槍の攻撃に耐えながら一機会を狙つていた。

大きな刺突が来る前に、敵は必ず槍を引く。その瞬間を一

狙う！

そして、気の遠くなるような、しかし実際には数秒の攻防の末一

敵が、槍を、引いた。

カイが目を見開く。

「いま！」

「ひゅつ！」

力イは鋭い呼氣とともに、満を持して神速の剣撃を放つた。

一拍^{いつぱく}で一度剣を振るうという、相手のリズムを崩す凄まじい練度の剣さばきである。

「む！」

槍遣いがたまらず、体勢を崩した。カイは懷に一気に踏み込む。

この敵を崩すのに必要なのは、速度——限界を越えた剣速だ！

カイの答えは——

「ヘ錬成^{アルケミー}——部分解除！」

カイは死を招くもののIIのヘ錬成^{アルケミー}を一部解除し——

「なに!?」フウカが驚きに目を見開く。

一刀身にいくつもの穴を穿つた。^{うが}丸い穴が連なる奇
怪な刀身。その意味は—

「な！ 剣を一軽くしたのか!?」

いち早く気づいたフウカが声を上げる。

そう。カイは大剣に穴を開け、重量を減らしたのだ。
カイは軽くなつた剣を、片手^{かたて}剣^{けん}のように持ち直すと、
ガントレットを丸めて即席の鞘^{さや}を作る。すかさず半身になつて、ぐつと腰を落とした。

大きく踏み込む。息を吸い込み、止める。

繰り出すその技は—

「ま、まさか！」

「一避けられるか？」

鞘走りを使つて剣速を加速する、サムライが持つ最速
抜刀術ばっとうじゅつ
ソードドロウ

「〈居合〉だとおおおおおつ!?」

「ひゅううううううつ！」

気合いとともに放つのは――疑似ぎ
ソードドロウ〈居合〉。

本物のサムライには及およばないまでも、カイはあらゆる
スキルを盗もうと決め、一人精進しょうじんを重ねていたのだ。

それは、敵たむではあつたが、自分を導いてくれた師への、
彼なりの手向けもある。

精進を重ねたカイの〈居合〉は――太刀だけなら、
すでに〈無尽〉をも越える速度を出せるようになつてい

た
。

加速された剣が、光となつて、弧を描く。
空気が切り裂かれる音が刃の後からついで
は音速を越えた証拠。

かわせるはずがない！

力イ渾身の最速抜刀。光が敵の胸を斬り裂いたと思つ

た
瞬間

な

カイが、大きく、目を見開く。

「フウカは、紙一重で、カイの「居合」をかわしてソードドロウ

いた。

しかも敵は、
体幹たいかんをわずかに逸らして
いるだけ。

その意味はつまり——彼は、カイの〈居合〉を見たのだ。
見切つたのだ。

な、なぜ！　なぜいまの〈居合〉を見切れる!?　そんなはずが——

フウ力が口元を緩める。

見えるはずのない刃を、フウ力は確かに一見ていた。

砂煙が晴れ、フウ力の顔があらわになる。

その目は——

「な……に……?」

槍遣いの目が、青白く、煌々と輝く。

フウ力が、目を細めた。

「……私に固有スキルを使わせるとは……なんという暗

黒騎士……しかし——

くるりと槍を回すと、下段で構える。

「〈直観〉を発動した私に、もはや速度は通用しない。理解したかね？」

カイが息をのみ、目を見開いた。

それはスキル。

槍遣いフウカが持つ攻撃視認スキル——〈直観〉である。

〈直観〉に速度は通用しない。彼はどんな速い攻撃でも、文字通り、「観る」ことができるのだ。

速度は、もはや関係ない。

音速だろうが、光速だろうが——速度では彼を倒せないのだ。

カイは愕然とする。

突破口だと思つた速度による攻撃は、すべて無駄だとわかつてしまつた。

カイは思いきり歯を食いしばる。

打つ手が一ない！

そして、カイが立っている場所、そこは一
フウカが攻撃に転ずる。

一槍の間合い！

「くくっ！」

神速の槍が連續で放たれる。穴の開いたままの剣では、
まともに受け流しもできない。
とにかく、離れなければ！

カイは、剣を地面に刺して砂を巻き上げ牽制すると、
背後へと飛び退り、槍の間合いから離れる。しかし—
「……久方ぶりに心躍る鬪いだつたよ。——だが、そろ
そろ仕舞いだ

フウカがふうと息を吐いた。

「君を連れていくのは無理だろう。ゆえに——ここで死
んでもらう！」

そして—

な……

「がはつ！」

カイが叫び声を上げる。プレートメイルの左肩が吹き
飛んだ。

「ま、まさか！」「嘘でしょ……お兄いいい！」

ミリアとクロエの悲嘆の声が響く。

カイは突然の衝撃に、もんどり打つて地面に倒れた。

痛みに耐え、砂まみれの体を起こす。

そして一顔を歪ませる。

まさか……まさか、こんなことが！

カイは確かに、フウ力から離れた。槍の間合いから距離を取つた。それなのに――

「……驚いたかね？　この槍は宝具、王国から賜つた

神槍——マイムールだ

神槍マイムール。

神話に曰く、使用者の手を離れて、敵を打つ鋒――

その槍は—

カイが歯を食いしばる。

—遠く離れた場所まで、伸びた。

伸びた槍の一閃いつせんが、カイの左肩の装備を吹き飛ばしたのである。

するすると槍が元に戻つていいく。フウ力がくるりと槍を—神槍マイムールを肩で回し、構えた。

「伸縮自在のこの神槍……どこまで避けられる？」
ま、まずい！

カイはすぐさま起き上がり、地面を蹴つて駆け出した。カイを追つて、槍が高速に伸びてくる。

速度は見切られる。その上、間合いも—無限に広い。

懷に飛び込もうにも一槍の伸縮速度の方が速かつた。

そして、フウカは槍を、カイのすぐ近くの地面に打ち込むと――

「なつ！」

一槍を縮ませながら飛び、逆に自分自身がカイへと高速で迫る。

そんな使い方もできるのか！

この瞬間――広い戦場はすべて、フウカの間合いとなつた。

いつでも、どこにでも彼の槍が届く。

逃げられる場所は、もうどこにもない。

「そろそろ諦めたまえ」

あきらひ

為す術もなく、槍の攻撃を喰らい始めたカイ。

伸び縮みする神槍。見切られた速度。
疲労の蓄積した体が重くなり、
「剣による受け流し」
が出来なくなつてくる。

装備が強烈な攻撃にひしゃげ、剥は
がれ、ひび割れ、壊こわ
れていく。

ついにヘルムが弾き飛ばされ、額から血が流れた。
「ぐく！」

カイはもんどり打つて倒れたが、歯を食いしばり、震
えながら立ち上がる。

伸びる槍の直撃だけは避けながら、なんとかフウ力に
近づこうとするカイ。

全身の傷から出血し、血で剣を持つ手が滑る。汗が目に入り、顔をしかめた。もはや打つ手がない。実力が違すぎる。

一強い！

圧倒的な実力差、絶望的な状況、切迫する事態——
満身創痍の体、壊れていく装備、出し尽くした剣技、
残りわずかな生命力——でも——

それでも——

カイはぼろぼろの体で立ち上がる。
血を吐きながら剣を構える。
震えながら地面を蹴る。

敵を倒すため — 親蟲を殺すため —
シェルを救うため —
カイはこの絶体絶命のピンチにおい
かつた。

カイは諦めない。

諦めることを知らない。

なにか……なにあるはずだ！
ロイヤル・パラディン
王宮聖騎士とて無敵ではない！

なにか、ないのか！

—そのとやくおね。

「カイイイイイイツ！
聞けえええええつ！」

な

危険な戦場に走ってきたのは——小柄な天才賢者。

シエルの容態を見ていたはずのヴィレッタであつた。

カイが息をのみ、目を大きく見開く。

「ば、ばか！　ヴィー、戻れ！」

「ヴィー、やめてええつ！」「なにやつてんの！　チビれ
つたああああ！」

カイが叫び、ミリアとクロエも目を見開き、大声を上
げる。

この戦場に踏み込むということは——

「小娘が……死を覚悟してのことだろうな！」

槍遣いフウカが、ヴィーの姿を認めるやいなや、槍の
穂先を彼女に向けた。

まざい！

ヴィーが走る。フウカが攻撃を放つ。槍が彼女に迫る。
危険を顧みず、ヴィレッタは一叫んだ。

「カイイイイツ！ オレさまが教えたことを思い出せえ
ええ！ そうすればお前はー」

「ヴィー、槍が来る！」

槍の攻撃に気づいたヴィーだつたがー彼女が顔を歪ませるーいま魔力を消費することはできない。ヴィーがせめて的を小さくしようと体を縮こませた瞬間ー
カイが目を見開く。

フウカの槍がーヴィーの右胸を貫きー彼女はー
「がはあつ！」

→後方へと強烈な勢いで吹き飛ばされた。

「ヴィイイイイイイイイイイイイイツ！」

カイが剣も構えず、ヴィーの元へと全力で駆け出す。仲間を見捨てるカイではないのだ。

「愚かな……側面がガラ空きだ！」

槍を戻したフウカは、続いてカイに槍を放つ。無防備なカイは格好の的。そこで――

「来い！ 食屍鬼ウゥッ！」 支配力ぜんぶ！ 持つてけええええ！

クロエが、カイとヴィーを守るため、ありつたけの支配力を使つて食屍鬼を召喚した。

槍遣いとカイたちの間に、食屍鬼による壁ができる。

すかさずミリアが飛び出した。

「クロエ！二十秒保たせて！」

「わかつた！早くヴィーを！」

クロエにうなづくと、ミリアは一人の元へと全速力で走る。

カイは—

た。

「ヴィー！なにやつてるんだ!?」

ヴィーが苦痛に顔を歪めながら、カイを見上げる。

「……カ……カイ……」

「バカ！しゃべるな！」

そうぜつ

血まみれになつたヴィーに駆け寄り、顔を壮絶に歪め

げほつと咳き込むと、ヴィイーは血を吐いた。体を縮ませたおかげで、辛うじて急所は外れたものの、出血が長引きば命に関わる大怪我おおけがである。

「……カイ……聞きけ……」

「黙つてろ、ヴィイー！」

しかし、ヴィイーは——

「いいから聞きけえええ！ オレさまは——シエルに頼たのま
れたんだ！」

彼女の叫びに、カイは——息をのむ。

「……シ……シエルに……？」

そうしている間にも、食屍鬼グリルの壁が槍で貫かれていく。
もう長くは保たない。

カイは唇を噛むと、黙つてヴィーの言葉に耳を傾けた。

「ヴィーが震えながら口を開く。

「……カイ……魔法だ……魔法を使え……」

「……魔法……？　俺が習つたのは一つだけじゃないか……それに——俺には、その魔法さえ使えない……」

「そのとき、ミリアが二人のところに飛び込んできた。
「カイ！　ヴィーを連れていくわ！　応急処置しない
と！」

遠くから「——もう保たないよおお！」とクロエの悲痛な声が響く。

「わかつた……ヴィーを頼む！」

ミリアがヴィーを抱きかかえ、走り出す瞬間、血まみ

れのヴィーが—

「……カイ……笑え……」

途切れ途切れに、言う。

「……笑うんだ……！」

カイは、目を見開き、ヴィーを見つめた。

「もう行くわ！ カイ！」

ミリアが走り出し—

「——もうだめ！ 逃げてええ！」

クロエが遠くから叫ぶ。

そして—

不死者の壁が貫かれ、食屍鬼グルの群れが吹き飛ばされた。

伸びた槍が辺り一帯を薙ぎ払い、カイは辛うじて攻撃を

避けると、大きく飛び退る。

ミリアは、なんとかヴィーを連れ、後方へと退避していた。クロエも、ヴィーの容態を見に走つていく。

槍遣いフウ力が槍を戻し、カイに目をやつた。

「さあーそろそろ本当に仕舞いにしよう！」

くつ！

凄まじい槍の猛攻が始まる。

速度と重さと広大な間合いを誇る、フウ力の連續攻撃。

「ぐ！　ぐく！　くくくくく！」

カイは槍の猛攻を避けながら、傷を負いながら一ヴィーの言葉を思い出していた。

魔法……魔法だと？

俺がヴィートに習つたのは、光を曲げるだけの基本魔法
じゃないか！

しかもそれすら、俺には使えない……
くくつ！

目前に槍が迫り、カイは飛び込むように前転してかわす。しかしすぐには一撃目が来た。地面を転がりながら寸でのところで槍を回避する。カイを追いかけるよう、執拗に槍の穂先ほさきが迫った。

カイはなんとか起き上がらると、強烈に地面を蹴つて走る。

疲労で足がもつれ、速度が上がらない。
手足が震え、大量の出血により、目が霞かすみはじめた。

まるで泥の中を走っているかのように、体が重くなる。
このままでは……シエルを一助けられない！
カイは槍から辛うじて逃げながら、さきほどのヴィー
の言葉を思い出していた。

魔法……魔法を……使う……？
カイはヴィーとの訓練を思い起こす。

あのとき……

あのとき、ヴィーはなんて言っていた？

あの魔法を自分のものにできれば……？

そして、カイの脳裏のうりに、あの日のことが浮かぶ。

カイは思い出す。

あの日の——ヴィーの言葉を。

（一を完全に自分のものにしてみる）

（それだけで、おまえは一）

カイの目が見開かれていく。

（途方もなく一強くなれる）

途方もなく……強く……

強く一

あー

カイの中で、何かががちりと音を立てた。

それは、意識が切り替わった音。

ヴィーの言つていたことが、胸にすとんと落ちる。

すべてが一すべての断片が一カイの中で一集まり、

繫がり、形を成していく。

……そうか……

そういうことか——

あの魔法は——

カイの脳内に、いま答えが弾ける。

光を曲げるだけの基本魔法。

槍遣いフウ力の攻撃視認スキル。

光属性魔法剣。

そして——魔法を使うためには——

(……笑え……笑うんだ……)

大いなる力に身任せ——力を抜くこと。

そうか……そういうことか……わかつた……

カイの目に輝きが戻る。

わかつたぞ——ヴィー！

カイは——キツと顔を上げ、フウ力をにらむと——
「む？」

——ぼろぼろの体で、なけなしの力で、フウ力の目前
まで高速移動した。

それは暗黒騎士スキルシャドウラッジョ〈影走〉。そして——

「性懲りもなく近接戦とは……速度で私には——勝て
ん！」

フウ力が攻撃視認スキルヴァイジョン〈直観〉を発動する。

彼の目が青白く輝いた。

速度は、もはや効かない。
どれほど速く攻撃しても、彼にはもう一届かない。

「終わりだ。暗黒騎士！」

フウ力の槍が目の前に迫る。その鋭さと速さ。

喰らえば、一撃で終わる。

その絶対絶命のピンチに一カイは—
無骨で無愛想な暗黒騎士、カイ・ブラッディアは—
「な……」

一笑つた。

カイが思い出したのは、自宅で催したヴィーの歓迎会
の光景。

両親がいて、クロエがいて、ミリアがいて、ヴィーが
いて—

そしてーシエルがいる。

皆が食卓を囲み、大いに食べ、さまざまことを話し、笑いあつた。

ふ……

その光景を思い出すだけで、カイは笑うことことができた。大切な人たちと一緒に過ごした時間を思い起こすだけで、カイは幸せな気持ちになれた。

ああ……そうだ……そうしよう……

あの場所に……あの幸せな時間に帰ろう——

一人も欠けることなく、みんなで。

力が抜け——体が緩み——頑^{かたく}なだつた心がほどけ——

そして——

大いなる力が、カイの体に——

——カイの魔力経路に——流れ込む。

魔力は腕を伝い、大剣へと流れ——やがて——
「まあいい……死んでもうう！」

フウカが叫ぶ。

カイは——ふと、剣を振るつた。

「……え？」

ぶしゅうつと、鮮血が飛び散る。その血は——
「……な……なぜ斬られている……？」

確かに……避け

たはず……

——槍遣いがよろめき、後退あとずさりした。

——肩口を斬られ、フウカは息をのむ。

「それは——ミリアの分だ」

カイが告げた。

フウ力が大きく、目を見開く。
確かに〈直観^{ヴィジョン}〉は発動している。彼に見えない剣撃はない。

そう——彼は、見える剣なら、どんな速度でも見切れるのだ。

カイは、大剣を手に、ただ佇んでいる。

何の変化もない。前と変わった様子はない。

それなのに——

「な……なぜだ……この私に——」

フウ力が驚きに目を見開き、カイに神速の槍を振るつ
た。

「一見きれぬ剣など一ない！」

だが――

「がはつ！　ぐくつ！　……な……なぜ……！」

フウカの右胸から、鮮血が吹き出す。彼は、信じられ
ないというような顔をした。

「それは――ヴィーの分」

カイが静かに告げた。

槍遣いが混乱し、よろける。

「なぜ……なぜだ……避けたはずだ！　なぜ見切れな

い！　

カイは正面で剣を立て、騎士の礼をしてみせた。
その剣に変化はない。

なにも変わつていない——ようを見えた。

だが——

それこそが、カイの答え。

ヴィーが教えてくれた、魔法の答え。

それは——魔法剣。

ヴィーが教えてくれたのは——ただ光を曲げるだけの、

光属性の超基本魔法。

その名を——プリズム偏光。

光を曲げるだけ——そう、光を曲げ——視覚像しかくぞうを捻じね曲げる魔法。

カイが大剣に目をやる。

今までと、なんら変化のない、その大剣。

しかし——その剣は、その剣の形をしていない。

そう見えるだけ。

見誤らせる。

それが力イの答え。

それが、その剣の秘密。

その剣は大剣に見えるが——果たして、本当はどんな
形をしているのか——

視覚を頼りにしているフウカには——見えない。

スキルを使おうと——目で見ようとする限り——絶対に
見えない。

槍遣いは、この剣筋を、見切ることはできない。

なぜなら——それは速度ではないから。

最初から——剣の形を見誤つてしているから。

いまだかつて、その魔法を、剣に応用した者はいない。
戦士系上位スキル アルケミー **〈鍊成〉** と、光属性魔法 プリズム **〈偏光〉** を組み合わせた、前代未聞のその技は——

名付けて——

魔法剣——**〈無明〉**。

カイがゆつくりと□を開いた。

「では王宮聖騎士殿。存分に——死合しあいましそう！」

槍遣いが、足元の自分の血を見て、呆然ぼうぜんとする。

魔法剣 **〈無明〉** ——

その剣は決して——真実の姿を見せない。

「……私に見切れぬ剣など……あるはずがーない！」

槍遣いフウカが、連續で刺突を放つ。

その鋭さ、重さは健在。

だがー彼にはわからないのだ。

カイの剣が、なぜ見切れないのか、わからない。

「ひゅうつ！」

カイが鋭く踏み込み、下段から斬り上げた。フウカはその剣筋を、にらむようにして確認するとー確実に避ける。しかしー

「くくうつ！」

ー胸元を斬り裂かれ、槍遣いは思わず声を上げ、後

退りした。

地面に飛び散る自分の血を見て、フウカは息を飲み込む。

「なぜだ！ 避けたはずの剣に——なぜ斬られる!?」

フウカは混乱の中、カイの術中に嵌つていく。

カイは、わざと剣速を落としているのだ。

フウカに、よく見えるようになり

フウカが、確実に避けたと思えるようになり

見れば見るほど——直観^{ヴィジョン}を使えば使うほど——

「なぜ……なぜ……なぜ！」

——フウカは混乱の極に落ちていく。

カイは敵の様子を見て、剣の柄^{つか}を固く握りしめた。

俺の剣は——魔法剣〈無明〉は——王宮聖騎士に届く！

勝てるかもしれない——最強の騎士に！

装備は壊れかけ、体中に傷を負い、体力も、気力も、属性力も、もう残りわずか。

連戦に次ぐ連戦に疲弊ひへいし、最強の騎士との限界ぎりぎりの戦いに身を投じるカイに——

ほんのわずかな、希望が見えてきたのだ。

この機を絶対に逃せない——たとえ、この体どうなろううと——

カイは、思いきり唇を噛み締める。

——一気に攻める——
行けいつ！

ロイヤルパラディン

カイが暗黒属性力を解放すると、フウ力の足元に毒の沼が広がつた。

それは暗黒魔法〈毒沼〉^{ポイズン}。フウ力ほどの上級騎士なら、当然毒耐性を持つており、毒は効かない。しかし――

「く！」

フウ力が沼に足を取られ、体勢を崩した。

一足さばきを封じることはできる。

そのわざかな隙を狙い、カイは、フウ力の懷に潜り込んだ。

槍遣いの目が、大きく、見開かれていく。

カイはぐつと踏み込むと、腰をひねり、剣の柄を強く握る。

筋肉が盛り上がる。息を吸い込む。

溜め込んだエネルギーを、一気に解放する。

カイは叫ぶ。声を限りに叫ぶ。

放つは——無限の刃。

「騎士殿！　お覚悟おおおつ！」

ぎしりとカイの筋肉がきしんだ。

大剣が揺らぎ、霞み、ついに——黒い影となる。

その剣技——

フウカの目が、見開かれた。

「暗黒剣技——〈無尽むじん〉ツ！」

瞬間——見えない無数の刃が、フウカ目掛けて、一斉に襲いかかる。

それはまるで刃の嵐。

魔法剣〈無明〉を用いた、暗黒剣技〈無尽〉。カイは、光と闇の属性技を、一つの剣技として統合したのである。

その剣技——

名付けて——〈無明無尽剣〉。

それは回避不能の無限の刃。

フウ力に、避けられるはずがない。

見ている限り、視覚に頼つてている限り——避けられる

はずがないのだ。

これで終わりだ！

カイが力の限り、剣を振るう——

しかしー

⋮⋮⋮⋮⋮

フウ力の周囲で弾ける、目もくらむような火花。硬質な音が、二人の間で響き渡る。

カイが目を見開き、息を飲んだ。

見えないはずの剣が、無数の刃が、避けられないはずの剣技が一槍一本で一防がれる。

ーなにいいいいいつ!?

フウ力は顔を伏せ、いつそ静かに、カイの渾身の剣技を、すべて最小の動きで弾いていた。

⋮⋮⋮届かない!
ーなぜだ?!

今度はカイがたじろぐ番だつた。

息が続かない。急激に腕が重くなる。体中から汗が吹き出る。体内の酸素が枯渴こかつし、カイの顔が青黒くなつていいく。

く……くそおおおおつ！

カイは限界まで剣を振るうと、悔しさに奥歯を噛み締めながら、飛び退つた。

力が入らず、カイは思わず膝ひざをつく。がくがくと震える体。顔を歪めながら、カイは失われた酸素を体に取り入れるために、荒い呼吸を繰り返した。

な……なんてことだ！

カイ渾身の〈無明無尽剣〉が届かなかつたのは――

顔を思いきり歪ませる。

「フウカが、カイの剣技を見切つたからに違いなかつた。

なぜ……なぜ見切れた!? 目で見ている限り、スキルを使つている限り――

絶対に見切れないはず!

ふと、フウカが顔を上げる。その顔を見てカイは――

……な……

一息を飲み、絶句した。

フウカの顔に走るのは――赤い水平の線。

それは明らかに、槍で創^{つく}られた傷^{きず}。

彼の両目は、一直線に――斬られていた。

「……自分の目を……斬ったのか……」

カイがたじろぎ、硬直する。あまりの事態に動けなくなつた。

フウ力の頬を流れる鮮血。それはまるで悔恨の涙である。

槍遣いフウ力が、ふうと息を吐いた。

「若き暗黒騎士よ……その剣技、見事と讃えよう。よくぞその技にたどり着いた。**〈鍊成〉**^{アルケミー}と光魔法を組み合わせ、刀身を誤認させるとは……老兵^{ロウヘイ}には思ひもよらぬ戦い方だ。ふふ……皮肉なものだな……私は目が良すぎるせいで！」

フウ力が自嘲^{じちよう}の笑みをこぼす。

「逆に——^{もうもく}盲目になつていたようだ」

カイが、その血まみれの笑みを見て、思わず後ずさりする。

フウカは剣撃を喰らいながら、気づいたのだ。視覚に頼つても、カイの剣技は見切れないことに——

しかし、フウカは視覚系スキルに絶対の自信を持つ騎士である。カイの「見えているのに見えない剣技」に対しても、どうしても視覚を使つてしまふ。目に頼つてしまう。

ゆえにフウカは——自身の目を潰し、視覚系スキルを完全に封じたのだ。

目を潰し、スキルを封じることで、なぜカイの剣技を

見破れたのか？

それは一観覚系スキルに使つていた膨大な属性力を、他の感覚に回したからである。

フウ力は、聴覚^{ちようかく}や嗅覚^{きゅうかく}、触覚^{しょつかく}といつた視覚以外の感覚に属性力を振り分けることで、体全体で周囲の状態を把握する、いわば、全身認知の感覚に目覚めたのである。その感覚を使えば、カイの剣技を見破るなど一造作もない。

もはや、フウ力を欺くことはできないのだ。

カイが目を見開き、目の前の王宮聖騎士を見つめた。これが王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}。

信念を貫くためならば、己の使命を全うするためなら

ばー

自身の最も優れたスキルすら封じ—
己の目さえも一潰す。

これが最強の中の最強。

一騎当千の戦士——王宮聖騎士。
ロイヤルパラディン

フウ力が□を開く。

「詫びなればならんなど……若き暗黒騎士。許されよ

」

槍遣いが、すうと槍を構えた。

その瞬間——カイはとつさに飛び退く。フウ力の周り
の地面が、空気が、光が、震えているように思えたから
だ。

……こ……これは——！

フウカが静かに続ける。

「君を侮り」あなど

王宮聖騎士ロイ・ヤル・パラディンが——その潰れた目を——カイに向かって。

「全力で戦つていなかつたことを——」

ツツ！

カイの髪の毛が逆立つ。背筋を冷たいものが一気に駆け抜ける。

目が潰れているにも関わらず、カイが感じた恐怖、それは——

——観られた——！

カイが恐怖を押し殺し、駆け出そうと一步踏み出す刹

那
—

な？
じくあし
軸足に一槍の穂先があつた。カイは混乱しながらも、

槍を弾こうと剣の柄を握り込む。しかし、次の瞬間—
カイは圧倒的な恐怖に目を見開き、動けなくなつた。
なぜなら—

—刃の先を、槍の穂先が、押さえていたからである。
ツツツ？

なぜと考えている暇ひまもない。思考はついていけない。
見たものを信じられない。

しかし、カイは混乱と恐怖をねじ伏せ、槍を斬り刻む
ため—剣技を放つ。

カイの筋肉が盛り上がる。奥歯を噛みしめる。

暗黒剣技〈無尽〉を放とうと、大きく一步踏み込もうとしたとき――

カイの喉から、悲鳴のような声が出た。

一足先を縫い止めるように、槍が、突き刺さつている。
な……なんだ……

カイの顔が歪んだ。

――なんなんだ、これは！

動く先に槍があり、考える前に槍がある。

カイは混乱する。困惑する。当惑する。狼狽する。恐怖する。

わけが――わけがわからない！

避けねばいいのか、止まればいいのか、跳べばいいのか、守ればいいのか、攻めればいいのか——わからない——どうすればいいのかわからぬ！

技の出を止められ、バランスを崩したカイの目の前に——またもや——

うつ！

——神速の槍が迫っていた。

まるでそう動くことがわかつていたかのように、当然のよう——槍がある。

ダメだ——避けられない！

カイが歯を食いしばった瞬間、足がずるりと滑った。力が入らず、膝が折れたのである。

それが不幸中の幸い——

辛うじて逸れた槍の穂先が、肩口をかすめる。その凄まじい衝撃に——「ぐくつ!」——カイは後方へと弾き飛ばされた。弾丸のように飛ばされ——「がっ!」——地面を何度もバウンドすると——ぶざまに転がり、土煙をもうもうと上げ、ようやく止まつた。

く……くく……くく……

体中がばらばらになるような衝撃。全身の激痛に、カイは震えながら顔を上げる

肩のアーマーにぴしりとヒビが入ると——バリンツ——粉々になつて地面に落ちていつた。

カイは突然と、向こうに立つ、王宮聖騎士を見上げる。

ロイヤルパラディン

槍遣いフウカは、潰れた目で、静かにカイを見ていた。

なにが起きたのかわからない。

どうしてこうなったのかわからない。

近くにいた者にはこう見えただろう——カイが、自分

から、槍の前に動いていると。

技の出だけでなく、足さばきや、剣の初動さえ見切られる——

いや、そうではなく——動くずっと以前に、止められていたのだ。

予想ではない。推測ではない。洞察でもない。

そう、それは、見切られたというよりも、むしろ——

背筋を怖おぞ気が走つた。

ーも……まさか……

カイが目を見開く。

⋮⋮⋮予知⋮⋮⋮!

カイは、自分が狭い場所に押し込まれるような、強烈な閉塞感を覚えていた。

未来の動きを封じられるということは、未来の可能性を奪われることと同義なのである。

そしてカイは、一フウ力の背後に浮かぶ幻影げんえいのようなものを見て、思いきり奥歯を噛み締めた。

カイがたじろいだ気配に、フウ力が口元を上げる。

「ほう⋮⋮⋮これが見えるとは⋮⋮⋮やはり君は、類まれなる戦士のようだ」

槍遣いフウ力の後ろに浮かぶもの——それは——
巨大な、二つの、まぶた。

全身で周囲を把握する感覚は——全身で世界を『識る』
スキルへと昇華しょうかされた。

それはフウ力が長年追い求めていたスキル——彼はいままで視覚に頼りすぎ、感覚のバランスを崩していたのだ。目を潰したことで、彼はそのことによつやく思い至つたのである。

答えはすでに、彼の中にあつたのだ。

速度に関係なく世界を見るスキルヴィジョンへ直観シラフクを越えた

時間に関係なく世界を識るスキル——

その名も――

「〈達識達觀〉——開眼」

かいがん

しんがん

「巨大な目」が、ゆつくりと、見開かれていく。
それは未来を識り、未来を観る、予知予見の心眼――

彼は、周囲の状態が変化する直前に、あらゆる可能性
を探索し、未来の状態を識ることができることができる。

それはほとんど――予知の領域である。

王宮聖騎士・槍遣いのフウ力が、静かに口を開いた。

「さあ、若き暗黒騎士よ。今までの非礼を託び――」

カイが奥歯を噛み締め、壮絶に顔を歪める。

「――全力を持つてお相手しよう」

五章 二人の絆・二人の力

「——クロエ、早く！ 走るのよ！」 「ま、待つて、ミリ

ア！」

ロイヤル・パラディン
王宮聖騎士（ロイヤル・パラディン）の本当の実力を垣間見たミリアとクロエは、傷きずを負つたヴィーを連れ、すぐさま戦場から離れた。

二人とも恐怖でがたがた震えている。

ミリアは振り返りながらも、全速力で走った。

あれは強いなんてものじゃない……本物の化け物だわ！

聖騎士ミリアパラディン

死靈術師クロエネクロマンサー

王宮聖騎士ロイヤルパラディン

の人間離れた強さがわかつた。

強者は強者を知る——腐屍竜戦ドラゴンジンビを乗り越えて強くなつていた二人だからこそわかる、次元の違う強さである。あの槍遣いと同じ戦場に立つていたという事実に、二人は今さらながら戦慄せんりつした。

こうして生きているだけで奇跡。

そして——人はこうも思つていた。悔しかつたが、そう思わざるを得なかつた。

——自分たちには、なにもできない。

あそこにおいても、カイの邪魔じやまになるだけ……

ミリアが悔しさに、青ざめた顔を歪めるが——

一でも！

彼女は泣きながら走るクロエを見て、傷を負つたヴィーに目をやり、一覚悟を決める。

私がしつかりしなきや！ できることをするのよ！ ミリアは、シエル王女が横たわっている場所まで走ると、立ち止まり、すかさずヴィーを寝かせた。

「クロエ……クロエ！ ヴィーの傷口を押さえて！」

果然としていたクロエがびくりと体を震わせると、涙を拭いてうなづいた。クロエも混乱しているのである。「わ……わかつた！」

クロエがハンカチを取り出し、ヴィーの傷口を押さえれるが、ハンカチは見る間に赤く染まり、クロエの指か

ら溢あふれていく。

「ああ……！」

クロエが顔を歪めた。出血を止めない限り、長く保た
ないのは明らかである。

「チ……チビれつた……大丈夫よ……ぜつたい大丈夫だ
から！」

クロエは、自分自身に言い聞かせるように繰り返した。
ヴィーが震えながら目を開け、荒い息を吐く。

「……だいじょーぶ、だいじょーぶつて……おまえら
兄妹きょうだいは……同じことを言うなーげほ！ げほつ！」

ミリアが声を上げ、クロエが涙目になる。
「ヴィー、しゃべらないで！」「お願ひだから黙つてよ！

チビれつた！」

咳き込んだヴィーは、苦しそうにしながら続けた。

「……シエル……は……？」

ミリアがシエルの様子を見て、眉根を寄せ、涙をこらえる。

「う……腕^{うで}が……」

シエルの腕は蟲^{むし}からにじみ出る酸性の体液によつて焼けただれていた。〈障壁〉は辛^{から}うじて蟲の侵入を防いでいるが——ヴィーの魔力が尽き、〈障壁〉がなくなるのも時間の問題である。

「……シエル……ごめん……なにもできなくて……」「ううう……うううう……！」

シエル王女が苦悶のうなり声を上げる。

残されている時間はあとわずかだつた。
魔法蟲に侵されつつあるシエル王女。

じゅうしょう
重傷を負つたヴィレッタ。

全身傷だらけのミリア。

死靈支配力の枯渴したクロエ。

そして――

本気を出した最強の戦士――王宮聖騎士と戦つている

カイ。

戦場から漂つてくる圧倒的な力の気配に、皆が震える。

「……や……やばいぞ……」

ヴィーが辛そうに口にする。彼女の感知能力は、鋭敏

に敵の能力を感じ取っていたのだ。

「先読みなんかじゃない……あいつの能力は、ほとんど
——未来予知だ……」

ヴィイーが顔を歪め、掠かすれた声で言う。

「そんな奴と……どう戦えっていうんだ……
……な……なんてこと……」「……お兄……」

ミリアとクロエが息をのみ——絶望に震えた。

* * *

どうすれば……どうすればいい!?
カイはまだ辛うじて立っていた。一方的に攻撃を受け、

装備はあらかたヒビ割れ、壊れ、吹き飛ばされている。

体中に傷を負い、血まみれになつていた。

カイは槍の攻撃が一瞬止んだところで——ふつ！——地面を剣で掘り起こし、砂煙^{すなけむり}を上げる。煙幕^{えんまく}にまぎれて、距離を詰める作戦である。しかし——

「な!?」

踏み出した足を槍で払われ、カイはぶざまに地面に倒れる。顔をしかめ、目を開いたカイの鼻先に——すでに、槍があつた。よ——

避けろおおおおおつ！

首を思^{ほお}いきりひねつてなんとか槍をかわすが、「ぐく！」頬を斬^きり裂かれ、鮮血^{せんけつ}が飛び散る。地面を転がり、

体をひねつて跳ね起きると、すぐさま後方へと大きく飛び退つた。

頬をぐいと拳こぶしで拭き、再び剣を構えると、フウ力を睨にらむ。

な……なんて強さだ……

王宮聖騎士フウ力は一度、肩でくるりと槍を回すと、

静かに構えた。

技の巧たくみさ、神速の槍さばき、一撃の威力——どれを取つても力イを遙はるかに上回り、その上装備しているのは、伸縮自在の神槍しんそうマイムール。

そして、極めつけは——

予知に匹敵する〈直觀ヴィジョン〉の最上位スキル——〈達識達

観く。

技の出は封じられ、足さばきは先んじられ、剣の挙動も押さえられる——

カイはぎりりと奥歯を噛みしめる。

打つ手が……ない……

ここまで圧倒的な敵と対峙したのは、初めてのことだつた。

全身が震え、体が芯から冷たくなる。

敵は最強の中の最強——王宮聖騎士。

これほどまでに……強いのか！

すべてが後手にまわり、カイは見る間に追い詰められていいく。

体中の筋肉が悲鳴を上げていた。これまでの連戦で体力はすでに底をつき、疲労^{ひろう}が蓄積された手足が震え、目が霞みはじめる。剣技^{けんぎ}を放つことはもう難しかつた。

はあ、はあ、はあ――

荒い息を吐き、カイは汗をぬぐう。

手も足も出ない……剣が届かない……近づくことさえ難しい……

だが――カイは唇^{くちびる}を噛^しみ締める――絶対に、諦めるわけにはいかない。

この男を倒さなければ――シエルを救えないんだ！

もう時間がない。生命力も残りわずか。

いま攻めなけば――

カイは大剣に目を落とすと、覚悟を決めた。

——永遠に勝機は——ない！

カイはさらに後方へと跳ぶと、剣を正面に立て、息を吐く。腰を落とし、目を閉じると、集中した。

戦場で目を閉じるなどあり得ないことだつたが、それでもしないと力を集められそうもなかつた。その力とは

——暗黒属性力。

槍遣いが片方の眉まゆを上げる。

「……距離を取るつもりか？ そ^うはさせんぞ！」

フウカが槍を振りかざし、跳ぶように駆けてくる。カイは恐怖に押しつぶされそうになりながら、集中した。この男に敵う技も、速さも、力も、俺にはない。

この男の予知をくつがえす、柔軟さも持ち合わせていない。

だからー

唇を噛み締める。

い武器。

足りないのはー意表を突く武装。敵が予想だにしない武器。

ゆえに一カイは集中する。属性力を溜めるため、集中する。

精靈を信じ、大いなる力に身を委ね、大氣から、大地から、力を集め、ぎょうしゅく凝縮し、練り、全身に流していく。

力が集まる。力が溢れる。

迫るフウカ。近づく足音。音が速くなる。大きくなる。もう目前。

「ここまでだ、暗黒騎士！　貫け——マイムール！」

フウ力が豪腕ごうわんを振るう。猛烈もうれつな速度で近づく槍。槍の後方で衝撃波が弾ける。音速を遥かに越えた槍がカイを襲う。

その瞬間——

カイはカツと目を開いた。

その力、集めた暗黒属性力を、体を伝わせ、腕に流し——
一気に、手の中へ——

——握った大剣の中へ、流し込む。

「うおおおおおおおおおお！」

カイは叫ぶ。カイは鍊成れんせいする。再び鍊成する。

その練成で生み出す剣は——

「〈武装練成〉」

声を限りに宣言した。

「来い！——死を招くもののⅢイツツ！」

見よ。無骨な大剣が厚さを増し、さらに巨大に、禍々しく練成されていく様を。

黒々とした表面が一気に形成され、不吉な赤い血溝が、複雑な文様のように刻まれていく。

その忌まわしき姿は、まさに死への道標。

剣の名は——死を招くものⅢ。

名前のとおり、Ⅱの上位剣である。

槍遣いフウカが〈練成〉を感知し——いぶかしげな表情になつた。

「そのような分厚い剣で何が斬れる！ 愚策だつたな、

暗黒騎士！」

槍遣いがトドメを刺そうと、さらに槍の速度を上げたとき――

「フウカが、今度こそ――驚きにたじろぐ。なぜなら――
「な……その武器は！」

「カイの手の中の武器は――
「二刀だとおおお!?」

――縦に二つに割れ、巨大な一振りの剣となっていた。
一刀と思わせて二刀――これがカイの狙い。敵の予想
を上回る武器。カイは両手に大剣を握り込むと、腕をク
ロスさせながら――

「うおりやああああああああ！」

一振り抜く！

カイは片手剣を扱えない。バランスが崩れるからである。しかし、両腕で寸分たがわず同じ動きをすれば、バランスが崩れないとわかつていたのだ。

そのヒントは一フウカやキース会長の攻撃。二人は、盾^{たて}の正中線へ完璧な攻撃を仕掛けていた。〈受け流し〉すら許さない、完全な重心への攻撃。

カイは自身の正中線を意識し、左右で完全に同じ動きをすることで、バランスを取つたのである。

二刀による、間合いも軌道もまるで違う攻撃に、フウ力が！ 「ぐくー！」 わざかに体勢を崩した。

カイが目を見開く。

來たー

いまがーこのときこそがー

「好機けんきツ！」

剣技けんぎを十全に放てる状態ではなかつたが、この機きを絶対に逃せない。

この体づらぬがどうなるうとー最速剣技しつそくけんぎでーフウ力の心臓しんぞうをー貫貫く！

カイは力を振り絞る。すべての気力を奮い起こす。動け、俺の体！ 放て、我が剣技！

そしてカイはー再び宣言する。

「死デスを招ブリくもガのⅢー〈結合〉！」

フウカの顔が驚愕ヤヨウガクで歪んだ。なぜなら――

「な……今度は――刀だとおおおおつ!?」

一両手の二刀を、再び一つの剣へと〈結合〉したからである。

一刀にして二刀。そして一一刀にして一刀。これがカイの答え。

キース会長の蟲ムカシを斬つたときの、纖細な鍊成技の経験がなければ、辿たどり着けない結論である。

カイはすかさず剣を引き、体をひねる。腕をひねり、拳を回し、回転力と運動力を溜める。そして一強烈に踏み込みながら、槍使いの心臓目がけ、全身に溜めた回転力を、一気に、一直線に――

「くらえええええええええつ！」

一ぶち込む。

その技——暗黒剣技〈羅刹らせつ〉。

「ぐくうううううううつ！」

すべてを貫く回転刺突技しどつが炸裂さくれつした。

槍遣いフウ力が強大な衝撃にのけぞる。強烈な手応え

にカイも思わず吹き飛ばされる。

ぶしゅうつと、槍使いの胸から大量の血が飛び散った。

そして——

王宮聖騎士ロイヤルパラディンがついに一膝ひざをつく。

や……やつたか……!?

練成技を駆使して、分離、結合する死を招くもののⅢデスプリンガードライ

その大剣による、カイ最速の暗黒剣技〈羅刹〉—
己のすべてを賭けた、渾身の一撃が決まつた。

カイは歯を食いしばつて顔を上げる。もう体が動かない。
とつくに限界を越えていたのだ。それでも—
ぐぐ……

カイは立ち上がる。完全に……完璧に……奴を……仕
留める！

泥のように重たい体を引きずつて、カイは震える足を
踏み出した。そのとき—

「ぐ……やつてくれたな……暗黒騎士いいいつ！」
フウカが顔を上げる。憤怒の形相でカイを見上げた。

その胸の傷は—

ああ……！

—致命傷ではない。殺しきれなかつた。

だが—深手を負わせたのは確か。あと一撃食らわせ
れば—

勝てる！

あと—一太刀！

カイが、剣を構えた、その瞬間—

……え？

カイの目が、限界まで、見開かれていく。

パリンツツと、硬質な高い音をさせ—
な……

——大剣が——ガラスのように——砕け散つた。

柄^{つか}の部分までもが砕け、粉々に壊れ、地面に落ち、手には——何も——

何も残らない。

無茶な鍊成技と、強烈な刺突の衝撃に、剣が——耐えきれなかつたのだ。

あ⋮⋮ああ⋮⋮あああ⋮⋮⋮!

カイは呆然と、空になつた、両手を見下ろした。

ない。

何もない。

剣すら失つた。

生命力も、体力も、気力も、魔力も、属性力も——

もう、何も、残されていない。

カイが壮絶に顔を歪めた。

うううううううううう！

これでは助けられない。

シエルを一救えない！

カイは崩れるように膝をついた。影が、静かに、彼を

覆っていく。

カイが、顔を上げ、思いきり歯を食いしばった。

目の前に立っているのは——最強の中の最強——

「ぐく……ま、まさか、これほどの戦いを見せるとは

……見事なり暗黒騎士！」

王宮聖騎士が槍を振り上げる。

ロイヤルパラディン

ロイヤルパラディン

「貴君に――誇りある死を！」

* * *

「なにか……なにか手はないの!?」

ミリアが憔悴しようすいしきつた顔で叫ぶ。

制服のシャツを破つて、ヴィーの傷口を縛り、ある程度の止血を行つた。手足や服は赤く染まり、まるでミリアの方が大怪我おおけがを負つたように見える。

シエル王女の様子を見ていたクロエが一聲を上げた。

「そ……そだ……そだよ！ お兄の、あの力！」

クロエの言葉に、ミリアが顔を上げる。

「あの力つて……腐屍竜戦のときに見せた、あの力のこと？」

「そう！　あの力があれば、王宮聖騎士も倒せるんじゃない！」

ミリアは考える。

確かに……確かにあのときカイが見せた力があれば、なんとかなるかもしねりない……

でも……

でも――どうやつて？

「……あれは……カイだけの力じや……ないぞ……」

少し落ち着いてきたヴィーが、か細い声で言った。

それでも依然として、危険な状態である。

ドラゴンジン

ロイヤルパラディン

「ヴィー、無理しないで……お願ひよ……」

ミリアが言うのに、ヴィーは首を振った。

「どーセカイが勝てなきや……オレさまたちも……シエ
ルも……助からない……」

ミリアもクロエも黙り込む。それは、紛れもない事実
だつた。

ヴィーが苦しそうに顔を歪めながら続ける。

「あの力はカイだけじゃなく……カイに生命力を与えた
奴に秘密がある……純度の高い神聖力を持つた奴が一
鍵だ」

「純度の高い……神聖力……」

ミリアは思わずシエルを見た。

自身のレベルは低いのに、高レベルの神聖治癒魔法を使いこなしているのはー

「シエルだわ！　彼女の神聖力はきっと高純度のはずよ！」

ミリアが言うのに、ヴィーは目を閉じ、ふうと息を吐いた。

「そうか……そういうことか……それがもしかして、今回^{ゆうかい}の誘拐事件^{しんそう}の真相かもな……」

「どういうこと？」

ミリアの問いに、ヴィーが答える。

「あの王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}は、シエルだけじゃなく、カイも寄越^{よこせ}せと言つただろ？　二人の属性力が合わさると、ものす

「ごい力が生まれるつて知つてたんだ……利用しようとしたのか……それとも……」

そこでクロエが割り込んだ。

「ね、ねえ！ 真相はともかく、結局、お兄がシエルの生命力を吸収すればいいってことでしょ！ それなら——あ……」

彼女が声を上げるが——そのことに気づき、眉根を寄せた。うつむいた。

そう。仮にそうだとしても——方法がない。

ミリアが辛そうな顔で、クロエの肩を抱いた。

「こんな状態のシエルを戦場へ連れて行くことはできないし……カイをここに連れてくることもできないわ

⋮⋮

クロエがうつむき、一肩を震わせる。

クロエだけではない。誰もが奇跡にすがりたいのだ。でも——結局、なにもできない……方法がない……

皆が静かになる。

そのときである——

「……私が……行くわ……」

皆が目を見開いた。シエルが——苦痛にうめいていたシエル王女が——ぶるぶると震えながら、体を起こす。

腕は赤黒く焼けただれ、薄く煙^{うす}が上がっていた。

生きながら焼かれるその痛みは、耐え難いもののはずである。

それでも――

それなのに――

「……カイの……ところに……行く……！」

シエルが壮絶な表情で、立ち上がろうとする。腕に力が入らず、もがくように身を捩よじつた。

ミリアとクロエは――

「ば、ばかあああ！ シエル！」「やめて！ やめてよおお！」

一泣きながら、彼女を止める。

見ていられない。

自分の心配より、カイのことを心から思っている彼女の悲痛さを一直視できない。

「……行か……せて……」

「だめ！ 絶対にだめ！」「シエル！ やめて！」

死んじ

やうよおお！」

「う……うう……ううううう……！」

——涙を流した。

その涙は自分のためではない。苦痛のためでもない。
それは——カイのため。

一人戦つているカイのため、苦しんでいるカイのため、
痛みに耐えているカイのために流す涙。

ミリアも、クロエも、ヴィーも、泣いた。

シエル王女の悲しみを思つて泣いた。

カイのために泣いた。すがりつく奇跡の欠片^{かけら}すら、もはやない。
絶望の淵^{ふち}に沈む四人。

だが |

じやりと砂を踏む音が響く。

満身創痍^{まんしんそうい}の彼女たちの前に、それは不意に現れた。

現れたのは——奇跡。奇跡の欠片。

それは |

シエルが、ミリアが、クロエが、ヴィーが——目を見開いた。

「……あ……あなた……たちは……！」

シエル王女の途切れ途切れの声に——三つの影が答える

るー

* * *

一まだだ……

立ち上がることやえおぼつかないカイだつたが、それ
でも一諦めていなかつた。

まだ生きている。

まだ一終わらない！

「さらばだ！ 勇猛なる暗黒騎士よ！」

フウカの槍が迫つた。直撃すれば、一撃で終わる！

一かわせええええええええつー

カイは力の限り、叫んだ。

「**全身武装^{フルアームズ}錬成^{アルタ}**」——解除！」

武装が剥^はがれ、光の粒子となつて消えていく。

その身軽になつた体で、カイは、辛うじて槍をかわすと一走り出した。

すかさず土をつかみ、槍遣いの顔目掛けて投げる。

「く！ もうよせ！ なぜ諦めない!?」

フウカは土の当たつた顔をしかめると、いつそ悲しそうに槍を構えた。

「承知した……塵芥^{ちりあくた}と化すまで諦めないというのなら——仕方あるまい。我が奥義で、魂^{たましい}ごと滅するのみ！」

槍遣いフウカが気合いを込め始める——

武装を解き、ぼろぼろの制服に戻ったカイ。槍がかすつただけで、確実に、すみやかに、死が訪れる。

それがわかつていて――それを完全に認めていながら――カイは――諦めない。

必死の形相で、決死の覚悟で、槍遣いから距離を取る。策はない。

打つ手はない。

勝てる見込みなど欠片もない。

それでも――カイは諦めない。なぜなら――

「はああああああああああ！」

王宮聖騎士が、辺り一帯を震わすように、気合いを込める。

「うおおおおおおおおおお！」

カイも、それを打ち消す勢いで、吠える。

なぜならー

それがカイだから。

カイ・ブラッディアだから。

無謀^{むぼう}さではない。傲慢^{ごうまん}さではない。尊大^{そんだい}さでもない。

カイは知らないのだ。

ただ、知らない。

諦めるという言葉は、カイにはない。

それが王国最強の暗黒騎士——カイ・ブラッディア。

カイは、諦めることを、知らない！

そのとき——

「む!?」

フウカの注意が逸れる。

カイは——息をのんだ。

「カイイイイイイイイイツ！ 戻つてえええ！」

叫びながら走ってきたのは——聖騎士ミリア・ソレル。

さらに驚いたことに——

「お兄いいい！ シエルのところに！」「オレさまの命

令だあ！ 戻れ、カイイイツ！」

——妹のクロエと、重傷を負ったはずのヴィレッタまでもが走ってきた。

「な……なぜ！　なぜ一動ける!?」

「なぜならー

「それはー私が治療したからです！」

「その声はー

長い髪の女子生徒が、スカートを振り乱して姿を現す。

「あ……あなたは!?」

そう、彼女はー超過治療操る治療師ーモニカ・ア

ヒーラー

ベルである。

「な……どういうことだ!?」

カイが驚きの表情を浮かべた。

槍遣いフウカは、戦場に足を踏み入れた女子生徒に、すかさず槍を向ける。その瞬間ー

「もう！ 邪魔をするか！」

——無数の矢^やが、フウ力に降り注いだ。すべて槍で叩き落とされたが、邪魔をするのには十分である。

その矢を放つたのは——

「まさか……あなたは！」

「ふふん！ 一度、王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}と戦つてみたかつたんだ

よ！」

——副会長にして、レアスキルを持つ高レベル聖射手^{アーチャー}アーチャー

——リツツ・ローエン。

そして——

「愚かな……一気に片付ける！」

槍遣いが、槍を伸ばし、辺り一面を刈り取るよう振

るう。しかしー

「な！ 貴様もか！」

——黒い人影が数十体も現れ、フウ力の槍を止めようと殺到した。その影、召喚魔ファミリア（二重身）を操るのはもちろん——

「キース会長！」

——生徒会長にして、高度な剣術スキルを持つ召喚士モナー——キース・クルーゼ。

キース会長がカイに駆け寄ると、彼の体を起こした。

「謝罪は後でさせて欲しい……本当にすまなかつた……。

君が、僕の中の蟲を殺してくれたおかげで、モニカやりツツも、蟲の支配から逃れることができたんだ！」

カイが目を見開く。

「そ……そ……うか……二人の親蟲だつたのですね！」

モニカとリツツが、うなずいた。

ミリアが近寄つて続ける。

「みんな化おとりとして出てきてるのよ！ シエルのところに戻つて！ ——あの力を使うのよ、カイ！」

皆が決死の形相でうなづいた。

「あの力……？」 腐屍竜戦ドランゴンジンビのときの!? しかし！

「行つて、カイ！ そして——早く戻つてきて！」

「お兄！ 早く！」

「カイ！ 師匠ししゃうの命令が聞けないのか！」

ミリアが、クロエが、ヴィーが、日々に叫ぶ。

み、みんな！

カイの顔が歪んだ。

化になるなど、正気の沙汰ではない。

相手は王宮聖騎士ロイヤルパラディンなのだ。

敵が本気を出せば、数瞬で全滅する。

しかし、カイは—

目を固く閉じ、歯を食いしばつた。そして—
覚悟を決める。

「わかった！　すぐに戻る！　それまで—耐えてくれ！」

皆が声を上げ、うなづき—槍遣いと対峙たいじした。
恐怖に震える体で、フウカの行く手を阻む。

全員が死を覚悟して時間を稼ぐ中、カイは—
すまない……みんな—

すぐ戻る！

力を振り絞り、全速力で、シェルの元へと駆け戻る

そして—

ついに二人は—

「シェルううううううううつ！」

「……カ……カイイイイイツ！」

カイが駆け寄ると、シェルは崩れるようにカイの胸に倒れた。

熱を持つた体が燃えるように熱い。彼女の体は絶え間なく震えていた。

ああ……！

カイはシエルを一抱きとめる。

その折れてしまいそうなほど細い体を、優しく包み込んだ。

「すまない……すまないシエル！　俺がもつと気をつけていればこんなことには！」

シエルは、カイの胸に顔を埋めると、首を振った。

「……いいえ……カイが無事で……よかつた……ほんとうに……よかつた……」

カイは思わず奥歯を噛みしめる。

こんなときにもう、シェルは、カイのことを思つているのだ。

「カイに怪我がなければいい。

カイが無事ならそれでいい。

カイは改めて思う。

俺は、シェルに守られてばかりだ――

そして――いまからまた、シェルの力を借りることになる。

生命力を吸収することになるのだ。

治療師モニカの魔法で、幾分回復したシェルだつたが、それでも――

シェルの体が持ちこたえられるのか、わからぬ。

カイは、シエルの肩にそつと手を置き、体を離す。

彼女の蒼白な顔を見て、我知らず眉根を寄せた。

カイの顔を見て、シエルは、そつと口を開く。

「カイ……私を見て……」

「……シエル……」

シエルは微かすかに口元を上げた。無理やり、笑みを見せた。

「こう見えて……私……強いのよ……だつて！」

彼女は誇らしげな表情で、カイを見つめる。

「だつて私は……カイの……隣となりに立つ……人間だもの

……」

カイは思いきり唇を噛んだ。

シェルが続ける。

「私も戦うわ……カイと一緒に……戦う！」

ああー

カイは思う。

シェルは——ほんとうにすごい人だ。

強い人だ。

カイは唇を噛み締め、シェルを見つめた。

そして——心の底から、ありつたけの想いを込めて——

□を開く。

「わかつた……シェル。お前の——命をくれ

シェルがうなずいた。

「カイ——私の命を使って

瞬間——彼女の体から光がほとばしり、カイの中へと吸い込まれていく。

「くくうううううううつ！」

シエルが辛そうにうなり、眉根アブソーブを寄せた。

それは暗黒騎士スキル——アブソーブ『吸收』。

相手から生命力を譲り受けるスキル。純度の高い神聖力が溶け込んだ、清らかな生命力が、一気に、一息に、カイの中へと吸い込まれていく。

カイの中に強烈な光が流れ込む。カイの中に命の奔流ほんりゅうが溢あふれかえる。

カイの体内の魔力経路が輝くと——神聖力と暗黒力が互いに速度を増しあい——落ちていく。深く、深く、深

く一落ちていく。

相反する二つの属性力が、混じり合い、溶け合。光と闇の二つの力が、絡からみ合い、繫つながつていく。

それはまるで、カイとシエルの二人が、手を取り合つているよう—

シエルは震えながら、うめきながら、目の前の大切な人を見つめる。

彼女にとつて、自分の苦しみなど、辛さなど、なにほどでもなかつた。

シエルはカイの姿を見て、溢れそうになる涙を懸命に堪こらえる。

ああ……カイ……

こんなにぼろぼろになつて——

こんなにひどい怪我を負つて——

こんなに疲れ果てて——

彼女が眉根を寄せ、辛そうにカイを見た。

剣を無くし、装備も壊れ、体力も、気力も、魔力も、生命力も、属性力も、ぜんぶ失つた、こんなひどい状態なのに……あなたは……あなたはそれでも——

シエルは唇を噛み締めた。

——私を助けようとしてくれたのね。

——私を守ろうとしてくれたのね。

堪えきれず、彼女の目から、涙が溢れる。

ありがとう……ありがとう、カイー

私は……あなたに守られてばかりだわ……

彼女は目を閉じ、うつむいた。

「でも――

シエルが目を開け、顔を上げる。

だから――

彼女の瞳^{ひとみ}に、力が宿る。

今度は――私が守る――

シエルの体が、輝きを帯びはじめた。

私のすべてで――私のありつたけで――

カイを――絶対に――守る――

彼女は切に願う。彼女は心から望む。彼女は深く祈る。

だから――カイ！

シエルが両腕を広げた。

わたしの！

ぜんぶを！

――受け取つてえええええつ！

瞬間――シエル王女の体が、目もくらむほどの強烈な光に包まれた。

いつたい、何が起こったのか――彼女自身にもわから
ない。

しかしシエルの願いは――カイを守るという望みは一
天に届いた。

この極限の状況で、シエルの中の「何か」が、発動し

たのである。

彼女から発せられた光が、柱となつて空に放たれ、雲を貫いた。その光の柱が回転しながら太く広がると、その先端が花がほころぶようにゆつくりと、厳かに開いていく

縁が波のように揺れ、次第にノコギリの歯のような形へと変化していった。

その途端^{とたん}、辺りの森が一斉^{いっせい}に静まり返る。それはまるで、動物たちが、植物までもが、高貴なる者の御前^{ごぜん}で頭^{こうべ}を垂れたかのようないいふ畏怖^{いふ}の混じつた静寂^{せいじやく}であつた。

静謐^{せいひつ}の中、辺りを圧倒する、崇高^{すいこう}なる輝き——遠くから見れば、その光は、こう見えただろう。

空に浮かぶ、巨大な——王冠。

おうかん

シェル王女から放たれた、光の柱が花開いた瞬間——
ぐーぐーおおおおおおおおおおつ！

強大にして甚大、壮大にして膨大な力が、一氣呵成に、
怒涛のごとく、激流のように、カイの体に流れ込んだ。
ううう！ ううううううううつ！

膨大な力が、溶け合い、混ざり、らせん状に絡まり、
その下の未知の領域へ——急速に、急激に、急流となつて、
落下し——降下し——落ちて、落ちて、落ちて——

強烈な衝撃が——強力な衝動が——強大な力が——いま
——カイの中で——

ツツツ!!

一弾ける!

「がああああああああああああああつ!!」

カイが体をがくがくと震わせ、叫び声を上げた。
「がつ！　がはつ！　ぐつ！　ぐはつ！　がはあああ
ああつ！」

苦しそうにうめき、叫び、体を硬直させ、拳を握りし
める。

カイの髪の毛がぶわあつと逆立つと、その髪が——
気に伸びていった。黒かつた髪は次第に色が抜け、黒銀こくぎん
の輝きを帯びはじめる。制服が吹き飛び、傷だらけの上
半身が顕あらわになつた。

そして一體を覆うように、武装が形成されていく。

その途端ー

「ぎやあああああああああああああ！」

想像を絶する激痛にカイが叫んだ。その武装は体を覆うというよりむしろ一カイの皮膚ひふを侵食するよう形作られていく。ギリギリとカイの肉を削り、骨に喰い込む。

暗黒騎士のものではない、ましてや聖騎士パラディンでもない
異質異様な〈全身武装鍊成〉。

禍々しくも、神々しい、その黒銀の武装は一まるで、

カイの第二の皮膚のようであつた。

「ぐ！　が！　ぐぐぐぐつ！」

目を固く閉じ、苦しみにうめき、のたうち回る。侵食される。侵入される。巨大な力が、カイの体を、カイの意識を、カイの魂をこじ開け、蹂躪じゅづりんしていく。そして――

「がああああああああああああああああああああ！」

武装が全身を侵食すると、カイは激しく震え——カツと目を見開いた。

その瞳の色は、青みがかつた銀。その輝きは、さな

がら月光である。

カイは歯を食いしばり、体を大きく震わせた。

………」れは――・

カイの体内に、触れれば大爆発を起こすような強大な

力が渦巻いている。皮膚のすぐ下を蠢く膨大な力の気配に、カイは唇を思いきり噛み締めた。

意識はある。記憶はある。意志もある。だが――
力を……制御……できない！

体の内側から溢れてくる力に振り回され、その有り余る衝動に突き動かされる。

目の前で倒れているシェルに、手を伸ばそうとするが――
だ……駄目だ――やめろおおおおおお――
――その腕のあまりの速さに、自分の手首を懸命に摑つかんで手を止めた。

力加減が――できない！

この状態でシエルに触れようとすれば、きっと彼女を壊してしまう！

力を抑えろ——押さえ込むんだ——
ぐぐぐぐ……ぐぐぐうう……！

膨大な力の噴出を抑えるため、カイは思いきり、体を硬くする。力を入れ過ぎるあまり、目の血管が破れ、血の涙がにじんだ。

カイは奥歯を思いきり噛みしめると——強烈に震える体で立ち上がり、横たわっているシエルに目をやる。
すまない……そのままにしていくことを許してくれ——みんなが……待つてるんだ——

カイは戦場の方向を睨むと——

行つてくる！

カイは爆発的な勢いで地面を蹴ると、驚くべき速度で戦場へと舞い戻る——

そして戦場では——

「離れて！ 離れてええつ！」

ミリアの叫びに、キース会長が辛うじて槍遣いから距離を取る。

戦場は、すでにフウカが支配する領域と化していた。回復役のモニカが早々に狙われると、聖射手アーチャーリツツが彼女をかばい、二人とも土まみれで地面に倒れていた。まだ息があるだけ奇跡である。

ミリアとキース会長が、槍遣いに対し、無謀な近接戦を挑んでいた。

「この戦場に立ち入るならば——このフウカ、容赦せん！」

槍遣いフウカが豪快に槍を振るう。聖騎士ミリアとキース会長は、その槍を「くくうつ！」体勢を低くして辛うじてかわすと、フウカの間合いに飛び込んだ。

「ひゅつ！」「はああああっ！」

ミリアと会長が、決死の覚悟で、連續刺突を繰り出す——が——

フウカの周囲で火花が散り、二人の剣が阻まれる。即席の連携攻撃など彼には効かなかつた——だが——

狙いはそこではない。

ミリアが叫んだ。

「クロエつ！」

ミリアたちの攻撃はただの誘導。槍遣いの後方でクロエが立ち上ると――

「〈食屍鬼〉――捕まえてえええつ！」

「む！」

槍遣いの足元から〈食屍鬼〉たちの手が伸び、彼の足を我先にと撼む。クロエは最後の支配力を振り絞り、〈食屍鬼〉^{グール}を地下に召喚していったのだ。すべては――

今度はクロエが必死の形相で叫ぶ。

「頼んだ――チビれつたああああああつ！」

「なに！」

フウカが初めて、警戒態勢を取つた。槍遣いは、いつの間にか、自分が、光の球に囲まれていてことに気づく。あらゆる場所に浮かぶ、無数の光球。

小柄な天才賢者セージが口元をにやりとさせた。

ヴィーは、モニ力の治癒魔法で、少量ではあつたが魔力を回復させていたのである。

一連の攻撃は、すべてこのための布石ふせき——

それは光属性攻撃魔法——その名も——

ヴィーがフウカに狙いを定め、手を振り下ろす。

「ぶち抜け！——スパークル閃光ブレーカーツ！」

無数の光球が光線状に変化すると、フウカ目掛けて——

斎に放たれた。それは敵を貫く光の槍。逃げ場など一
どこにもない。

「おつしや……もらつたああああつ！」

「ヴィーが叫ぶ。ミリアが、会長が、固唾かたづをのみ、クロ
エが眩まぶしさに目をそむける。

左右から、前後から、上下から、あらゆる方向から迫
る〈闪光スパークル〉が、槍遣いを串刺しにする——その瞬間——

「な……なにいいいいいいいつ!?」

ヴィーが大声を上げ、皆が信じられないという顔をし
た。

「う……嘘だろ……」
槍遣いフウカは、体幹をわずかに逸らすだけで——

すべての〈閃光〉をかわしていった。

皆は息をのみ、思い出す。必死で忘れようとしていたことを思い出す。

彼は最強の中の最強——王宮聖騎士。

全員が束になつてかかつても——到底敵うはずのない別格の相手なのだ。

槍遣いの背後に浮かぶ巨大な眼。その眼を見ることができる者は、ほんの一握りである。

フウ力に匹敵するほどの才能ある戦士にしか、そのスキルを視覚像として捉えることはできないからだ。

そのスキルは——〈達識達観〉。

未来を識り、未来を観る——予知予見の心眼である。

ロイヤルパラディン

しんがん

槍遣いがヴィーに目をやつた。

「なるほど……君が賢者か」

ヴィーが歯を食いしばり、フウ力を睨む。

「君から先に、片付ければよかつた——な！」

「ヴィー！ 逃げてええええ！」 「チビれつたあああああ！」

ミリアとクロエが叫んだ。

フウ力が放つ神速の槍が、ヴィーを襲う。天才賢者は

「賢者を——舐めんなああああつ！」

〈対物障壁〉——展開！

極小の〈障壁〉を一瞬で展開した。しかもその数一

七枚。青白く輝く七重の盾。ヴィー渾身の絶対物理防御である。しかし――

「な……馬鹿な!?」

槍の一閃に、〈障壁〉が次々と砕けていく。五枚目、六枚目が碎かれ――ついに最後の〈障壁〉が――パリンツ！――硬質な音を立て――砕け散る。その瞬間、ヴィーは――

「がつ！」

一凄まじい勢いで飛ばされ、向かいの木に激突し、そのまま一動かなくなつた。

「ヴィー……ヴィイイイイイイイイイッ！」「チビれつたあああああ！」

ミリアが、クロエが、壮絶に顔を歪める。しかし、助けに行く間などない。フウカが槍を豪快に振るうと——

「きやああああ！」「ぐはあ！」「いやああああ！」

まだ辛うじて立っていた全員が吹き飛び、地に倒れた。

フウカは槍を戻すと、再び静かに構える。

これが王宮聖騎士——

彼女たち全員が死力を尽くしても、敵う相手ではなかつたのだ。

「勇気ある若者たちよ——君たちに敬意を表し、痛みのないよう——一撃で屠ろう」

王宮聖騎士が槍を振りかざす。その槍の先に倒れているのは——

ミリアが顔を歪める。

——カイの妹、天才死靈術師クロエ。

「あ……あ……ああ……」

クロエが泥だらけの顔を上げ、体中を震わせた。それを見て聖騎士ミリアは——

「させ……ない！」

——ぶるぶるとあり得ないほど体を震わせ、切れるほど固く唇を噛み締め、ぼろぼろの体で一立ち上がった。盾もなく、レイピアは折れ、全身は傷だらけ。生命力はほとんど残されていない。

彼女の自慢の髪は土にまみれ、勝ち気な青い瞳は輝きを失っていた。でも——

それでも――

ミリアは槍遣いの前に立ちふさがる。最強を前に一步も引かない。

槍遣いフウカが、驚きに眉を上げた。普通なら、彼女のその状態で、立ち上がるはずがないからだ。

ミリアは大きく震えながら、フウカの前で両腕を広げる。

もう剣すら握れない。

これはただの一時間稼ぎ。

「……ミ……ミリア……」

泥まみれの顔を涙でくしゃくしゃにして、クロエが声を上げた。

ミリアは一度クロエを振り返ると、目を細める。

この子を、絶対に、私より先に死なせない——

だつてクロエは、私の——可愛かわい妹だもの！

槍遣いが小さくうなずくと、ミリアに穂先を向け——
「よからう、気高き聖騎士パラディン。その心意気に——応えよう！」

——槍を振り下ろす。

「ミ……ミリアああああああつ！」

クロエの悲痛な叫び。ミリアはすつと目を閉じると

——私はここまで……あとは……任せたわよ——
カイ！

ミリアの頬を涙が伝う。

そのときである——

「な——なんだああああああ!?」

槍遣いフウカの直上から、凄まじい速度で急降下して
きたのは——黒銀の輝き。

王宮聖騎士ロイヤルパラディンが顔を歪め、大きく後方へと飛び退つた瞬間——
その輝きは地面に直撃し——

「がはあああああつ!」「きやああああああ!

辺り一帯を一吹き飛ばした。

地響きのような轟音ごうおんが響き渡る。地面がえぐれ、土が
吹き飛び、大量の砂煙ばくれつが舞い上がる。

それはまるで、爆裂魔法の直撃だつた。

砂や小石が降り注ぐ音が、ひつきりなしに聞こえる。皆が土にまみれ、地面に転がっている。槍遣いフウカだけが距離を取り、油断なく槍を構えていた。

砂煙が徐々に薄れ、落ちてきたものが、次第に、姿を現す。

大きくえぐり取られた大地、その穿うがたれた大穴の中心に立つていたのは――

皆が息をのみ、目を見開き、凍りつく。

――黒銀の長い髪を振り乱した男。

その体は、黒々とした外骨格がいこっかくのような武装で覆おおわれていた。

得体の知れない圧迫感。逃げ出したくなるような絶望

感。禍々しさと神々しさを併せ持つ奇怪な存在感。その場にいた全員が、身震いする。

ミリアが恐る恐る、尋ねた。

「カ……カイ……なの……？」

震えながら振り向いた彼の顔を見て——ミリアが、クロエが、目を見開き、顔を歪めた。

これは——

見たこともない青黒く輝く瞳と、目の端から流れる赤い涙。

ああ……！

これは——私の知ってるカイじゃない——

これは——私のお兄じやない——

これはーカイ・ブラッディアではーない。

神々の持つ純粹さとー悪魔の持つ殘忍さ。

二人はそこにーカイの形をしたー神魔しんまの姿を見た。

喉のどから絞り出すような声を上げる。

「……離れて……いろ……ぜつたい……近づく……な

⋮⋮⋮

ミリアとクロエが、息を飲み込んだ。

「な……なんだ……なんなんだお前は！」

槍遣いフウカが、震える声で問うとーカイが一ぎり
りと振り返る。

その目、その顔、その姿ー振り返ったカイを一目見

た瞬間ー

王宮聖騎士ロイヤルパラディンは息をのみ、後ずさりした。体が芯から震

え、髪が逆立ち、顔が恐怖でこわばる。

「う……うぐ……ぐぐう……」

喉からこぼれる、悲鳴の出来損できそこないのような音。

彼は本能に従うべきだつたのだ。

すぐに逃げだすべきだつたのだ。

だが、ロイヤルパラディン一誇りある王宮聖騎士ロイヤルパラディンには、一殉じゆんじる信念のある

男には一逃げるという選択肢はなかつた。

カイが、青黒く輝く瞳で、槍遣いを睨む。

もう、自分の力を、抑えられない。

力が一暴走する！

「うおおおおおおおおおおおつ！」

カイの黒銀の髪が、一気に逆立つた。

「騎士殿——お覚悟おおおおおつ！」

「く！このフウ力、受けて立つまで！」

槍遣いフウ力が叫び、覚悟を決めると槍を構えた。彼は最強の中の最強。今まで数々の戦場を駆け、修羅場しゆらばをくぐり、あまた数多の敵を滅ぼしてきたのだ。

逃げることはもちろん、立ちすくむことさえ一許されない。

「せい！」

フウ力が神速の槍を放つ。その鋭さも速さもいまだ健在。

「しゃつ！」

カイは恐るべき速度で、敵に襲い掛けた。そのまままるで銀の弾丸。だんがん無数の槍の攻撃をぬるりと避けながら、見る間にフウ力に迫っていく。その動きの凄まじさに気づいたのは、相対する槍遣いだけだった。

槍遣いが、震える。

カイは空中で一軌道を変えているのだ。

「ば、馬鹿な！ばかあり得ん！」

その動きは、空中機動を可能とする高度な魔法を使わなければ、成しえないものだつた。

しかし、フウ力と百戦錬磨の王宮聖騎士ロイヤルパラディン——

「ふつ！」

すかさず槍を引き寄せると、空間を刈り取るように薙ぎ払い攻撃を放つた。点攻撃を面攻撃へと瞬時に切り替えたのである。その卓越した技の冴え。^さ横薙ぎの攻撃がカイに迫る。

だが——驚くのは、またもや槍遣いの方だつた。次の瞬間——

「な——」

フウカが思いきり、息をのむ。

カイは——薙ぎ払った槍の上に——立つていた。

「なんだとおおおおおおお!?」

カイは槍の上を滑ると、一気にフウカの懷に飛び込む。
しかしカイは得物^{えもの}を持つていない。剣を装備してはいな

いのだ。

「剣もなく、どう攻めるつもりだ！」

フウカが槍を払い、カイを振り落とそうとするが、もう遅い。カイが槍を足場にして跳躍ちようやくすると、すれ違さくいざまに腕を振るい——

「ひゅう！」

「ぐくううつ！」

——フウカの肩口せんこうを斬った。

飛び散る鮮血せんけつ。衝撃に体勢を崩す王宮聖騎士ロイヤルパラディン。

うじて踏ん張ると、信じられないという顔で傷口きずを睨む。

カイは——

「ば……化け物があああ！」

一貫手^{ぬきて}で、フウ力を、斬ったのだ。

カイが手を振り、指についた血を払い落とす。カイは膨大な力に飲み込まれ、敵を倒すという衝動に突き動かされ、戦闘機械と化していった。意識はあつたが、自分を抑えることができない。力を制御できない。

ミリアとクロエが、恐怖に震えながら、その尋常ならざる戦いを見ていた。

あれは……人の動きじゃない——

二人は人間離れした戦いに興じるカイに、戦慄する。

槍遣いフウ力は、一度槍を振るうと一再び構えた。

ふうと静かに息を吐き、心を落ち着かせる。

「たとえ敵がなんであろうと——神魔の類^{たぐい}であろうと！

私の眼からは逃れられん！」

フウカの背後に浮かぶ、巨大な二つのまぶた。

「〈達識達観〉——開眼！」

ぎろりと、二つの眼が開く。未来を識り、未来を観る
——予知予見の心眼。

「さあ——勝負だ、暗黒騎士！」

王宮聖騎士ロイヤル・パラディンが槍を構える。カイが彼の正面に立つた。

二人の最強が——再び対峙する。

一瞬の静寂。そして——

「ツ！」

先に動いたのはカイ。一步踏み出したその瞬間——が
ちり——時間は止まり、フウカの〈達識達観〉が発動する。

見開かれた眼が、カイの未来の動きを見る、観る、視る。

しかし――

「な……どういうことだ!?」

槍遣いがたじろいだ。

〈達識達觀〉は確かにカイの未来を観た。

観たはずだつた。

しかし、カイの未来像は――今と何ら変わりがない。

静止したままである。

その意味は――

「み、未来が――ないだと!? 馬鹿な!

そんなはずが

――ない!」

フウカの背後の眼がさうに見開かれ、彼はさうに深く、

さらに遠く、カイの未来を観る。

そこで槍遣いが観たもの——それは——

「……な……なんだ……なんだこれは！」

カイの未来の動きがぼんやりと観えてくる。しかしその動きは——無限の足さばきに、無限の体さばきに、あらゆる種類の動作に分岐し、収束しない。

フウカには、無限に分岐したカイの残像が見えるだけだった。

「嘘だ！　ぐぐ……まだだ……もつと……もつと深く！

〈達識達觀〉——大開眼！』

槍遣いの後ろに浮かぶ眼が——カツと見開かれた。極限まで見開かれた眼で、フウカは〈達識達觀〉を発動さ

せる。

確定する未来を求め、収束する将来を欲し、
観くがカイの未来を観測する。カイの動作を感覚する。
カイの可能性を探索する——だが——それでも——

観えるのは、無限に分岐した、カイの残像——

「な……なぜ……なぜ未来が確定しない！」

無理なのだ。無駄なのだ。無茶なのだ。無謀なのだ。
カイの動きは誰にも予想できない。神ですら予測でき
ない。悪魔でさえ推定できない。
なぜなら——

カイは、無限の可能性へと分岐する、その一步手前に
留まっているからだ。

無限に「いま」を引き伸ばし、未來の動作を極限まで遅らせる——カイは敵の攻撃^{やいば}が皮膚に届く寸前まで動かない。相手の刃^{やいば}が原子一個分の距離に近づくまでそのまま留まる。限界ぎりぎりまで、判断を保留するのだ。

カイは限界まで「いま」にとどまり、极限まで自身の行動を決定しない。

これが、カイの未来を予測できない理由。
無理やり観ようとすれば、その未来は無限に発散し、決して収束しない。

そう。カイの動きは——未来は——絶対に——確定しないのだ。

「……うそだ……うそだあああああ！」

確定しない未来の事象を捉えることは、〈達識達觀〉にもできない。

フウカの背後に浮かぶ巨大な眼から一どろり一血の涙が溢れ出る。その途端――

「ぐわああああああ！」

フウカが目を押さえ、叫んだ。負荷を掛けすぎたスキルが崩壊したのである。

〈達識達觀〉一破れたり。

がちり一時間が動き出す。

速度を超越した予知予見の攻防が終わりを告げた瞬間――カイの強烈な貫手が、蹴りが、フウカのあらゆるところに叩き込まれ――「が！　がは！　ぐ！　がはああ

あ！」——彼は吹き飛んだ。

二度、三度と地面を跳ね、壊れた人形のようになに、彼は地面に転がる。

王宮聖騎士ロイヤルパラディンになつて以来、このように地に倒れ、空を見上げるのは初めてのことだつた。もはや動くことさえできない。フウ力が苦しげに口を開いた。

「ぐぐ……見事、とは……言わんぞ……。剣を捨て、力に溺おぼれ、騎士であることを忘れた、哀れな暗黒騎士よ……」

だが——

「……な……」

カイは忘れていた。騎士であることを、剣士で

あることを、決して忘れてはいなかつたのだ。カイの剣
はー

フウカがうめく。

「あ……あああああ……あああああああ！」

一遙か上空にあつた。

巨大な剣が、空に、浮かんでいる。

その巨大さに、壮大さに、莊厳さに、フウカが、皆が、
目を見開いた。

カイが空を見上げるとー

「おおおおおおおおおおおおおつ！」

一大声で吠え、手を思いきり振り下ろした。

大剣がフウカ目掛けて、恐るべき速度で落ちてくる。

雲を斬り裂き、空気を突き刺し、衝撃波で辺り一帯を震わせながら落ちてくる。

その剣の名は——〈零^{ゼロ}〉。

究極の生命力を供物^{くもつ}に創り出された、究極の剣——剣が迫る。空気が裂ける。大地が震える。木々がなぎ倒される。地面が吹き飛ばされる。赤熱した空気をまと^{ゼロ}う〈零〉が目前まで迫ると——槍遣いフウカは——最後の叫びを上げた。

「ぐぐぐぐぐぐうううう！　おのれ……おのれええええええ！　やはり我が眼^{まなこ}は曇^{くも}つていなかつた！　間違つていなかつた！　おまえは危険だ！　王国に仇^{あだ}なす者だ！

それどころか——おまえはいづれ、人に、世界に、仇な

す者となるだろう！　—忘れるな！　そのこと、ゆめ

忘れるなあああああああ！」

「巨大な刃に貫かれ、強大な衝撃波と高熱にさらされ
一フウ力が一瞬にして消滅した。

衝撃に轟音が鳴り響き、大地が裂け、土が吹き飛び、
大きな砂煙が上がる。

そして——やがて——

轟音が収まり、雨のように振つてくる石礫いしつぶが止み、砂
煙が収まつてくると——辺りの様子こうりょうが顕あらわになつていいく。

戦場は大きな穴の穿たれた、荒涼とした大地と成り果
てていた。

その中心に、巨大な剣が刺さつている。

巨大で無骨で異様で、同時に、纖細で可憐で精巧な、
その剣。

究極の剣——〈零〉。

それはまるで、激戦を繰り広げた強敵を弾う、墓標の
よう見えた。

そして——その墓標の傍らに立つ男の姿。

ミリアが、クロエが、身じろぎせずにはじめに彼を見つめる。
すると——

巨大な剣が光の粒子となつて崩れはじめた。もう形を
維持するだけの力がないのだ。

男の長い髪が輝く粒子となつて溶け、全身の武装が剥
がれ、消えていく。

禍々しい気配も、神々しい感触も、まるで最初から無かつたように、消え去つていつた。

「……カ……カイ……？」

ミリアの問いに、男が振り向く。その瞳は——いつもどおりの深い藍色あいに戻つていた。カイは一度大きく震えると——

「がはつ！」

大量の血を吐き、体の至るところから出血して、そのまま、どうと倒れた。

「カイ！ カイイイイイイイツ！」「お兄いいいいいいつ！」

どのような力だつたのか、なぜこうなつたのか、誰に

もわからぬ。

それでもカイは一暴走状態になりながらも一
王宮聖騎士を倒したのだ。

カイ・ブラッディアード
最強の中の最強、王宮聖騎士序列十二位・槍遣いのフ
ウカをついに一撃破す。

エピローグ

その後、転移ポータしてきた学園の先生たちに保護され、シエル王女や力イたち、生徒会の役員ヨウいんも、無事に帰還した。王女の腕うでに取りついていた魔まほう法蟲うちゅうは、親蟲おやむしが殺されたことで活動を停止していたが、すぐさま剥離はくり処置が施された。生徒会役員たちの体内の蟲も、無事に体外に摘出された。

全員、重度の肉体的、精神的疲労により、数日間の安静を言い渡されることとなつた。

だ。

それは当然である。あれほどの激戦をくぐり抜けたのだ。
この程度で済んだのはまさに奇跡と言えた。
カイは全身の傷と極度の衰弱^{すいじやく}で、治療院に即刻入院させられた。

魔法蟲は、生徒会書記のモニカが購入したお茶に、卵の状態で含まれていたという。

購入店で調べても、輸入先しかわからず、どのような経路で持ち込まれたのかはわからない。

神聖近衛騎士団は、序列十二位・槍遣いのフウカの死

この
衛え

やりつか

亡を確認した。表向き、騎士団に動きはないが、彼を倒した暗黒騎士カイ・ブラッディアの名前は、各騎士団と王室上層部に広く知れ渡ることとなつた。

入院から二十日ほど経つてから、カイは目を覚ました。皆が無事な姿を見せ、生徒会の役員たちも正式に謝罪を申し出た。彼らは蟲に操られていた被害者であり、シエルもカイたちも、彼らを快く許した。その後、役員たちも御見舞がてら、気軽にカイの病室を訪れている。日を覚ましてから二週間。カイは、いまだ療養中である。

今日も、シエルやミリア、妹のクロエ、魔法院のヴィ

レツタが病室に顔を出していった。

クロエとヴィーは顔を合わせれば文句を言い合つたが、一緒にいることが多くなつた。いつの間にか仲良くなつていたようだ。そして――

「……すごい事件だつたわね。生きているのが奇跡みた
い。――全部、カイのおかげよ」

シェルの言葉に、皆が改めてうなづく。

カイは皆を見て、くちびる唇かを噛むと首を振つた。

「いや、皆がいてくれたおかげだ。それに――あれば俺
の力じゃない……。力を制御できずに、騎士殿も葬ほうむる結
果になつてしまつた……。俺がもつとあの力を使いこな
せていれば……」

悔しそうにうつむくカイの周りに、皆が寄り添うように集まる。

シエル王女が口を開いた。

「それでもよ……カイ」

カイが顔を上げると、皆が彼を見つめていた。

「それでも、カイがいなければ——みんな、あの戦場から帰つてこられなかつたわ」

「シエル……」

カイにうなずき、ミリアが続ける。

「そうよ、カイ。こうやつてまたみんなで集まれたのは、あんたのおかげだわ」

そう言つてから、ミリアは肩をすくめた。

「……まあ、もちろん、聖騎士パラディンであるこの私の功績は大きいけど？」

ミリアが言うのに、クロエやヴィーも声を上げる。

「それをいうならこの天才死靈術師ネクロマンサーのおかげじゃないの！ ねえお兄！」

「あ？ なに言つてんだ？ オレさまがいなかつたら、今ごろみんなここにいねーぞ！」

騒がしくなる病室。皆が笑い、カイも微笑ほほえんだ。

「そうだな……みんな、ありがとう」

しかし――

本当は笑つてなどいられない。みんなにもわかつていた。

事態はすでに学生レベルの話ではない。敵として
王宮聖騎士が現れたのだ。

もはや王国を巻き込んだ重大事件に発展しているのは
間違いない。

ヴィーがむーっと唸うなると、言いにくそうに口を開いた。
「あのな……お前らに言つといた方がいいことがあつて
……シエルのことなんだけど」

「私の？」

シエルが首をかしげると、ヴィーは腕組みをしてうな
つた。

本当に言いにくうことなのだろう。
「ヴィー。お願ひ、話して」

王女に目をやり、ヴィーが深い息を吐いた。皆も、ヴィーの言葉を待つ。

シエルのことは、もうみんなの問題なのだ。

「これを聞いたら一もう降りられないぞ?」

皆が目を見合わせると、力強くうなずいた。誰も降りる気はない。

ヴィーがゆっくりと口を開いた。

「オレさまが学園に来たのは、元々、カイの力を調べるためだけど一あればカイと一」

ヴィーがシエル王女に目をやる。

「一シエルの属性力が合わさつて起こるものだとわかつた。カイの魔力経路もかなり特殊だから、もつと調べ

ないといけないんだけど……オレさまは、シエルの方にも秘密があるんじゃないかって睨んでたんだ

皆が静かに、続きを待つた。

「だからオレさまは、シエルが療養中に〈鑑定〉を使つてみた

〈鑑定〉はヴィーが持つ、探索用の固有スキルである。

「……そうだつたんだ。知らなかつたわ……。それで？

なにかわかつたの？」

ヴィーはしばらくシエル王女を見つめると、唇を噛んだ。

「ああ……シエルは一固有スキルを持つてる。それも
リア中のリアだ」

「固有スキル……それは？」

ヴィーが続ける。

「〈王の器〉だ」

「王の……器……え？ 王の器!?」

シエルが思わず立ち上がり、口元を押さえ、息を飲み込んだ。その目が大きく見開かれていく。

「……やつぱり知つてたか……」

「……なんなんだ、それは？」

カイの問いに、ヴィーが答えた。

「〈王の器〉は——精霊の力を完全に引き出せる、超一級の固有スキルだ」

「な……精霊の力を……？」「完全に……？ す、すごい

⋮⋮

カイとミリアが驚きの声を上げる。ヴィーが首を振つた。

「それだけじゃない。こっちの方が重大だ。いいか？

この国で〈王の器〉を持つ者は——」

シエルが唇を噛み、顔を伏せる。

「継承順に閑わらず——王位につける

王位に……つける……

その言葉が皆に染み込むまで、しばらくかかつた。そして——

皆がその意味に戦慄した。
ヴィーが言葉を継ぐ。

「わかつたか？」理解したか？ シエルは——王になれる！ 第四王女だろうが、王位継承けいしょう第六位だろうが関係ない！ いいか、よく聞けよ。今までのシエルを巡る一連の事件は——」

皆を見回した。

「この中央大陸随一の大國、神聖アストレア王国の一王位継承争いだ！」

皆が息をのみ、シエルが体を固くする。

「オレさまたちは、この国の継承争いに巻き込まれたんだよ！」

病室が静まり返つた。無理もない。話の規模が大きすぎ、そして——危険すぎた。

今までの事件の背後には、間違いなく——王族である。

ヴィーが容赦なく続けた。

「これで王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}が出てきたわけがわかつたろ？」

〈王の器〉による王位継承争いのことでもちろんあるんだけど——シエルの〈王の器〉で創り出された高純度な神聖力を、カイは膨大^{ぼうだい}な力に変換できるんだ。どんな力なのかもまだわかんないけど、一人の属性力が合わさると、すげー力が生まれるのは間違いない……」

皆が目を見開き、ヴィーの言葉を待つ。

「その力を、あの槍遣いは——王国を脅かす危険なものだと判断したんだよ！」

病室に重苦しい沈黙が降りた。

シェル王女が唇を噛み、クロエが泣きそうな顔でミリアにすがりつく。

カイは歯を食いしばつて、拳を握りしめた。
事態は、皆が考えるよりも、遙かに大規模で、ずっと危険なものであつた。

カイが悔しそうに言う。

「……俺たちだけでは……もうシェルを守れないのか
……？」

その言葉が、沈黙の底へと消えていくころ――

『子どもたちよ。聞きなさい』

突然の声に、皆が窓際に目を向けた。そこにいたのは

「な……猫!?」

真っ白な輝くような毛並みの猫が、するりと、窓の隙間から病室に入つてくる。

「その猫がしゃべったの!?」

ミリアがシエルを守るように前に出ると、カイが素早く体を起こし、ヴィーがすかさず攻撃魔法を準備はじめた。そこで――

『静まれ、子らよ。驚かしてしもうたな。これは、わらわの伝達者である』

猫がしゃべっているのか、頭の中に直接響いてくるのかわからぬ声に、皆が目を見合させ、息をのむ。

『そなたらの事情は承知している。まずは名乗ろう。わらわはー』

猫がしつぽを優雅に揺らすと、皆を見上げた。

『王宮聖騎士・序列五位ー無剣のドロテ』

□、王宮聖騎士！

カイが驚きに目を剥き、シエルが、皆が、息を飲む。

猫が続けた。

『首輪に地図がある。すみやかに、誰にも見られることなく、指定の場所に参られよ』

カイたちが目を見合せ警戒を強めると、それがわかつたかのように猫は□を開く。

『案づるな、子ら。わらわは、シエルファー王女とそな

たらをー』

猫の瞳孔どうこうがきゅうと細くなつた。

『一擁護ようごするものである』

病室に別の種類の沈黙が降りる。誰も動けない。声すら出せない。

猫がベッドに飛び上がるとー

『わらわは去るゆえ、よく話し合つて決めるがよい。ただしーあまり時間の猶予ゆうよはないと知れ』

一カイの膝ひざの上でことんと眠り込んだ。

皆が身じろぎもせずに、丸くなつた猫を見つめる。ドロテなる人物が猫を操り、伝言を届けにきたのだ。その人物はすでに、その猫から去つたようである。

物——無剣のドロテ。

しかも序列は五位——本物ならば、王宮聖騎士の中でも上位に位置する騎士である。

シエル王女の固有スキル〈王の器〉。

そのスキルを発端とした王位継承争い。

カイがシエルとともに生み出す膨大な力。

そして——敵か味方かわからない王宮聖騎士。

対応次第で、みんなの未来が決まる——

事態は複雑で、状況は切迫していった。

沈黙のなか、皆が顔を見合わせ、混乱と戦慄に震える。

カイは一度唇を噛むと、苦しげにつぶやいた。

ロイヤル・パラディン

王宮聖騎士を名乗り、シエルたちを守るという謎の人

ロイヤル・パラディン

「……俺たちは……これからどうすればいいんだ……」
そのつぶやきが、重く、病室に沈んでいく。
カイたちは、すでに一後戻りできない場所に立つて
いたのだ。